

産政塾

21

產政塾

この編は、三十歳前後の前途有為な若者が
溢れる心の叫びを綴ったものである。

目次

● 産政塾21の発刊によせて		(財) 中部産業・労働政策研究会	加藤 裕治	
● 気づかせてくれたこと		名古屋鉄道労働組合	青木 寿夫	1
● 本当に殻の外に踏み出すことが出来たか!?		トヨタ紡織労働組合	赤井 康夫	11
● 前向きに挑戦する、楽しむ		デンソー労働組合	安藤 慎悟	19
● 殻の外へ踏み出すために必要なもの		株式会社豊田自動織機	石神 良介	27
● 産政塾で学んだこと		ジェイテクト労働組合	伊藤 篤史	35
● 隗より始めよ!		アイシン労働組合	今泉 基	45

・ 20代最後の1年と産政塾		53
----------------	-------	----

・ 動き出せ 私の中の列車		65
---------------	-------	----

・ “感謝”の気持ちを大切に		75
----------------	-------	----

・ 「殻の外へ踏み出す」ことへの一考察		83
---------------------	-------	----

・ 産政塾を振り返ってゝココロの変化ゝ		91
---------------------	-------	----

・ 産政塾を振り返って		103
-------------	-------	-----

・ 第21期産政塾を振り返って		113
-----------------	-------	-----

・ 産政塾を振り返って		125
-------------	-------	-----

トヨタ自動車株式会社 太田 寛

大丸松坂屋百貨店労働組合 大野 将幸

トヨタ紡織株式会社 加藤 貴子

トヨタ車体株式会社 兼松 誠也

東邦ガス株式会社 河井 勝貴

丸栄労働組合 川田 静枝

トヨタ自動車労働組合 後藤 幸治

株式会社デンソー 子安 隆太

・第21期産政塾を振り返って	アイシン精機株式会社	坂田 奈穂	133
・産政塾を振り返って	全トヨタ労働組合連合会	篠田 雄介	143
・自分にとっての「殻を破る（型を見直す）」とは	トヨタ車体労働組合	新開 寛	153
・第21期産政塾に参加して	フタバ産業株式会社	高田 正則	163
・産政塾に参加して	豊田市役所	棚橋 靖仁	171
・自分の「殻」を自覚して	全ユニー労働組合	寺澤 貴宏	181
・産政塾の活動を通して気づいたこと	株式会社東海理化	戸田 有香	189
・産政塾を振り返って	東邦ガス労働組合	橋本 善和	201

・ 一度きりの人生、これからが勝負！		211
・ 第21期産政塾で学んだこと		219
	豊田合成労働組合 馬場 裕美	
・ 産政塾を振り返って		229
	豊田合成株式会社 原 丈衛	
・ 産政塾を振り返って		239
	中部電力株式会社 平林 克章	
・ 私なりに、一歩前へ		247
	豊田自動織機労働組合 深谷 英貴	
・ 第21期産政塾を振り返って		259
	中部電力労働組合 福田さや子	
・ 産政塾活動記録		269
	産政塾事務局 高橋 若葉	
・ 歴代卒業生		283

産政塾21の発刊によせて

(財) 中部産業・労働政策研究会が主催している若手セミナー「産政塾」が、このたび第21期の活動を修了し、今期も27名の塾生が卒業いたしました。

産政塾は、毎年異業種の時代を担う20数名にご参加をいただき、約8カ月に渡って行うセミナーです。セミナーといっても、あらかじめ事務局が用意したものを受講するといった通常のスタイルとは異なり、参加した塾生が5つのグループに分かれ、そのグループごとに企画し、現地に向いて体験や教えを請うといったプログラムを組み、それを塾生全員で学ぼうとするものであります。また、産政塾は異業種の若者の集まりですから、多様性を取り入れた論議の場でもあります。企業や仕事の枠を越えて、お互いが夢を語り、講師を交えて論争をし、論争の中から新しいエネルギーが生み出されもします。この活動を通して、参加者は自らの考えを改めて検証し、自分自身の存在や役割を自覚することができることとなり、産政塾は言わば「自らを磨く道場」というようなものです。

今期も産政塾への参加者は30才前後の若者達であり、意欲においても能力においても次代を担うにふさわしい人材の集まりとなりました。

人間形成の基本の時期は青春期であると言われておりますが、仕事や家庭における人間としての枠を形成するのは30才前後からの10年ぐらいと言えるでしょう。一応仕事にも慣れ、自分で判断できる能力も備えつつあり、精神的にも肉体的にも充実し、仕事面でも家庭面でも先頭に立って活躍する時期であります。このような若者が集う産政塾は、今期も塾生がお互いに夢を語りあい、自らの企画によってその実践に情熱を注ぎ、そして8カ月にわたる活動を終え、このたび修了いたしました。

第21期にあたる2010年は戦後初ともいえる政権交替が、国民の選択で成されたという一種の高揚感の中で、業務の合間を縫い、塾生はこまめに各グループで集まり、よく話し合い、「創造性」「独創性」「チャレンジ精神」に富んだ実のある企画をしてくれました。このセミナーを通して、参加者一人ひとりが新しい時代に対応するパラダイム、ものの考え方を築くための「何か」を得ることができたものと確信しています。

この塾誌は、第21期塾生が産政塾での様々な体験を踏まえて、自らの想いを綴ったものです。ぜひご一読いただければと存じます。産政塾は小規模の催しですが、こうした塾誌を通して一人でも多くの方の共感を呼ぶことができればと思つて毎年発刊しています。塾生と同世代の方々の糧となることはもとより、指導的立場にある方々にとつても参考になることが多いと思います。

最後に、これまで産政塾の運営に対して格別の理解と協力を賜りました講師の方々をはじめ、関係各位の皆様感謝を申し上げます。また同時に産政塾および塾生に対して今後ともご指導、ご声援を賜ることができれば誠に幸いであります。

気づかせてくれたこと



名古屋鉄道労働組合

青 木 寿 夫

《プロフィール》

あおき としお

- 1968年 愛知県豊田市生まれ
- 1986年 名古屋鉄道株式会社入社
豊田市幹事駅配属
- 1987年 知立乗務区へ異動
- 1993年 名古屋運転区(現 名古屋乗務区)へ異動
- 2007年 名古屋鉄道労働組合
中部支部(現 鉄道中部支部)書記長 (専従)
現在に至る

〈趣味〉 釣り・鉄道旅行・スキー・ゴルフ

はじめに

産政塾。一度は聞いたことがある言葉であつたが、自分には縁のないものだと思つていた。組合専従となり2年が過ぎた頃、私に声がかつた。渡された案内を見ると、「入社して10年前後、意欲に溢れる若者たち」とある。えっ…、自分はもうその倍は経つているのに。一度は断ろうと思つたが、歳のことは二の次と考え、参加することに意義があるのだと思い、産政塾の門を叩いた。

テーマにある「殻の外へ踏み出そう」は、これからの人生で何を学ぶべきか、抽象的な感覚で生きてきた自分自身を少しでも変えられるのではないかと、感じるテーマであつた。

今回、多くの方々との出会いや体験を通じて、成長とまではいかないまでも、たくさんの方があつたことに感謝しながら、今回の産政塾を振り返つてみたい。

◇ 第1回 開塾式（1月22日）

第21期生として、やや緊張な面持ちで開塾式に臨んだ。参加者にはやはり若い方が多く、歳ことは二の次にして参加した自分に少し後悔した。そのような思いを抱きつつも、塾長講話が終わり自己紹介の時間となつた。私はCグループであつたため、先に自己紹介を行ったAグループやBグループの方々の話を聞いているうち、気持ちも楽になつた。私自身の紹介は何を話したのかあまり覚えてい

ないが、一応自己紹介にはなつていたと思う。

そして、グループ討議の中では異業種の仲間と知り合うことができ、企画も固めつつあったが、日程調整がうまくいかず、後々リーダーに苦勞をかけてしまう結果となり申し訳なかった。

夜の懇親会は、正直一番楽しみにしていた。いろいろな話をして打ち解けあい、とても楽しい時間をすごすことができた。私はかなり酔いながらも、この仲間たちと一緒に頑張つていこうと思った。

◇ 第2回壁を越えろ（4月14日）

いよいよ殻を破る企画が始まった。最初はフリークライミング、場所は横浜である。なぜ、山でなく都会の横浜なのかと疑問に思ったが、人工の壁を使ったボルダリングというスポーツを行うのとこのことであった。私自身、アウトドアには興味があつたので、一度やつてみたかったものの一つである。

倉庫のような建物の中には見事な人工壁があり、アウトドア雑誌で見たそのままのカラフルな石が無数に張り付いている。高さもかなりあり、私にできるのか、本当に登れるのか不安になった。最初は簡単な場所でも基本を教えてもらい、見事に登ることができた。そうすると少しずつ欲が出てきて、難しい場所にもチャレンジしてみたが、ゴール地点まで行けずに途中であえなく落下。見た目には簡単そうに見えるのだが、実際はかなり難しく、甘い考えの自分に反省。仕事の中でも何度か同じような経験があつたことに気づき、もう少し勉強しなければと再度反省した。

プロクライマーであり、今回の講師でもある尾川さんは、本当に努力家でバイタリティーのある女性である。ある手記の中で、「99%の努力と1%の運」「努力してもうまくいかないことがある」というようなことを書かれていた。私も同じような経験をしたことがあるので、今も気持ちに変わりが無いのか聞いてみたかった。尾川さんは、「マイナス指向ではなく、人生をプラスに考えて変えていき、目標を具体的に立て、それに向かって自分を信じ進んでいくことが大切」と語ってくれた。

私自身、仕事でも日々の生活の中でも、壁に当たって進めないことがある。今回のボルダリング体験と尾川さんの話は、その壁を乗り越えて一歩前に進む勇気をくれる貴重な体験であった。

◇ 第3回 滝に打たれて自らを磨く（5月7日）

滝行。この言葉をまだ寒い時季に聞かされていたので、正直行きたくないという思いであった。しかし、私自身が仏教に興味があり、滝行の他に写経もできるとあって、当日は心も晴れやかに参加したが、天候は見事に雨であった。

静岡県袋井市にある油山寺は、今回が2度目の訪問である。前回は、秋の紅葉を楽しむべく訪れた。立派な山門をくぐり、本堂にある御本尊の前で、住職の説法を聴く。いつも思うことだが、どこのお寺の住職も心引き込ま



れるお話をされ、そのお話を聴くたび心が洗われるような感覚になる。今回も同様、本当にありがたいお話をしていただいた。

特に心打たれたことは、「恩恵を一方的に受けることを望むのではなく、与えることが必要なのだ」との法話であった。自身、受けることばかりをつい考えてしまうことが度々あることに気づかされ、本当に恥ずかしい気持ちになった。

雨が降り続き、雨音しか聞こえない中での写経は、信じられないくらい集中して行うことができたが、正座をしている足の痛みに耐え切れず、最後まで正座で写経ができなかったことが悔やまれた。しかし、心落ち着けて写経し、自身を磨くことができたのは良かったと思う。

その後は、いよいよ滝行である。白装束に着替え入滝。首筋から背中にかけて当たる力強い水の力に耐えていると、いつしか心が「無」になる自分を感じた。寒く冷たい滝行であったが、やって良かったと本心から思える修行の企画であった。

◆ 第4回 今一度「豊かさ」とは何かを考える (5月28日～29日)

組合関係の行事があり、残念ながら参加することができなかった。1泊2日の企画であり、瀬戸内にある「直島」はぜひ行ってみたかった島だったので、本当に残念である。企画にあった豊島の廃棄物問題を学習し、現実を見ること。また、直島の文化や現代アートに触れること。ぜひ、機会があれ

ば自分の目で確かめてみたい。

◇ 第5回 行動力の源泉を知る（6月18日）

戦争が終わっても残っている物。120カ国に約1億個の地雷があると聞き、まだその国では戦争が終わっていないということを知った。山梨県にある山梨日立建機での雨宮社長の講演の中のことである。

大雨の中、クレーン車が立ち並ぶ工場の一室で、雨宮さんは自身の実体験を語られた。企業人として立派に成功されている方であるのだが、それ以上に地雷除去という危険な作業を国際貢献として実践している。困っている人を助けるために、自らの手で機械を開発し、自らその地雷のある現場に行き、自ら地雷除去作業をする。同じ日本人として尊敬し、本当にすばらしい人だと感じた。それに共感し、この会社で働いている方々の、仕事に対する誇りや現場力を感じられる工場の中にと、元氣になつてくる自分に気づかされた。

今回、雨宮さんにお会いできる機会を得て、人間としての生き方について正直考えさせられた。人のために生きることが、自分のためになるのか。自分が生きているのは、人のためなのではないか。前向きに、どんな困難なことがあるうともチャレンジし続ける雨宮さんに、少しでも近づけるよう頑張っていきたい。

◇ 第6回 減災のために何ができるか（7月16日）

私たちCグループの企画である。震災をテーマに防災意識を図っていくという企画であつたが、実際のところ中味が固まつたのは7月初めであり、グループで集まつての論議もなかなか進めることができず、私もサブリーダーとして反省している。しかし、今泉リーダーを中心に構想を練り上げ、現地への下見などもタイトなスケジュールの中で実施し、内容濃く企画を完成させることができたのは、事務局の高橋さんはじめ、Cグループ全員の協力のおかげだと感謝している。

当日、神戸の空は青く、朝から暑い一日となつた。NPO法人「I. 17 希望の灯り」の方々にご協力いただき、神戸市内にある震災の傷跡を巡りました。今の神戸は、15年前のあの光景からは想像できないほど復興し、その傍らにかすかに残る震災時の傷跡を見ると、当時を思い返し正直涙が出た。

ボランティアの方々が生き証人となつて我々に語りかけた言葉は、本当に心に響いた。自然災害に対し、いかに人間が無力であるか。過去の歴史を絶対に忘れず、犠牲になる人を一人でも減らさなければ



ばいけない。危機意識が薄く、日々を平穩にすごしている私にとつては、考えさせられることばかりであつた。

「減災」という考え方。我々がいかに学んで、いかに実践していくかということが大切である。あの大震災で亡くなった方々の多くの尊い命、そして想いを忘れないためにも。

◇ 第7回閉塾式（8月20日）

産政塾として最後となる閉塾式。都合により出席することができなかった。共に活動した仲間の顔が思い浮かぶ。楽しかったこと、嬉しかったこと、辛かったこと、苦しかったことなどたくさんあつたが、開塾式の時の顔と今の顔は全く違つてみえるのだろう。今回、出会えた多くの仲間感謝、感謝。

おわりに

「型」を大切にしながら殻をやぶる、加藤塾長が話された言葉だ。殻の外へ踏み出す、私はできただろうか。自問自答を繰り返す中で見つけたこと。それは、今までの自分を否定せず、これからの自分を生長させる。チャレンジ精神を忘れつつある、今の自分を変える努力を怠らないこと。今回の産政塾で多くのことを経験し、学び、たくさんの仲間に出会えて本当に良かった。これからの人生の中で、

今回学んだことは大切な礎として残っていくと確信しています。

最後に、加藤塾長、高橋さん、安藤さんはじめ、事務局のみなさん。そして、第21期生のみなさん（特にチームチカニシキのみんな）大変お世話になりました。



本当に殻の外に踏み出すことが出来たか !?



トヨタ紡織労働組合

赤井 康夫

《プロフィール》

あかい やすお

- 1991年 4月 豊田紡織株式会社 (現トヨタ紡織) 入社
人事総務部 配属
- 1996年 2月 技術管理部 異動
- 1998年 7月 株式会社ティービーハイテック出向
- 2000年 2月 技術管理部 異動
- 2001年 1月 人事部 異動
- 2003年 1月 内装企画室 異動
- 2004年10月 内装トリム設計部 異動
- 2006年 2月 第1トリム設計部 異動
- 2008年 9月 トヨタ紡織労働組合 執行委員
現在に至る

〈趣味〉写真撮影

〈家族〉妻、長女（8歳）、長男（5歳）

はつめい

昨年11月、上司でもある書記長から「赤井君はどうですか」と執行委員長のメモが書かれた塾生募集の案内とパンフレット、入塾申込書を手渡された事が、この貴重な7ヶ月間の体験をスタートするきっかけとなった。

産政塾の活動内容については昨年参加した先輩塾生から聞かされていたので、「何をするか判らない」といった不安は無かったが、パンフレットに書かれた「募集対象28歳〜35歳程度」の文字が少し気になり、まさに「殻の外へ踏み出す」気持ちで申込書をFAXした事を今でも鮮明に記憶している。そんな事から始まった産政塾も8月末で終了し、最後の課題となる塾誌の原稿をこれから書いていく訳だが、これまでの体験を通じて心に残った事を徒然なるままに書くと共に、自分は「本当に殻の外に踏み出すことが出来たか」について考えてみたいと思う。

今回の企画に込めた想い

今回私が所属したBグループの企画、「非日常空間と現実を対比させ、今一度『豊かさ』とは何かを考える。」に対する個人的な想いは、利益優先の結果として産業廃棄物の廃棄場所となってしまう島と現代アートを取り入れて地域活性化を行っている島を視覚的に対比（ゴミ⇄汚い⇄アート⇄美しい）させる事で企業の地域に対する使命をクロージアップし、企業の地域社会に対する関わり方を

参加者に議論して欲しいというものであった。結果は参加者それぞれが見聞きした事を基本的にグループ討議して頂いたことが全てであり、参加して頂いた方に「有意義な体験であった」と感じて頂けたのであれば、その目的は概ね遂げられた事になる。

また、もう一つの関心事としてはBグループのメンバーが企画立案時に何度も繰り返し話し合った内容について、資料写真では無く実物を見て、様々な人の話を直接聞く事で、新しく、今までとは異なる考えを持ったのではないかという事である。

結果については、当日の短いグループ討議の中で確認する事は出来なかったが、今度また皆で集まった際にじっくりと話し合ってみたいと思う。

なお、私の場合は柔軟性が欠如しているのか、あれ程多くの心に響く話を聞いたのにも関わらず、大きな考え方の変化はなかった事をお伝えしておく。

リーダーの資質

私達Bグループでは企画をまとめるのにあたり10回を超える打ち合わせを行ったが、常にその中心にあったのはリーダーの存在感であった。

この事について、開塾式の企画検討におけるエピソードを次に紹介したいと思う。



私達の企画テーマ「豊島問題と直島で現代アートに触れる」は当初「直島で現代アートに触れる」といった内容であり、提案したリーダーの熱い想いが込められたテーマではあったが、企画検討に関する話し合いの中でグループ内の意見は2つのテーマに絞られ、1つに決める事が出来ない状況に陥ってしまった。そこでリーダーは豊島問題をテーマに加え、対照的な2つの島を見学する事で問題意識を深めるという内容に変更、グループ内の意思統一を図ってしまった。十分な事前調査に基づく知識と議論の流れにに応じてシナリオを変更するという柔軟性には、正直驚かされた。

また、その後の打ち合わせにおいても、常にメンバーの意見に傾聴し、意見を纏め上げる事に注力する姿はメンバーの「やる気」に繋がり、「やらされ感」を感じた者は誰一人いなかったのではないかと思う。

これらのエピソードからリーダーの資質について考えてみると、①正確でより多くの情報を有する事（説得力がある事）、②周囲の状況に応じて柔軟に対処できる事、③グループメンバーの意見に耳を傾ける事が出来る事、が必要不可欠であると感じた。

巷ではP・Fドラッカーの「マネジメント」を基に書かれた本が話題になっているが、実際にBグループの企画をまとめる際にも「マネジメント」に書かれている事に当てはまる場面が少なからずあった事は最近になって（本を読んで）気付いたことである。

組織とチームワーク

次に、私が所属していたBグループについて書いてみたいと思うが、企画の成功に向けて一丸となつて取り組むことが出来たのは、Bグループ全員のチームワークに寄る所が大きく、この素晴らしい仲間全員に心からお礼を言いたいと思う。開塾式の時に初めて顔を合わせたにも関わらず、企画検討の打ち合わせから企画を終えるまで、常に目標に向かって全力で取り組ん出来たグループに参加できた事は、過去に経験が無い程の貴重な体験であり、感謝の念が後を絶たない。

そんな仲間についてであるが、最近、政治やビジネスの世界ではリーダーシップや指導力といった事が重視されているが、有能なリーダーが存在すればチームがまとまるかといえば、そうでは無いと思う。

例えば、三国志や三英傑など歴史上の人物をみても、有能なリーダーだだけで国が栄えることは無い、有能なリーダーの下に、それを支えるメンバーが集まつて初めて強靱な組織力が発揮されるのだと思う。

この事を我々のチームに当てはめてみても、正確な議事録を短期間で作成し配布する者、忙しいメンバーのスケジュールを調整して最大限の出席者を集める者、様々な情報を集めて皆が納得できる提案をする者、話合いの中で潤滑油的な役割を演じ、話を纏め上げる者など、チームを支える各自の役割は枚挙に暇が無いが、一番素晴らしいと感じたのは誰もが最後まで他者の意見を聞き、建設的な意見を言う事が出来た事であった。



昨今、職場では忙しさのあまり、筋道を立てるよりも、結論を端的に伝える事が重視され、その結果としてコミュニケーション不足が問題として取り沙汰されているが、「人の話を最後まで聞く」という事は「あいさつ運動」や「飲みにケーション」以上に効果があり、チームワークの醸成や職場力向上の原点ではないかと思っている。

自分にとつての「殻」とは

回の執筆にあたって自分のプロフィールを整理したところ、入社以来19年の間に非常に多くの職場を異動している事に改めて気が付いた。

人事異動に関して20代の頃は「スキルアップに繋がり、人脈も広がる」と思っていたが、新しい仕事や人間関係に直面する度に数々の失敗やコミュニケーションの難しさを経験し、それを成功体験に変える間も無く次の職場に異動する事も多々あったため、最近では「これまでの経験は本当に自分のためになったのだろうか」、「自分は、ひとつの職場で仕事に従事してきた方が良かったのではないか」といった疑問を感じる様になっていた。

失敗をした際に次は失敗しない様、問題の真因を追究し対策を講じることは「カイゼン」と呼ばれ、仕事をする上で非常に大切な事と理解しているが、職場における失敗の教訓として「失敗を回避するために自分の力量を測りながら仕事に取り組む」といった事を無意識のうちに処世術として身に付け、これを積み重ねて来た事が今の自分の「殻」の構成要素になっているのでは無いかと思っている。

「殻」の外に踏み出すために

先に書いたとおり、「殻」とは、外的要因に対して自分自身で作ってしまうものであり、この事は「閉塾式」で加藤塾長から「自分の力量を自分で決めて枠を作っている場合が多いが、殻を先に決めるのは良くない」とアドバイスを頂いた事からも、大きくは間違っていない考えであると思う。

閉塾式における最後のグループ討議の設問「殻の外に踏み出すことが出来たか」に対して「先ずは気付く事が出来てよかった」と答えたが、これから何をすべきかについて、最後に書いてみたいと思う。人が生きていく限り、必ず乗り越えなくてはならない壁に直面すると思うが、その壁の前で躊躇してしまつた際には、「自分の限界はこんなモノでは無い」と念じ、「殻の外に踏み出す」ために「ほんの少しの勇氣」を持つて目の前にある「嫌な事」や「苦手な事」に立ち向かい、自分自身で決めた枠を外側に押し広げてやれば良いと思う。「忙しい」、「時間が無い」といった言い訳が口を吐いたら、必要な時間の「作る工夫」を考える。この事によつて成功体験が得られれば、例え僅かであつても、次の課題に対処する際の自信に繋がり、殻の外に踏み出した実感が得られると思う。

また、もし清水の舞台で踊る位の勇氣が必要な事であれば、「別の事から始めれば良い」といった柔軟な考え方も併せ持つ必要があると思う。どうせ今迄でも枠の中で対処して来たのだから、この事で自分を卑下する必要は無い、次の課題はまた直ぐにやつて来るので、その時に乗り越えれば良いだけの事である。

社会人になって19年が過ぎサラリーマン人生を既に折り返してしまっているが、後に続く後輩に私と同じ轍を踏まないよう、この事についてコミュニケーションを取りながら議論をしていきたいと思う。

ここで敢えて議論という言葉を使ったのは、産政塾の活動で一貫して行われてきた「グループ討議」のお陰だと思う。

今回熟誌に書かせて頂いた内容について、グループ討議をする機会はないが、この難しく、画一的な回答が存在しない永遠のテーマについては是非皆さんの意見を聞かせていただきたいと思う。

感謝とお礼

加藤塾長をはじめ事務局の安藤さん、高橋さん、そして冒頭に28歳〜35歳の募集対象に躊躇した事を書きましたが、10歳位若返った様な気にさせてくれた第21期塾生の皆さん、大変お世話になりました。

また、このような体験の場を提供頂き、春から夏にかけての大変忙しい時期に送り出して頂いた職場の皆さん、本当に有難うございました。



前向きに挑戦する、楽しむ



デンソー労働組合

安 藤 慎 悟

《プロフィール》

- あんど う しんご
- 2002年 株式会社デンソー入社
ボデー機器製造部配属
 - 2006年 労働組合専従執行委員
現在に至る

〈趣味〉 サッカー

〈はじめに〉

機会を与えられなければ、なかなか自分自身を見つめなおすことはできない。産政塾に参加させていただき、機会を与えていただいたことに感謝したい。

昔の自分を振り返ってみると、就職活動の時期に、自分自身を見つめなおし、幼少期から学生生活までの経験や考え方などから自分の長所や短所を洗い出したことを思い出す。

その時にたどり着いた自分の長所は「人の話を聞くこと」だった。高校生の時から新聞や地域の広報紙に載っているセミナーや講演会に参加するようになり、いろいろな人の話を聞くことが好きだった。特に大学に入り、自分の将来を考える時期になると経営者の話を聞きに行く機会が増えた。また、そうした会に参加する中で、他の大学の方や社会人の方と話をすることができ、自分の日々の生活の範囲では経験できないことを知識として得ることができた。

今回、産政塾に参加するにあたって講師の方はもちろん、さまざまな職場から参加されている塾生の方の話を積極的に聞き、自らが成長できることを期待して、参加することとした。

＜壁＞にひびく

今までプロのアスリートの方と直接話をする機会はあまり無かったが、講師の尾川さんは、日本人女性初のプロボルダリング選手として活躍しており、小柄な見た目とは違い、とてもパワフルな方だった。ボルダリングとは道具をほとんど使わずに自らの手足で壁を登るというシンプルなスポーツだが、考えさせられることは多かった。企画の趣旨としては「仕事上や私生活で多くの壁がある中で、物理的な壁を乗り越えることで自らを見つめなおす」というものだったが、まさしく、人生の壁について考えさせられた時間だったと思う。

私はボルダリングを通して「壁」について2つのことを考えた。1つ目は、壁の置き方、2つ目は、壁の乗り越え方である。

①壁の置き方については、日々生活をしていく中で、誰しもが様々な壁にぶつかる。自分一人だけが抱える壁もあれば、相手が存在する壁もあるが、その壁の「高さ」も壁までの「距離」も、壁をどう置くかは自分の考え方一つで変えることができると思う。尾川さんは、自らが進む道に常に高い壁を置き、更にはその壁までの距離を少しでも縮めようとしているように感じた。「壁＝目標」と単純に言えるものではなく、使命感と言うか、絶対的なものを感じさせる壁を自ら置いており、一切の妥協は許さない決意を持っていると感じた。カッコいいと思ったが、「共感できる」とまで言えない自分が情けなかった。

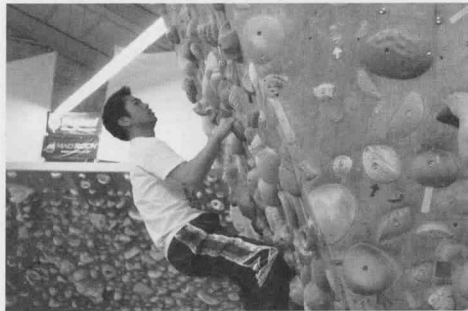
そして、②壁の乗り越え方だが、壁にぶつかった時に、乗り越えるか、迂回して別の道を行くかは自由だと思うが、尾川さんは当然乗り越える方で、しかも、高い壁に挑戦するからには余計なものは一切捨てるという潔さがある。プロになると決めたからには、他の道を進む保険など余計なものはお出来る限り排除したそうだ。今年30歳を迎えた自分にそこまでの潔さが残されているだろうか。

尾川さんの話の中で「自分で決めたことだから楽しめる」という言葉が印象に残っている。たとえ、苦しいこと、嫌なことでも楽しもうと意識することは自分でも実践できると思う。たとえ壁は低くとも、潔さに劣るとも、壁に挑戦することを楽しむことが大切だと考える。

△ ニーズについて▽

新興国の地雷撤去作業に貢献している山梨日立建機の雨宮社長の話を聞く中で、印象に残っている言葉として、「相手のニーズに応えなければ自己満足に過ぎない」がある。

その言葉を聞いたときに自分が学生時代に知的障害者施設の所長から聞いた言葉を思い出した。当時私は、成人した知的障害者が親元を離れて集団生活をしている施設の運営スタッフとして、夕方か



翌日の朝まで食事の補助や職業訓練などを手伝っていた。参加してしばらくたって、所長から、「相手の気持ちに立つには想像力が大切だ」と、言われた。言葉の通じない相手のニーズを掴む第一歩は何を求めているのか想像するしかないとのことだった。その所長の言葉を聞くまでは、他の人から言われたことや頼まれたことだけをやっていたが、改めて自分が何のために働いているか考えた時に、頼まれたことだけやっているのでは自己満足ではないのだと気付かされた。

雨宮社長は多額の借金を抱えても地雷撤去のための投資をやめなかった。単に地雷を取り除くだけではなく、撤去後の土地での生活まで考え、開墾できるよう機械を改造するなど、相手のニーズに添えてきた。相手の立場に立つて考え、相手のためにできることが何か想像することは企業としても、個人としても大切なことだと思う。

△ ユーティリティ △

もう一つ、印象に残っている雨宮社長の言葉で、「自らの基盤がしっかりしていないと、相手のことを考える余裕も生まれない」がある。

山梨日立建機として社会貢献のために地雷撤去作業に協力しているが、一時的なものではなく、継続して行っている。一時のことであれば自己犠牲の上にも成り立つかもしれないが、継続的に社会に貢献する、人の役に立つためには自らの基盤・土台が強固なものでなければならぬ、との教えだと

考える。

山梨日立建機の基盤・土台とは、会社としての一体感であると感じた。本業である建築機械業ではない地雷撤去のために借金を抱えるトップの判断に対して、従業員が賛同して社長と一体となって会社を支えている雰囲気は会社全体にあった。

最近では地雷撤去の貢献活動がテレビにも取り上げられて、地域の方や従業員の家族からも認知されているが、そこに至るまでの社内の抵抗は少なからずあったものと思う。会社トップが事業の方向性やこだわりを社員に伝え、社員もその考えを理解し協力している事実は会社として強い土台を持っていると感じた。

さらに、組織の長として、組織の仲間の理解を得るためには、考えをもった上で方向性を決めた上でも、単純に言葉として伝えるだけでは仲間の理解を得るまでには至らないとも感じた。雨宮社長は危険が伴う実際の地雷撤去作業を社長自身が現地へ出向き、身を持って行っている。まさに命懸けの仕事がトップが実践しているからこそ、周りの仲間も理解し、協力しているのだと思う。

組織として一体となつて行動するためには、トップ自身が自分の意見を周りに宣言した上で、行動で示し、基盤・土台を固めなければ継続的な事業活動はできないものと思った。



〈産政塾に参加して〉

冒頭に、「さまざまな経験をされた方から直接話を聞くことで、知識を得られることを期待して産政塾に参加した」と書いたが、産政塾に参加する中で、大切なことに気付かされた。

ボルダリングの体験の後で、塾生のためのグループ討議が行われた。今回の体験を通じて今後どう行動していくかを考え、宣言する場だったが、自分は「前向きに挑戦する、楽しむ」と宣言した。他の塾生の印象に残っているものとして、「リーダーシップを磨きたい」と宣言された方がいた。

その後の産政塾で、その方と行動をともにする中で、徐々に変わっていかれた姿を見て、自分のなりたい姿を描く、宣言する、実行することで少しずつでも人は変われるものだと思えた。

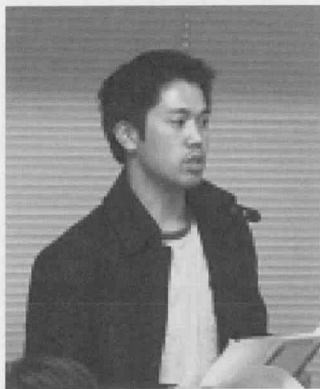
つまり、知識を得るだけでは自分は何も成長しない。成功されている方を見て、羨んでも変わらない。自分がどのように考え、どれだけ行動できるかだと思った。ボルダリングの尾川さんも山梨日立建機の雨宮社長も自分自身の考えにこだわりを持って行動し続けていると思う。

行動にこだわりが無ければ、自分の道につくった壁を低くすることもできる。相手のニーズに応えきることもない。これから自分が何にこだわり、どう行動すべきか考えてみようと思う。

〈最後に〉

産政塾の参加を通して、多くの方の話を聞くことができ、いろいろな刺激を受けることができた。この経験をいかに自分のものにできるかは、これからの行動次第だと思う。産政塾のテーマである「殻の外へ踏み出そう」に沿ったものとなるかは未知数だが、少なくとも自分の殻の中で変化したものがある。これまでは、どちらかと言うと新しいことにチャレンジする時に悪い方向に心配することが多かったが、「前向きに挑戦する、楽しむ」との行動宣言を意識して、何事にも楽しむ気持ちをもって挑戦したいと考えられるようになった。

・これまであまり考えたことが無かったが、自分のこだわりを持って生きている人はかつこいい。自分もそうありたいと思う。行動あるのみ。



殻の外へ踏み出すために必要なもの



株式会社豊田自動織機

石 神 良 介

《プロフィール》

いしがみ よしゆき

- 2007年 株式会社豊田自動織機入社
- 2007年 エンジン事業部 製造部製造四課へ配属
- 2007年 CO グローバル人事部 グローバル人事室
海外人事Gへ異動
- 2008年 CO グローバル人事部 海外人事室 人事Gへ異動
- 2009年 CO グローバル人事部 人事室 海外労務Gへ異動
- 2010年 CO 人事部 組織人事室 海外人事Gへ異動
現在に至る

〈趣味〉 読書、入浴、スポーツ 等

まずは、今回ご協力いただいた加藤塾長、事務局、21期生をはじめ、貴重な時間を割いてくださった講師の方々や、産政塾の研修へ快く送り出してくれた職場の上司、同僚など、ご協力いただいた皆様に感謝申し上げたいと思う。

産政塾の研修では、本当に色々なことを勉強させられたが、その中でも強く感じたのは三点である。まず一点目は「やり切る大切さ」、二点目は「やり切るためのヒントや、視点は常に自分の周囲にあること」、三点目は「オフタイムの大切さ」である。

今回、お話を聞かせていただいた方々には共通点がある。それは、自分がやると決めたことを、どんな障害にあっても必ず乗り越え、どんなに長い時間かけてでも、やり切ってきていることである。それが今回の研修で自身が感じた「やり切る大切さ」だ。

例えば、フリークライマーの尾川智子さんは、プロになる自分の夢をかなえるために、就職活動やアルバイトを辞め、退路を断ち、プロになるしか生きていく道はないというところまで自分を追い込んだ。そしてその結果、日本人女性初のプロクライマーとなった。

また、ある民間会社の横暴と行政の怠慢によって、自分たちの島を産業廃棄物で汚され、多くの犠牲者を出した香川県豊島の住民たちは、20年以上かけて、行政の誤りを指摘し続け、自分たちの島をかつての姿に戻せるように頑張り続けている。その他、話を聞かせていただいた方々も強い決意のもと、自身の思い、願いを叶えるため、今も最善を尽くし続けている。

一方、自分自身はどうか。一度決めたことも、時間や能力などのせいにしてやり切れていないので

はだろうか？そういつて、何かのせいになっている自分自身、それを許している自分自身の甘え、それが「殻」だと産政塾を通して実感した気がする。

おそらく、日ごろ直面している問題で、不可能なものはほとんどないはずであり、自身がどこまで強い思いを持ち、行動するにかかっていると思う。そして、行動を起こすこと、そしてぶつかった障害や壁を乗り越えるためにあらゆる努力をすることこそが、自身の見識や能力の枠を広げ、産政塾のテーマである「殻の外へ踏み出す」ことにつながっていくのだと思う。

ここで一つ考えたいのは、『なぜ、彼らはそこまでの強い思いを抱けたのか？』である。同期の塾生とも話したが、わからないというのが正直なところだ。確かに、雨宮社長のカンボジアでの経験は衝撃的なものだし、豊島では何人もの島民が被害に遭い、亡くなった方もいる。しかし、同じような経験をした人は何人もいるはずだし、その中でなぜ彼らが決意し、行動を起こしたのかははつきりせず、本人たちに聞いても「いや、やるしかないと思った。」という答えしか返ってこなかった。

ただ、彼らに共通している点が二つある。それは、自責の精神と、思いを同じくし協力してくれる仲間がいたことだ。「自分がやるしかない」と思い定め、とりあえず一步を踏み出すこと、そしてその後支え続けてくれる仲間や同僚がいることが、何かをやり遂げる上で重要であると、産政塾の研修を通して実感した。

自身のこれまでの会社人生を振り返ってみると、信頼できる上司、先輩、同僚、同期、後輩は何人もおり、本当に色々と助けてもらっている。あとは、「自分がやるしかない」という強い思いをいか

に持ち、自身が一步を踏み出すことが自身に足りないものだと思う。この認識を忘れず、今後の仕事や人生をやり遂げていきたい。

二点目はやり切るためのヒントや視点は常に周りにあるということだ。

自身が勤めている豊田自動織機では、様々な教えがある。最も有名な教えの一つとして、「現地現物」という言葉が挙げられ、日ごろのミーティングや打ち合わせでも、頻繁に出てくる言葉だ。そして、今回の産政塾に参加させていただいた中で、最も大切さを教えられた言葉の一つだと思う。

参加させていただいた研修の中で、最も「現地現物」の大切さを感じたのが、豊島である。実際に豊島を訪れる前、受け取った資料やインターネットで調べた限りでは、「一人の自分勝手な男（M氏とする）と、それを許した行政に振り回された可哀そうな島」という認識でしかなかった。さらに言うてしまえば、「なぜそんなひどい状態になるまで、島民は野放しにしていたのか？野放しにしていた島民にも責任があるはずだ。」という考えていた。しかし、実際に豊島を訪れ、復旧しきれていない島の現状を実体験し、何十年も行政と戦い続けた島民の話を聞き、当時の写真や記録を見ると、自身の知識が表面的でしかないことを心底思い知った気がする。

被害総額、被害者の数、島が再生するまでの年月、そういった表面的な情報は勉強したつもりでいた。しかし、島と島民の生活を破壊したM氏の暴走を止めようとしたばかりに傷ついた人々やその家族の気持ち、行政を信じて証拠を集め、訴え出たにも関わらず、行政の怠慢や保身に希望を裏切られた人達の怒り、県議会に働きかけても、「豊島の住民は、自分たちの島のためだけに県民の血税を使おう

としている。」と全面的に悪者にされ、県民からも白い目で見られた絶望感はどこにも書いてあるわけでなく、本人たちの口から聞いたからこそ、わかった事実だった。さらには、行政が誤りを認め、島の再建に取り組む（お金を使う）と宣言した瞬間に、公共事業として入札してきた民間企業、そして『公共事業価格（一般よりも高い価格）』で契約した行政と企業に対しての彼らの思いは、直接お話しを伺えたからこそ、今自身の心に残っており、いまだに怒りを覚えるのだと思う。

実際の仕事も同じだと思う。アンケート結果などで出てくる表面的な数字や事実もちろん重要だが、その結果になった背景や関係者の思いは、数字や事実からだけではわからない。実際に現地へ行つて、見て、聞いて、話をするのが重要ということを確認できたと思う。

また、社内の教えだけでなく、上司や先輩、同僚は色々な素晴らしい考え方や手法、ノウハウを持っているし、書籍やインターネットを通しても知ることができる。まずはそういった情報を積極的に自身にインプットすること、次にそれを適切に利用しアウトプットに結びつけること、そして、それを地道に継続することが、殻の外へ踏み出すことにつながるのだと感じた。

三つ目はオフタイムの大切さだ。日ごろはどうしても仕事のことが頭の大部分を占めてしまう。その中で頭の中をリセットすることが、大切だと感じた。



例えば、上記で「現地現物」について記述したが、入社から3年半の間で、「現地現物」の重要性、有用性を最も感じたのが産政塾の研修であつたと思う。

もちろん、日々の仕事の中でも「現地現物」の実践例はあふれているし、怠っていれば、上司、先輩からの指導が入る。ただ、ある意味当たり前になってしまっていて、個々の実践例が心に響くことは、仕事に慣れるうちに減ってきていたような気がする。

しかし、産政塾の研修のように、一歩仕事から離れ、自分の頭の中をリセットした状態で「現地現物」を体験すると、これまでとは違った感覚が生まれ、「なるほど、そういうことだったのか!」と新鮮な驚きを感じ、「現地現物」という教えを見つめなおす良い機会になったと思う。

見つめなおすことができたのは、仕事関連だけでなく、自分自身を見つめなおす機会にもなった。自分の価値観や判断基準、日々の生活や趣味、自分の性格など、振り返ることができた。それは自分自身の再発見でもあつたし、再確認でもあつた。それによつて、日ごろの自分の考え方や行動を、第三者的な視点を持つて評価することを覚え、視野が広がつたように思う。

さらに、日ごろ付き合ひの少ない他業種の塾生や講師の方々と色々なお話をさせていただけたことは、これまで持つていなかった新しい視点や考え方の獲得につながつたと思う。特に飲みながらのコミュニケーションは、本音をぶつけあう場に最適で、研修内容だけでなく、



仕事の話からプライベートまで話題が広がり、塾生の価値観や考え方を知ることができた。

また、お互いに利害関係がないことも、思ったことを率直に話すことができ、遠慮なく議論できた一つの理由だと思う。仕事に関係がある人だと、今後のことを気にして、多少遠慮が出てしまうことは否定できない。

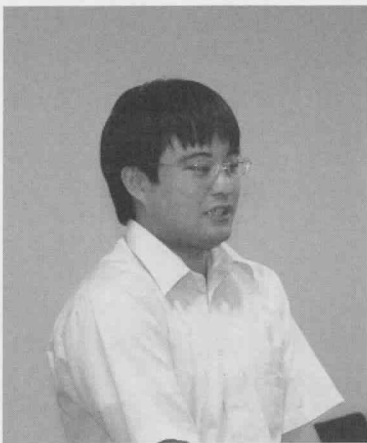
このように自分の思いや考えを率直にぶつけあうことで、新たな視点や気づきを得ることも、殻の外へ踏み出すことにつながるのには間違いない。実際、塾生との会話の中で、思い悩んでいたことも「そうか！こう考えればよかったのか！」と新しい発想が生まれたこともある。

今回は産政塾へ参加させていただいたことで、このようなオフタイムを経験することができたが、本当は自分から積極的に動いて、こういった場所を作っていかなければならない。やり方は色々あるはずで、これからの自分の課題の一つだ。

今回の研修で自身が感じた、殻を破るために大事なものとして、三点あげたが、これらは独立しているわけでなく、すべて関連している。やはり軸となるのは、ものごとをやり切ることであろう。そこで壁や困難にぶつかり、それを乗り越えること、乗り越えられるように精一杯努力することが大切だ。その努力をサポートするものとして、色々な知識や教えがあり、相談できる職場の上司や先輩がいる。さらに、オフタイムでの経験やコミュニケーションによって、自分の考えの幅を広げることができる。できれば、困難にぶつかった時のアイデアにもつながっていくはずだ。

そして、これから最も大事なのは、研修で学んだことをいかにアウトプットにつなげ、継続してい

くことだと思う。お世話になった講師陣の方々、事務局、塾生のメンバー、そして、快く協力してくれた職場の皆さまへの恩返しの意味も込めて、これからの仕事や生活に研修で学んだことをいかしていきたいと思います。



産政塾で学んだこと



ジェイテクト労働組合

伊 藤 篤 史

《プロフィール》

いとう あつし

- 1973年 三重県四日市市生まれ
- 1992年 豊田工機株式会社入社
- 2006年 光洋精工株式会社と合併 ⇒ 株式会社ジェイテクトへ
- 2009年 ジェイテクト労働組合本部中央執行委員（専従）
現在に至る

〈家族〉 妻、長女（小2）、長男（小1）、次女（2才）

〈趣味〉 サッカー観戦、サウナ、麻雀

くはじめに

私は9月に労働組合の専従役員になったばかりであり、右も左もわからない時に「産政塾」への参加のお話を頂いた。

この先、「組合専従という仕事をしていく上で、大変、貴重な経験になるから、騙されたと思って行ってこい」と声をかけられ断る理由もなく、せっかくの機会なので参加してみようと思い、「わかりました」と答えた。

先ず、最初に思ったことは、「産政塾」ってなんだろうでした。塾って響きは、中学生の時以来で、何かすごく懐かしい気持ちになった。塾と言っても、進学塾のように猛勉強していた訳ではなく、予習・復習程度の勉強で、自分にとっては遊びの延長線上のような場所であった。勿論、勉強もそれなりにしたが、勉強以外に色々な話ができる場であり、今でも楽しい思い出として残っている。

ただ、社会人としての勉強の場はそんなに甘いものじゃないだろうと思いつながら、不安と期待、それぞれに感じ、開塾式を迎えることになった。

【#1 開塾式】

開塾式の日がやってきた。いつもように何も考えず、普段通り会場にやってきた。開始10分ぐらい

前に到着しただろうか、会場に入ると活気に満ち溢れ、得意な場所ではないなと思ったことが第一印象だった。

式が始まり、塾長から「型と殻」の違いについてお話しがあった。どんな事でも型（基本）があり、それが大事であるということを教えていただいた。

次に自己紹介の時間がやってきた。やはり、やる気がある人は違う！皆さん、良く喋るし、話しが上手い。そんなに自己PRするの？というぐらい、皆さんにたくさん喋っていただいたおかげで、最後の方だった私は、必要最小限の自己紹介で終わることができた。

今日の開塾式を終えての感想は、自分に足りないものが、ここにはたくさんあるということ、大きな可能性をすぐ感じたことだった。

今後の社会生活において大きなターニングポイントになるだろうと感じた一日であった。

【#2 壁を乗り越えろ！～フリークライミングに挑戦～】

第21期生、記念すべき第1回企画は、私達Eグループである。開塾式から約3ヶ月、駆け足での準備となった。戸惑いながらも、リーダーを中心に何とか本番当日を迎えることができた。



メンバーは一足先に会場入りし、準備と打ち合わせを入念に行った。ボルダリングの経験者がいない中で、無事成功するだろうかと一抹の不安も感じながらのスタートとなった。

講師の尾川さんの丁寧な指導のお陰もあり、その不安もすぐに解消された。意外にも順調に、課題をクリアしていく塾生達にホッと一安心した。しかし、ボルダリングはそんなに甘くなかった！課題が難しくなるにつれて、塾生達の顔が真剣になり、口数も少なくなっていく。なかなか上手く登る事が出来ない苛立ちと悔しさを前面に出しながら、再チャレンジしていく。すると周りから、「いける」「あきらめるな」「がんばれ」と応援の声が上がり、会場は自然と盛り上がった。チームの枠を超える一体感が生まれ、心地よい疲労を残し、ボルダリング体験を終了した。

引き続き、尾川さんより講演をいただいた。フリークライミングとの出会いから、挫折、挑戦など、たくさんのお話しを聞かせていただいた。その中でも特に印象深く感じたことは、「自分が選んだ道だから、言い訳をしない」「全てが、自己責任である」という事をはつきりと言える姿勢でした。自分を追い込み、あきらめない・逃げ出さないといった強い信念が、今の結果を生み出したと思う。自分が好きな言葉である、「努力は才能や素質を超越する」にぴったりの人だと思った。自らが努力し、挑戦し続ける姿勢を見習い、今後に生かしていきたいと思った。

【#3 滝に打たれて自らを磨く】

今回の行き先は、静岡県油山寺である。

滝行には、以前から興味を抱いており、楽しみな企画のひとつでもあった。この日はあいにくの大雨、誰もいない貸し切り状態であった。しかし、この状況が、後に心地よい気持ちにさせてくれることは誰も予想しなかった。

最初に住職から、説法をいただいた。短時間ではあったが静寂の中、非常に引き込まれる内容であった。「殻を破りたい」と思うのではなく、期が熟せば自然に破れるということを教えていただき、胸のつかえが、スーッと取れた気がした。最近、何かあせていた自分に気づかされた瞬間であった。

次に、初めて写経を体験した。こんな静かな場所で何かをやる事は、何年、何十年ぶりだろうか？雨音だけしか聞こえないが、すごく心地が良い。リラクセスした中にも、本当に集中している自分がいた。何とも言えない気持ちで、すごくゆつくりと時間が流れた気がした。この大雨では参拝者は誰一人いない。全てが雨の演出だった。今日は雨に感謝！

次は、待ちに待った滝行を行った。現地に行つて滝を見ると、思っていたより小さい印象だった。「これが滝行？」という感じで少しなめていた。実際水に入ってみると、冷たいが耐えられない事はない程度であった。（大雨の影響で水温が上昇）私の番になりいざ滝に入ると、パイルドライバーを喰らつてしまったかのような衝撃があった。これが、職場での現地現物。見るだけではなく、実際にやる事によつて確かめなければ、何もわからない事を再認識させられた。

最後に、おいしい葉膳料理をいただき、有意義な一日は終わった。

【#4 非日常空間と現実を対比させ、今一度「豊かさ」とは何かを考える】

産政塾、唯一の宿泊企画だけを欠席してしまった。香川県には生産工場もあるため、是が非でも文
化を学びたかった。また、いつか訪れたいと思った。

【#5 行動力の源泉を知る】

興味津々の企画が始まった。以前から、地雷撤去の活動は知っていたし、
雨宮社長の存在も知っていた。色々なメディアを通じて耳にする社長のイ
メージは、とにかく行動派であるということ。自らの信念を貫き、今なお
世界の最前線で活躍している姿は、すごく輝いて見える。そんな社長から、
より多く学んで帰ろうと研修に望んだ。

講演が始まり丁寧に詳しく、解説を交えながら説明していただいた。と
にかく、社長は熱い人だった。本当にこの仕事に誇りを持ち、地雷撤去に
命を懸けている。その一方で、地雷は普通に製造・販売されている事実を
知り何だか複雑な気持ちになった。これもビジネスなのかと思うと、人間



とは本当に愚かな動物だとつくづく感じた。でも、いつかはこの世から戦争がなくなり地雷もなくなればと誰もが願っている。そうなるためにも、地雷撤去事業拡大に向け、そして、撲滅を目指し突き進んでほしいと思った。私が地雷撤去の仕事に携えることはないかもしれないが、いつかどこかでお手伝いできる日がきたら、喜んでやりたいと思う。職種は違っても、仕事への情熱や取り組み姿勢は学ぶことが多くあり、非常に勉強になった。自分の背中を見せながら、部下を育てていく。そして、情熱をぶつけ信念を伝えていく。簡単に真似出来ることではないかもしれないが、いつか、そうなれるようにがんばっていかうと思う。

実際に地雷撤去機に乗車できなかったことだけがひとつ心残りだったが、機械に描かれていた日本の国旗を誇りに思う。日本代表として、物作りの国として、更なる成長を祈願して、研修を終えた。

【#6 人と防災未来センターを訪ねて、減災のために何ができるか?】

最後の企画が始まった。東海地区に住む私達は今後必ず起こると言われている東南海地震に備え、準備をしておかなければならない。阪神大震災での教訓をしつかり勉強し、持ち帰りたいと思う。

神戸に来たのは、高校生以来だ。当時、三重県に住んでいた私は、都会の風景、人の多さに圧倒されたことを記憶している。その時と何ら変わらない風景に震災被害の面影はない。本当に大震災があったのかと思うぐらい、復興している。

しかし、ここまでの道のりは計り知れない苦勞と努力があり、私の想像をはるかに超えるものであると思う。大切な家族を失った悲しみは消えることはないだろうが、それでも一生懸命生きていかなければならない。

そんな中、風化させないため、悲しみ・教訓を忘れないため、様々な活動をしている「HANDS」の皆様以案内をしていただいた。当時の様子から、現在に至るまでの様々な苦勞話を聞き、メディアからは伝わってこない大変さを知った。ただ、その苦しくも辛い生活の中には、忘れかけていた人間の温かみを再認識できたとお話しがあつた。皆で助け合い、手を取り合つて乗り越えてきた日々は、言葉では言いあらわす事のできないものだと思う。遠い地で、無関心であつた自分を反省しなければならぬ。

案内をしていただきながら、数々の震災の爪跡を初めて見た。それは、想像をはるかに超え、凄まじい破壊力であることを示唆するものであつた。やはり何事でも、現地に行き、自分の目で確かめ、自分の耳で聞き、感じる事が重要だと再認識した。

説明をしていただく中で、二つ印象に残る言葉があつた。

一つ目は、「歴史を知る事は未来を知る事」、二つ目は、「減災」という言葉である。近畿地方は大きな地震が来ないと言われていたが、過去の歴史を調べると実際には起きている。勝手な思い込みが、震災被害を大きくしてしまった。歴史は繰り返されるということを念頭におき、考えていく重要性和、被害を最小限に食い止めるための考え方（減災）の両方が必要ということを教えていただいた。これ

は、会社生活における労働災害にも当てはまることではないだろうか。減災という考え方も取り入れ、今後に役立てていきたい。

どんな事でも、自分自身が被害に遭わないと真剣に考えない。しかし、それではいけない。後悔しないためにも、事前に考え、対策・予防しておく事の大切さを痛感し、最後の研修を終了した。

【#7 閉塾式】

最後に、産政塾のテーマである「殻の外へ踏み出そう！」について皆で議論し、今後の決意を宣言した。殻とは皆それぞれ姿形・大きさ・厚さも異なる。しかし、自分自身の殻を破るということに対しての定義は同じではないだろうか。自分の限界を決めない・やりたくないことにチャレンジする・結果を恐れないなど一步を踏み出すことが、殻を破り・殻の外へ踏み出すことではないかと考える。自分自身、実際に殻を破り、殻の外へ踏み出せたかどうかの基準はわからない。ただ、7カ月前の「薄い殻」は破り捨てられたのではないかと思うし、殻の外へ踏み出せたと思う。今後は更なる殻から踏み出すために、日々成長していきたい。

同世代のメンバーと活動したことで、自分自身を見つめ直す・向き合う機会となったことが何よりの収穫であった。塾生全員のやる気・根気・負けん気、それは自分の想像を遥かに超えていた。「負けてはいられない」とそんな気持ちになったことも自己成長のひとつではないかと思う。様々な業種

のメンバーに出会い、たくさんの意見を聞き、真剣に議論できたことは視野を広げるだけでなく考え
方についても学ぶことができた。

この7カ月間での学びを忘れず、いつもフレッシュな気持ちで何事にもチャレンジしていこうと思
う。

最後になりますが、加藤塾長をはじめ安藤事務局長、高橋さんには大変お世話になりました。心よ
りお礼申し上げます。また、快く送り出してくださいくださった労働組合の皆様、本当にありがとうございます。

この産政塾で学んだ事を大切に今後の活動に生かしていきたいと思います。21期生メンバーに負け
ないように努力し、成長した姿で再会できるようがんばります。7ヶ月間、本当にお世話になりました。



隗より始めよ！



アイシン労働組合

今 泉 基

《プロフィール》

- いまいずみ もとい (35歳)
- 1975年 2 月 刈谷市生まれ
 - 1993年 4 月 アイシン精機株式会社入社
 - 2008年 9 月 アイシン労働組合精機支部執行委員（専従）
 - 2008年10月 アイシン労働組合本部中央執行委員（専従）
現在に至る

〈家族〉 妻、長男（小4）、長女（年長）

〈趣味〉 ゴルフ

【はじめに】

今回、自分に参政塾派遣を決定してくれた上司に感謝申し上げます。

私は、1993年に高卒で、静岡から独り身でアイシン精機（株）に入社しました。以後、製造現場で15年、組合専従執行委員で2年、多くの素晴らしい上司や同僚に囲まれ、多くの教えをいただきながら現在に至ります。

今回の参政塾参加も上司から『今期は絶対に今泉に行ってもらいたい。今後、その経験を活かしてほしい』とのオファーがあり、自分もいろいろなステージに挑戦したみたい性格から迷わず参加を決意しました。

【第1回 開塾式】

上司から参政塾のパンフレット、開塾式の案内、中部参政研のパンフレットを渡された。参政塾の参加を迷わず承諾したものの、実は何を勉強してくるのか全く分かっていない。

『組織の枠を超えて本音の論議』『殻の外へ踏み出そう！』パンフレットを読んで通常の会社生活では感じ取ることのできない世界を体験できることが想像できる。製造現場から労働組合執行委員になつてからも、様々な初めての経験をさせてきていただいたが、今回は、更に企業の枠を超えて、また異

業種の方々との交流に胸を膨らませて開塾式を迎えた。

「WINCあいち」に到着、受付と写真撮影を済ませる。皆さん若そうだ。後に事務局の方の説明で知ったが、参政塾の参加者は20代後半から30代前半が多いらしい。Middle of the thirtyの自分として、こういうテンション・立場で臨めばよいか考えた結果、グループリーダーの大役を仰せつかった。

塾長の話を聞く。この歳までずっと同じ会社で働いてきた。ものの考え方や業務の進め方など、ある程度、型に嵌まっている。いつしか【カイゼン】も自分の型に嵌めて進めているのではないかと感じた。自分を相対化して物事を考えるスキルを身につけようと決心した。

グループディスカッションにてグループ名や企画案を検討に入った。リーダー（自分）の時間配分が下手くそでグループ名は当日に決められなかった。しかし、企画案は論議を深め、決定することができた。自分のCグループは、鉄道業・販売業・製造業の多種多様な5名で構成されており、育ってきた環境の違いから様々な企画案を出し合い、論議をした。それだけでも参政塾に参加した意義を感じる事ができた。

【第2回 壁を越えろ！】

参政塾第2回から各グループの企画案の実践に入った。まずは、開塾式から3カ月弱（春の労使交渉真ただ中に御苦勞様でした）で企画を仕上げたEグループの皆様に感謝申し上げます。

職場内で同僚に『参政塾って何やるの？どこ行くの』と聞かれた。『横浜行つてボルダリングしてくる』と答えると『遊び？』と言われた。そうではない、『これからの会社生活・社会生活・家庭生活でプラスになる事をひとつでも見つけてくる』と言い放ち当日を迎えた。

ジムに着くや早々に着替え、そして専用の靴に履き替える。目の前には人工的に造られた「壁」と「岩」。今回の訪問相手の尾川さんにボルダリングのやり方を親切に教えてもらう。やってみると意外に面白い。しかしすぐに腕の筋肉がプルプルして限界を感じている自分を発見した。皆に迷惑が掛かる、皆が見えているから格好悪い、そう思いながらも限界を感じて岩から手を離してしまう。そう思っているうちにボルダリング体験は終了した。

その後、尾川さんと質疑応答含む講演を聞き、一つ目の気づきを発見した。最近、昔（20代前半の頃）と違っていろいろな知識が入っている分、物事を考える時に最初から『出来ない』や『無理』と決めつけ、その方向にもっていく自分を納得させる要因を探していた（反省）。今後は、ボルダリングのように目標は遥か上に存在するが、一つひとつ具体的などころ（岩）を掴んで上へ向かっていくことを、仕事でも行なえるようにしていく。

尾川さん、Eグループの皆さん、ありがとうございました！

【第3回 滝に打たれて自らを磨く】

所用の為、欠席。Dグループの皆様 スミマセンでした。御苦勞様でした。

【第4回 非日常空間と現実を対比させ、今一度「豊かさ」とは何かを考える】

体調不良の為、欠席。Bグループの皆様 スミマセンでした。御苦勞様でした。

宇野までの往復切符まで持っていたが、前日に体調不良・高熱を発症しドタキャンになってしまった。その後、土日含めて5・5連休、職場の皆さんにも業務面や切符の払い戻しなどご迷惑をお掛けしました。

【第5回 行動力の源泉を知る】

今度は体調バツチリ、業務調整もバツチリ、気合入れすぎて集合の1時間半前に集合場所に到着してしまった。事前に受けた「総合適正テスト」の結果をバスで見ると、非常に良く当たっている気がする。ここでまず気づきひとつ、自分が弱い（悪い）面と強い（良い）面を客観的に数値で知ることができ、今後何かあった時、自分を雲の上から客観的に判断し操作するコントローラー的なものをゲットできた感じである。

さて、山梨日立建機に着き、工場見学や雨宮社長の講演を聞き、またひとつ思い知らされた。それ

は社長の思いが社員に伝わっていることだ。雨宮社長は、『社員に背中を見せる』と語っていた。また『絶えずユーザーに耳を傾ける』とも語っていた。このふたつは、頭で解つていてもなかなか実践できないことであるし、どの業界でもこのふたつを実践できていれば成功すると思う。労働組合として例外ではない、『組合員に背中を見せる』『絶えず組合員に耳を傾ける』この姿勢を再度、胸に植え付け組合活動に邁進していくことを誓った日であった。

Aグループの皆様 御苦労様でした。

【第6回 減災のために何ができるか?】

いよいよ自分達Cグループの企画の番である。しかし、1カ月前までには企画案のほぼ完成版を作成してほしいと事務局から依頼されていたにもかかわらず、ほとんど決まっていなかった(反省)。実際、当日の役割分担まで決めた詳細日程が決まったのは、本番2週間前のことだった。取り回しが悪く、本当に申し訳ありませんでした。

企画は、開塾式に自分が持ち込んだ一人の意識醸成について一のものである。職場の災害しかり、交通事故しかり、人は何故失敗をするのか?失敗を繰り返さないためには、どんな心構えが必要なの



か、「一人と未来防災センター」を訪ね、意識醸成について考えてみる企画だ。

行き先は神戸、当日の内容を盛り込みすぎて、皆様を朝8…45に新神戸駅に集合させてしまい申し訳ないと思いますが、そこは参政塾メンバー、一人も遅刻せず集合いただき感謝です。徒歩にて東遊園地公園→メリケンパーク→南京町までの被災場所を残してある場所をNPO法人「1. 17希望の灯り」のメンバー（3名）よりお話をいただいた（今回、参政塾でのお話を依頼した時、快諾していただき、本当にお世話になりました）。この「1. 17希望の灯り」のメンバーは、自らが震災の被害者であり、中には家族も失っている方もみえる。経験者は語るでは表現が簡単かもしれないが、やはり皆さん震災を機に、水などいろいろな物を家庭に準備していることを聞けた。

その後、昼食をはさみ、人と未来防災センターの見学に入った。ここでも語り部による体験談と最小限の非常持ち出し品リストを頂いた。やはり経験者は、次を想定して自分達が生き残る道具を準備していることが解った。少し前の事だが、新型インフルエンザが流行していた際、組合に機関紙で準備品リストを掲載したことがあったが、それを思い出した。

しかし、どれだけ組合員が、それを見て家庭に準備しただろうか？



やはり知識だけではダメ、意識も高揚させないと本当の意味をもたない。この人と未来防災センターは、阪神・淡路大震災の遺品をストレートに保存しており、共感を感じ取れる工夫がしてあると感じた。人間（自分）は、一人では弱いものである、将来やつてくる東海・東南海大地震に向けて東海地方全員が同じ想いをもって意識・知識を高揚させていくことが重要であると感じた。Cグループのメンバー、ヘボいリーダーを支えてくれて本当にありがとう！

【最後に】

以上のように、参政塾で得たものは、心に刻まれるものが非常に多かったです。総括すると、この歳になって会社・社会・家庭の立場上や考え方から固くなり始めていた自分を、もう一度柔らかい自分にしてもらった柔軟剤のようなものでした。

今後は、この体験を活かした柔軟な頭と心で活動を進めるとともに、後輩への指導もしていきます。

隗より始めよ（大きな目標も、まず手近なところから着手せよということ）

この言葉を胸に一つひとつ積み上げていきます。

最後に参政塾21期生関係者の皆様、本当にありがとうございました。



20 代最後の 1 年と産政塾



トヨタ自動車株式会社

太 田 寛

《プロフィール》

おおた ひろし

- 1981年 東京都北区生まれ
- 2003年 トヨタ自動車株式会社入社 人事部配属
現在に至る

〈好きな本〉 燃えよ剣、のぼうの城、お〜い！竜馬、ROOKIES

〈はじめに〉

いきなりではあるが、はじめに、会社が非常に厳しい状況にある中、このような自分を磨く機会を与えていただいたことに對し、上司や職場の方々からお礼を申し上げたい。

今期の産政塾のほぼ全ての会合に参加することができたのは、間違いなく上司や職場の方々の多大な支援のおかげであり、だからこそ、これから記載する「今回の産政塾を通じて自分自身が学んだこと」を、これから職場で実践することによって、少しでも恩返しをしていきたいと思う。

〈産政塾の概要〉

①産政塾とは

産政塾は、東海地域の様々な企業・労働組合・自治体から30歳代前後のメンバーが30名程集まって行われる。全部で7回の会合があり、初回と最終回は塾長からの講話、あいだの5回は、5つの班に分かれた塾生たちが、それぞれ1つずつ独自の企画を提案し、それを塾生全員で体験する。そして、全ての会合において、当日の企画から感じたこと・学んだことをグループで討議し、その内容をグループ毎に発表する。更に、毎回懇親会があり、当日のことだけでなく、日々の業務や時にはプライベートのことも酒の肴にして、塾生同士で大いに語り合うという活動である。

②第21期産政塾の概要

今期（第21期）の各企画の概要は次のとおり。

第1回 開塾式 加藤塾長からの講話（テーマは「型を見直す」）

第2回 クライミングの日本人女性第一人者である尾川智子さんを訪ね、お話を聴き、クライミングの一つであるボルダリングを体験

第3回 静岡県のお山寺を訪ね、ご住職からの説法を聴き、写経・滝行を体験

第4回 アートの島 香川県直島を訪ねる（大変残念なことに、業務の都合により欠席）

第5回 山梨日立建機株式会社 雨宮社長を訪ね、そのお話を聴く

第6回 神戸を訪ね、NPO法人『阪神淡路大震災「1・17希望の灯り」』の方々と震災跡や

震災モニメントを巡り、さらに「人と防災未来センター」を見学

第7回 閉塾式 加藤塾長からの講話（テーマは「リーダーになれ」）

どの回の企画も濃密な内容で、本当は全ての企画について詳しく書きたいところであるが、紙面の都合上、最も印象深かった第5回の内容を次の章で詳しく紹介する。

△特に心に残った企画「第5回 山梨日立建機株式会社 雨宮社長を訪ねて」▽

雨宮社長は、本業の建設機械においては、山梨県内トップシェアにして、建設不況と呼ばれる昨今においても利益を出し続ける一方で、地雷除去機の開発に心血を注いでおられる人物である。実際にお会いした雨宮社長は、60歳を超えているとは思えない、とにかく熱意あふれる方だった。

そんな雨宮社長にお会いして、お話を伺った中で、特に強く印象に残ったのは、次の3点である。

①自分は何のために生きるのか、使命感をもつことの大切さ

雨宮社長は、まず、なぜ地雷除去機の開発に取り組むようになったのかについて次のように語った。

- ・建設機械のビジネスチャンスがあると考え、今から約15年前、私は内戦が終わったばかりのカンボジアに降り立った。しかし、そこで目にしたのは、ビジネスチャンスではなく、地雷によって手足を失った大勢の人々。そして、そこで出会った少女を連れた片足を失った老婆に、「あなた日本人でしょう。私たちを助けてください」と言われた。そのとき、幼いころ母親に言われた「人のためになるような人間になりなさい」という言葉を思い出した。お金を稼ぐことばかりを考えてきたこれまでの自分の人生は、一体何だったのだろうか、大きな衝撃を受けた。

地雷は、人を殺すことが目的ではなく、殺さず傷つけることによって長期の苦しみを与えることが目的。手足を奪い、仕事を奪い、さらにはその家族にも身体的・経済的な負担を負わせ、疲弊させ

る。そんな卑劣な兵器が、現在、世界中には1億個以上埋められていて、今のように手作業で除去しては、全て除去するまでには1,000年かかるという現状を知り、技術屋である自分できえることは、地雷を機械で除去できるようにすることしかないと考えた。

② 徹底的な現地現物、そしてリーダーシップとは自ら先頭に立つということ

雨宮社長が、地雷除去機の注文を受けるのは、カンボジア・ニカラグア・アフガニスタンなどの国々。そういった国々の地雷原に、雨宮社長は自ら足を運ぶ。マラリアにかかったり、毒蛇にかまれたこともあるそうだ。それでも現地に行くのは、「どのような機械が現場で求められているかは、実際に見てみないとわからないからだ」と雨宮社長は言った。

一口に地雷といっても様々な種類があるそうだ。注射器を使つて作られたものから、戦車をひっくり返す程の威力があるもの。また、それが埋められている環境も、原っぱの草むらの中（小学校の校庭に埋められていることも！）や、木々が生い茂り起伏のある山中など、千差万別である。

雨宮社長は、そうした現場を自分の目で見て、現地の方がどんな機能を求めているかを自分の耳で聞いてから、地雷除去機の製作にとりかかる。

そして、雨宮社長の仕事は、機械を製作するだけでは終わらない。現地



に出来上がった機械を運び、それに乗り込み、自ら地雷除去をやってみせる。ニカラグアでは、作業を終えドアを開けた瞬間に地雷が爆発し、それによつて片方の耳は今も聞こえないままだという。それでも雨宮社長は自分が機械に乗り込むことを止めない。それは、地雷除去機の開発を始めるときに、「地雷原にはおれが入るから、力を貸して欲しい」と社員と約束したからだという。

また、雨宮社長は社内を毎朝自ら掃除しているとも言っていた。確かに、オフィス内や工場内は整然としていた。

③ 本当の社会貢献とは、現地の人々が自分たちだけで生活できるようにすること

雨宮社長は、地雷除去機を作り、自らそれに乗り込み、更に現地の人々に機械の操作方法を手取り足取り教える。時には、日本まで現地の作業員候補を呼んで訓練する。また、最近製作した機械には、地雷除去と同時に大地を耕すことができる機能もつけた。「現地の人々に銃を捨てさせて、スパナを持たせたい」「そして、地雷原を農地に変えることによつて、食料と更なる雇用を生み出し、人々が本当の意味で自立できるようにしたい」雨宮社長は力を込めて語った。

雨宮社長の話を聞いて、自分自身の学生時代の経験を思い出した。タイの山奥にある養護施設を訪れたときのことだ。そこで働く職員の方からこんな話を聞いた。「日本人はモノは沢山送ってくれるけど、実際に来てくれる人は少ない。」「日本で使わなくなった服を沢山送ってもらった結果、子供たちは自分の服を大切にしなくなった。中にはわざと破る子供もいる。破れば次の服がもらえるから」「一

番の支援は、この子たちが親元に帰れるようにしてもらうこと。そのためには、この子たちの親が働けるようにしてもらうことが一番だ」と。この体験と、同じくその時にタイトヨタの工場を見学したことが、私がトヨタに入社したいと思うようになった一番のきっかけであつたことを思い出した。

△「産政塾テーマ：殻の外に飛び出そう」そのために何をすべきか▽

少し話をするのが遅くなったが、産政塾のテーマは「殻の外に飛び出そう」である（ここ数年同じテーマらしい）。そこで、ここからは、「殻の外に飛び出す」ためには何が必要か、産政塾の活動を通じて、自分なりに考えたことを書く。

まず、真つ先に思い浮かんだことは、第3回の住職の「殻は破るものではなく、機が熟せば自然と破れるもの。そのためにも今が大事。今の積み重ねが明日につながる」という言葉だ。あるいは、開塾式での加藤塾長の「昨日とは違う自分。そして、明日はまた違う自分。そうやってもっと良くしよう」と日々努力することが大切であり、それこそが『カイゼン』である」という言葉も同じことを意味していたのだと思う。そういえば、今年、米大リーグで前人未到の10年連続200本安打を達成したイチローも「小さいことを積み重ねることが、とんでもないところに行くただ一つの道」と言っていた。しかし、この「日々小さいことを積み重ねる」という単純なことが実は一番難しい。どうしてもすぐに結果を求めてしまい、結果が出ないとあきらめてしまい、積み重ねることができない。そうなら

ないためにはどうすればいいのか。産政塾での経験を通じて学んだことは次の4点である。

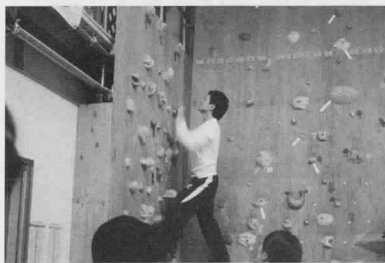
① 自分が何のためにそれをやっているのか、最終的な目的を常に意識していれば、失敗も乗り越えられる

先程紹介した雨宮社長は、カンボジアから帰国すると、地雷除去機について何一つ知らない、まさにゼロの状態から開発に取り組み、1号機を納めるまでには5年以上の歳月がかかったという。悪戦苦闘の毎日の中で、なぜあきらめなかったのか。社長の答えは、「地雷原が豊かで平和な大地に変わり、そこに住む人々を笑顔にすることが私の使命だと思っているからだ」というものだった。

② 一度自分でやると決めたことは、最後まで責任をとるという覚悟を持つ

第2回の尾川さんは、早稲田大学の理工学部を卒業後、就職という道を選ばずに、クライミング一本の道を選んだ。大会でなかなか結果が出ないことが続いたり、ある一つの岩を登ることに挑戦し毎日毎日落下したり、どうして、それでも挑戦し続けることができたのか。尾川さんの答えは、「自分でやると決めたことだから、最後まで自分で責任をとると心に決めているから」というものだった。

(ちなみに、結局、その岩は数ヶ月かけて、ようやく登ることに成功。それは



日本人女性初の快挙だった)

③自分で限界を決めない

尾川さんは、次のようにも語った。「過去に自分がやったことがないものに直面したときに、『最初から無理とあきらめるか』『だから無限の可能性があると捉えるか』で大きな違いがある」と。閉塾式のとき、加藤塾長も「多くの人が、自分で殻＝限界を作ってしまった」とおっしゃっていた。自分自身を振り返ると、思い当たることがいくつもある。「できない理由」を見つけることは、とても簡単だからだ。

④ときには自分を客観的に見て、何ができるようになって、何がまだできないのかを知る

これは開塾式のときの加藤塾長の言葉から学んだことである。

「自分を絶対化してしまうとそれ以上成長できなくなってしまう。だから、敢えて一度「型」に戻ってみて、自分を相対化してみると、自分は何ができるようになって、何が足りないのかが見えてくる。『そうすれば、自分の成長を知ることができる』とともに、次に取り組むべき課題が見えてくる」

考えてみると、産政塾の活動自体がまさに一つの「型」であり、自分を相対化できる貴重な場だったのではないだろうか。様々なバックグラウンドをもつ塾生が集まるからこそ、同じ体験をしても全く違うこと感じたり、自分が持っていない視点に気づかされることが何度もあった。また、自分の言

葉でユーモアあふれる発表ができる人、周囲への気配りができる人など、自分が足りない点にもたくさん気づかされた。

〈おわりに〉

実は、第1回の開塾式の日には、自分自身の29歳の誕生日だった。思えば幼いころ、30歳にもなれば、一廉の人物になっていと思うていたが、いつしか目の前のことだけに追われる日々を過ごしていたように思う。そんな20代最後の1年に産政塾の塾生になったことは、少し大げさかもしれないが、運命的なものだったように思う。

今回、産政塾を通じて、会社に入った頃に抱いていた目的Ⅱ「日本のものづくりで世界を豊かにすることに貢献したい」に立ち返ることができた。だから今日からは、産政塾で学んだように、その目的を常に意識しながら、責任感と覚悟を持って、自分で限界を決めずに、日々小さいことを積み重ねていきたいと思う。そうすれば、きつと充実した30代を過ごすことができると思うし、きつと気付けば殻の外に飛び出せているに違いない。冒頭にも書いたように、現在、会社は非常に厳しい状況にある。しかし、状況が良いときはみんな頑張れるわけで、「状況が悪いときにどれだけ前を向いて頑張れるかが勝負」と自分に言い聞かせて、塾生のみなさんに負けないように、職場で頑張っていきたい。

最後に、本当に沢山の刺激を与えてくれた塾生のみなさん、お忙しい中でも毎回必ず顔を出し、気さくに塾生の輪に入っていただいた加藤塾長、時には四方八方に飛ぶ塾生の意見・考えをいつもまとめていただいた安藤さん、そして、塾生の誰よりもバイタリティがあつて、陰から日向から塾生をサポートしていただいた高橋さんに、心からお礼を申し上げたい（特に、高橋さんには、開塾式の日 of サプライズケーキに始まり、最後の私たちのチームの企画まで、本当にお世話になりました）。

欲を言えば、もっと塾生でいたかった、もっとこのメンバーと多くの時間を共有したかった、そう思わせてくれた産政塾に心から感謝したい。



動き出せ 私の中の列車



大丸松坂屋百貨店労働組合

大 野 将 幸

《プロフィール》

- おおの まさゆき
- 1985年 名古屋生まれ
 - 2007年 株式会社松坂屋入社
食品部配属
 - 2008年 松坂屋労働組合非専従組合執行役員
 - 2009年 大丸松坂屋百貨店へ一社化
大丸松坂屋百貨店労働組合へ統合
 - 2010年 営業推進部配属
現在に至る

〈趣味〉 国内旅行

〈家族構成〉 妻

【発車】

モノ、コト、ヒト。大野将幸という男はとにかく、これら3つとの新たな出会いに興味津々な男である。産政塾。最初に話を聞いたとき、瞬間的に賛成塾と思ってしまった自分を恥じる。何に賛成するつもりだったのであろう。無知とは、無害ながら悲しいものだ。

しかし漢字が分かったところで、頭の上に浮かんでいたハテナマークは消えないままだった。産政塾とはなんぞや。さつそく調べてみると『組織の枠を越えて本音の論議で、様々な分野に活躍する人や、同世代の異業種の仲間とともに、様々な考え方と論議を交わすなかで、切磋琢磨し自らを磨いていく現代の道場です。』とのこと。この文章だけで、私の妄想力が勝手に活性化されていくのが分かった。1つのチームで1つの目標へ向かう。その中で起こる様々なことに気づく。そしてチームの効果を高める為に、自ら果たすべき役割を模索できそうなフィールドがそこに見えた。気がした。実に興味深い。何故ならチーム行動こそ、私の大好物だからだ。ただの団体行動では駄目である。団体とチームの決定的違いは、目標が明確かつ共有できているかどうか。異業種間コミュニケーションを図り目的を共有化する環境こそ、自ら成長する絶好のチャンスが生まれるだろう。その時、私の中の列車が間違ひなく動き出した。乗客は〈好奇心旺盛〉という名の我が最大の長所だった。

【壁】

走りだした列車はまず、開塾式駅に停車した。ここで聞いた〈殻の外へ踏み出そう〉という話も、つい最近の出来事のように思える。そこで出会った新たな仲間。Bグループ。出会いはいつも緊張の連続だ。何故なら私は結構人見知りだったりする。この事実を誰も信じてくれない事をいつも残念に思う。緊張の中で臨んだその後のグループ討議は、就職活動以来でとても新鮮な気持ちだった。メンバー同士がグループ内で徐々にうち解けていく様子が、非常に気持ち良かったことを覚えている。この停車駅で殻を破るべく、我がBグループが設定したテーマは『非日常空間と現実を対比させ、今一度「豊かさ」とは何かを考える。』だった。豊島の産業廃棄物処理場を見学し、直島で現代アートに触れるという新たな駅の提案。自分の生活を見つめ直し、新たな着眼点が見つけれられたらと、期待に胸膨らんだ。

しかし、言うは易く行うは難しとは良く言ったものだ。背景や問題意識、活動目標の設定だけでも、かなりの時間を要した。もともとテーマ自体が漠然とし過ぎていたのかもしれない。さらに、行く場所がローカル過ぎた為、現地での交通手段1つとっても複雑な乗り合わせがあった。入場時間や見学条件にも様々な制約があり、企画書作成も難航。まさに壁にぶち当たっていた。

そうした毎日を送り、期日も迫ってくる中、ある日の出来事を思い出した。2010年4月14日。

初めての体験、フリークライミング。物理的な壁に立ち向かったあの日。困難な目標にチャレンジし、出来た時の達成感がとても嬉しかった。もつと難しい壁を越え、もつと凄い達成感を味わいたいと願った。まさに、チャレンジする喜びとエネルギーを得たのだった。せっかく補給したこの燃料。いま使わずして、どうするのだと自分に言い聞かせる。あの達成した時の感覚を思い出すだけで、また新たなエネルギーが湧いてきた。時刻表通り走っていくためには今、加速することが求められている。間に合うだろうか。いや、間に合わせなければならない。この壁、必ず超えて間に合わせてみせる。と、モチベーションを高めた。

立ちほだかる高く険しい壁。補給燃料の力だけでは乗り越えることは無理だっただろう。Bグループメンバー全員の力を合わせることで、ようやく超えることができた。バラバラだったコトが、皆の力で1つにまとまっていく。そんなステキな時間を過ごせた。話し合いの回を重ねる度に各種手続きや手配が終わり、企画書も無事に完成した。この時ばかりは何とも言えぬ喜びを感じたことを覚えている。さらなる達成感を味わった瞬間だった。

いよいよ列車は警笛を鳴らし、次の駅へ到着しようとしている。しかしまだ安心してはいけない。安心しかけていた私に、本番はこれからなのだよ、と警笛が教えてくれた気がした。



【新たな駅】

この駅での体験。初日の豊島見学は、本当に自分自身の生活を見直す良いきっかけとなった。産業廃棄物の不法投棄現場を見学。その後、実際に不法投棄された島民の心の叫び。豊かな生活を手に入れようとした1人の欲望が、多くのヒトから心の豊かさを奪っていた現場を目撃した。

「豊かさ」とは何か。いま自分自身、モノの豊かさという面では知らぬ間に贅沢をしていたのではないだろうか。当たり前に手に入る新しく便利なモノたち。当たり前に捨てているまだ使えるモノたち。どちらも大切にしていかなければならないという、当たり前のコト。実際どこまで意識して生活できていただろうか。当たり前のコトを当たり前にやる難しさを感じるとともに、小さなコトでもやるコトからやっていくのだという再認識。実際の現場を目の当たりにした自分たちだから、出来ることがあるはずだ。あの衝撃を忘れることなく、周囲のヒトたち、未来のヒトたちにも思いを伝えていきたい。小さなコトでも周囲を巻き込むことで、大きなコトになるはずだから。

2日目に直島で触れた現代アートたちは、前日目の当たりにした産業廃棄物とは実に対照的だった。どちらもヒトが生み出したモノ。しかし、直島では現代アートという芸術分野において豊かさを演出していた。モノだけではない。地域住民たちが現代アートと一体になって、島そのものをアート化していた。住民1人1人が島を愛していなければ出来ないことだと思う。そこで心の豊かさを感じた。

島では緩やかな時間が流れており、モノの豊かさへ固執しないことの大切さを学んだ。心の豊かさを失わずに、モノの豊かさを得るためには常に双方のバランスをとっていくことが必要であり、そういった意識を持って生活する必要があるだろう。

こうして、新たな駅での2日間が無事に終わった。あれほど時間をかけて組んだ計画があつたという間に過ぎ去った。発車した列車から窓の外を見ると、見慣れない景色が次々に流れていった。それさえも名残惜しく感じた。しかしこの時、企画書完成時とは違う達成感を味わっていた。壁を越えた時のようなこの感覚。でもまた違う。肉体的感覚と、精神的感覚の違いだろうか。何にしても間違いなく、かけがえない経験になったことだけは分かった。

【新たな出会い】

次の駅での出会いが、今産政塾において最も印象に残った出会いだった。山梨日立建機代表取締役、雨宮社長。カンボジアの地雷被害を目の当たりにした18年前から、地雷除去機を開発している。今や世界の地雷除去に欠かせない第一人者。現場に直面したからといって地雷除去の機械を自ら開発し、



除去活動まで率先してやるなんていう行動力は、やはり常人離れしている。この日、彼の《行動力源泉》を知る為、次の駅へ向かった。

片道4時間半。しかし、その価値は十分にあつた。特に「私の仕事は死と背中合わせだ。病気では死にたくない、出来れば地雷原で死にたい。」という雨宮さんの発言に深みを感じた。彼の真意は死ぬまで地雷除去に携わっていたい、ということらしい。地雷除去の作業効率が彼らによる機械開発後、約60倍と飛躍的に上がった現在。目標を達成しつつある彼から、自己満足で終わらせないことの重要性を学んだ気がする。

TV放送されたカンブリア宮殿において、雨宮さんの話を聞いた村上龍さんはこう言った。「何をやるべきか何をしたいか、わかっている人たちは強い。使命感と目標が人間の能力を最大限に高める。」なるほど。使命感を持つということが、生きる力であり、まさに行動力の源泉なのだ。1人の男として強い使命感を持って、自己満足で終わることなく生きていくことを強く決意した1日となった。

【新たな街】

最後の駅。ここでの光景1つ1つは、10歳だったある朝を鮮明に思い出させた。

ヒトが造り出したモノ。街。それがある日、一瞬で崩れ去った。平成7年1月17日午前5時46分。誰もが忘れもしない、忘れることのできない、阪神淡路大震災。高速道路がなぎ倒されていた映像、

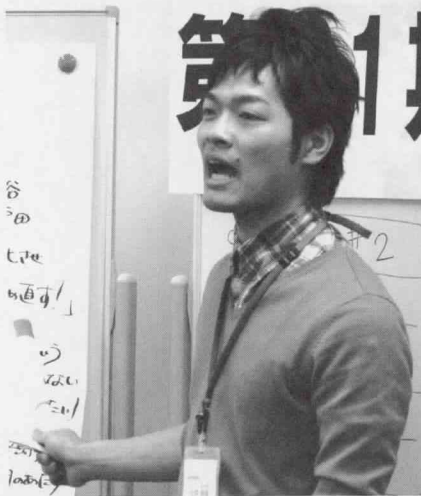
第肆章

【終点】

上空から映し出された火事。どれも小学生ながら衝撃的だった。あれから約15年経った今、ここへ来て大地震のことを少し忘れていたことに気づいた。記憶とはいかに曖昧で、長く自分自身の心に留めておくことが難しいかを知った。同時に、現場へ足を運ぶことの重要性を改めて感じた。事件はまさに、現場で起きていた。現場へ行くだけで、当事者との距離が間違いなく少し縮まった。この距離は本当に少しだけだと思う。でも、大事な「少し」だったはずだ。大切にしていこうと思う。

短い旅だった。あつという間に最後の駅へ辿り着こうとしている。ふと乗客である〈好奇心旺盛〉という名の彼が、どんな顔をしているか気になった。顔をのぞき込んでみると、満足そうな顔をしていた。良かった。充実の時間が過ごせた証拠だ。しかし隣の席に目を移すと、新たな乗客が知らぬ間に乗り込んでいることに気づく。名前を聞くと、同じ名前だった。〈好奇心〉。終着駅という行き先を指さして彼は不満そうな顔をしていた。どうやらこの列車、ここを最後の駅にする訳にはいかないようだ。列車の先頭に付いている行き先。となりのトトロに出てくる猫バスかのようにぐるんつと変わった。満足した〈好奇心〉はこの駅で降ろして、満足していかない〈好奇心〉を満足させるべく次の駅へ向かうことに決めた。そう来なくつちや、と新たな乗客の顔が少し緩んだ。

殻を破っていくということは、こういうことだと思う。殻とは一種の壁であったり、自分自身で設定してしまう限界であったり。はたまた、自ら勝手に決めてしまうゴールであったり。これらを超えていくということが、殻を破っていくことなのだ。殻を破っていくことに終わりは無い。何事にも挑戦し続ける強い意志を持つて、殻を破り続けていけるような人生の旅を続けていきたい。



“感謝”の気持ちを大切に



トヨタ紡織株式会社

加 藤 貴 子

《プロフィール》

かとう たかこ

- 1978年 愛知県知多郡東浦町生まれ
- 2000年 豊田紡織株式会社入社
人事総務部配属
- 2004年 トヨタ紡織株式会社
現在に至る

〈趣味〉 旅行、料理

〈家族〉 父、母、弟、姉、ペット3匹

〔産政塾への参加〕

第21期産政塾に参加させていただきました。職場の上司に勉強になるから是非、と勧めていただいたのがきっかけでした。入社以来人事に所属していますが、この頃、長年担当してきた業務内容が変わり、何事も勉強という気持ちがあつたのと、自分と向き合うよい機会と考え、不安に思いつつも快諾しました。

手渡されたパンフレットを見ると「殻の外へ踏み出そう」というテーマが掲げられていました。率直に「踏み出したいとは思わないなあ」と思ったことを覚えています。

開塾式には、そうした前向きと後ろ向き両方の気持ちを抱きながら出席しました。これからの進め方に加え、1人5分間の前に立つての自己紹介などがありました。「前に立つて5分も?!」と思いましたが、皆さんの口は滑らかで5分は全く足りていませんでした。ただ圧倒されてしまいました。グループでの企画検討では、初回から議論が白熱し、帰りには、固い殻を持つ私も新しい世界へ一歩踏み出せるのではないかと、これからの産政塾への期待に心がいっぱいになっていました。

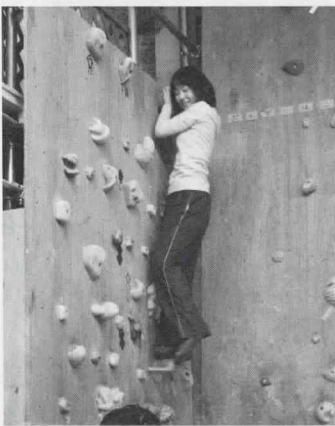
〔心に残る企画「壁を越えろ!フリークライミングに挑戦」〕

世界のトップレベルで活躍し、日本人女性初のプロフリークライマーである尾川智子さんを訪ね、道具を使わずに自分の力だけで岩を登るボルダリングの体験と、これにかける尾川さんの講演を伺いました。

行く前に尾川さんのボルダリングのDVDを見ました。指の関節1つ分にも満たない岩の凹凸や隙間に指を掛け、逆さまになって岩に張り付き、叫びながらクライミングしていました。「これは無理だ」とすぐに思いました。私は運動神経に自信がない訳ではありませんが完全に腰が引けていました。クライミングは私にとつて未知の世界だし、できる範囲でがんばってみよう、くらいに思っていました。そんな軽い気持ちでジムを訪れました。小さく細い尾川さんにお会いし、DVDで見たハードワークする姿が想像できませんでした。

まずは、かなり久し振りのラジオ体操とストレッチ。この時点ですでに若干息が上がり、明日もしくは明後日の筋肉痛は確信していました。そして尾川さんからボルダリングについての説明を聞き、すぐに順番にやってみました。初めて石に手を掛けてまず思ったことは、「私には手と足合わせて4本ある。この4本をどの順番でどの石に掛ければうまくいくのだろうか？目の前には壁だし、視野の外で上下左右に分かれた手足を総合的に判断し、テンポよく動かさないと成り立たない」と、このスポーツにさらにびびってしまいました。

チームに分かれたゲーム形式になり、これはまずい…と思いました。チームの皆に迷惑をかけるわけにはいきません。チーム内でのパート分けでは難易度の低い所にさせてもらいました。そうやって何度かチャレンジしていくうちに、だんだんとコツがつか



めてきて、私の4本の手足がチームワークを発揮するようになってきました。そうなってくると、もう少し高いレベルに挑戦したくなり、難易度の高い所をチームの皆に心配されながら登ってみました。コツが分かると楽しくて、特に難しい課題をクリアできた時には達成感がありました。最後に、チームのメンバーでつなぎ、どこまでいけるか競うゲームでは、自分でも、これまでの人生の中でこれだけ歯をくいしばり叫びながらファイトしたことはないというくらい、とにかく次の石をつかみ進むことにこだわりました。背中の中から聞こえる皆の声援が本当に力になっていました。全力で取り組めた自分への満足感と達成感に満たされ、とても爽やかな汗をかきました。

この企画を通し、まず自分でやってみることの大切さ、実践を通して得るものの大きさを知りました。身をもって学べた企画だったからこそ、初めての企画にも拘らず、塾生が一気に団結できたように思います。

翌日、全身重度の筋肉痛に見舞われました。翌日にきてホッとしました…。

「心に残る企画」「非日常空間と現実を対比させ、今一度『豊かさ』とは何かを考える」
産廃不法投棄の問題を抱える豊島、自然と美術を融合させた「現代アートの島」として地域活性化を行った直島を訪れました。

いずれの島でも島民ひとりひとりが地域の問題、地域活性化に主体的に取り組む姿がとても印象的でした。特に豊島において、これまで起こってきたこと、島民の怒りと悲しみ、現在も続く島を元に

戻そうとする絶え間ない努力をお聞きし、言葉に表せない、心に重いものを感じました。ある一人の金儲けのために島民は「普通の生活」を奪われてしまいました。その業者の環境や島民の生活に全く配慮のないやり方、それに対する県政のふがいない対応など、許せないという気持ちが生じ、強く渦巻きました。その一方で、事件発覚以降、この事件が全国に報道され、たくさんの方々が「対岸の火事」であつたことに気付かざるをえませんでした。私自身、テレビのドキュメンタリー番組で、「豊島の産廃不法投棄問題」という言葉を耳にした気がしますが、その程度の記憶でしかありませんでした。日本中で、世界中で、人の手によるもの、自然災害に起因するものを含め、いろいろな事件や問題が毎日といていいほどに起こっています。自分の身に直接ふりかからないことには、なかなか感情が表に出るほどに考えられませんでした。皆、同じではないでしょうか。豊島の方々もかつてはそうだったかもしれません。しかし、はからずもこうした公害を押し付けられ、ただ平穏な暮らしを取り戻そうと島民ひとり一人がつらい思いに耐えながら取り組み、全国に理解、支援を求めてきました。

同じように様々な問題に巻き込まれ、人生を懸けて取り組む人が本当にたくさんいることを知りました。私がいつ「対岸の火事」ではいられない状況におかれるかは分かりません。世界各地で起こっていることや自



分が体験したことを多くの人に伝えようといういろいろな行動を起している人がいます。もつとアンテナを立て、興味をもち、そうした方々の声に耳を傾けることから始めたいと思いました。また豊島の問題となった産廃は、廃車のシュレッダーダストが大部分でした。ものの作りをする側としても、もつと主体的に認識し関与していく努力をしなければならぬと思いました。

『殻』とつづいて思いつく

各企画を通して、「やり抜く」ことを決め、最初は到底手が届かないと思う目標にも少しずつ近付こうと挑戦し続ける多くの方々に出会い、どの出会いにおいても深い感銘を受けました。また、見栄を張らない、熱く真剣なディスカッションでの自分への振り返りを通して、これまでの自分と向き合い、見つめ直すことができました。

「殻」というのは、自分の周りにある、いろいろな集団の中で在るもので、それぞれの人間関係の中に自分で作っているんだと思います。きつと、厚さも大きさも色も違う殻をいくつも持って、いろいろな集団の中で自分の位置を確認して安心しようとするのではないでしょうか。そういう意味で『殻』は自分自身をはかるものさしとなります。だからこそ、これを意識し、自分と向き合うことが自己の成長につながるのだと思います。

産政塾での活動を通し、人と人との関わり合いの中で自分を感じることが、成長の第一歩であることを実感しました。まずは自分の範囲を知り、弱さを知ること、そして変わりたいと願うこと、目標

を高く持ち、それに向かって努力すること、そのプロセスこそが成果となつて自分を成長させ、いつの間にか「殻」を破らせているのだと思います。

「大切にしたいこと」

入社して10年、仕事を通じてたくさんの人と出会いました。どの会社でも言われることが多いと思いますが、「人事の仕事は他人事（ひとごと）」とよく皮肉を云われます。私はそうならないよう、困った時こそ声をかけていただけるよう心に留めてきました。業務歴も長くなり、頼ってもらえることが多くなると、それに満足してしまっていた自分がいたことに気付きました。自分が成長したいのかどうか、どんな自分になりたいのかと考えるより、目の前にある仕事を問題なく一つ一つこなしていくことが先決だと考え、それがきつと会社の役に立つことであるし、自分に求められていることだと考えました。しかし、企画を通して出会った方々は自分に到達可能かどうかなんてことはさておき、どんなに大きく遠かろうとも目標を高く明確に持ち、失敗を繰り返しながらもぶれることなく目標に近づく努力を続けていました。そして、その挑戦には必ずそれを支えるサポートする人たちがいました。どの世界にも一人だけでは限界があり絶対に誰しもサポートが必要なのだと知りました。どんな問題・課題に対峙しても一人よりも多くの力を結集することが目標到達への近道となります。身近な存在にこそ、サポート下さることへの感謝の気持ちを忘れず、まずは私自身が“サポート”できるよう努力したいと思っています。

「最後に皆さんに感謝!」

これまでの自分を素直に振り返り、正直に口に出すことができました。自分の弱いところ、反省すべきところだけでなく、間違っていないと自信をもつてよいところも見つけました。自分自身を冷静に認識し、これからなりたいたいと思う自分の姿を思い描くことができました。また、日々何気なく、「こういう自分になりたい!」と思い、そのためにどういう考えをもつて、どういう行動をとるべきかと一歩先を見るようになったと思います。

参加にあたり、職場の皆さんにはご迷惑かけながらも、「がんばっておいで」と快く出席させて下さった上司、同僚の皆さんにはこの場をお借りし御礼申し上げます。また、一歩踏み出す機会をいただき、背中を押して下さった上司には本当に感謝しています。

中部産政研 加藤塾長、安藤事務局長、高橋さん、いつも塾生をあたたく見守り、アドバイスくださり、本当にありがとうございます。そして、人の話を一生懸命に聞き、熱く議論し、懇親会は最大限に楽しめる(?) 21期生の仲間との出会いは、これからずっと、私の心の財産になります。閉塾式で塾長がおっしゃった、「日本も捨てたもんじゃない」という言葉は、皆さんを見れば十分うなづけます。私も負けずに、明るく元気にがんばりたいと思います! 本当に、ありがとうございます。



「殻の外へ踏み出す」ことへの一考察



トヨタ車体株式会社

兼 松 誠 也

《プロフィール》

かねまつ せいや

- 1996年 トヨタ車体株式会社へ入社
人事部へ配属
- 2001年 生産管理部へ異動
- 2008年 人事部へ異動
現在に至る

〈趣味〉 読書、音楽鑑賞、映画鑑賞、長距離走、波乗り

〈その他〉 良き夫であり、良き父親である

「今年はお前に決めた。」

上司からのその一言で、第21期生のトヨタ車体代表としての活動が始まりました。産政塾の活動内容は、おぼろげながらではありますが過去の塾生から伝え聞いており、その楽しげな雰囲気は期待するものが大きかったのですが、一方で「いろいろと時間を取られるだろうな・・・」という一抹の不安を感じたのを記憶しています。以降、事務局より第一回の案内と企画案の検討依頼が来るまでは、すっかり忘れておりました。

さて、事務局から案内が届き、本格的に企画を検討しなければならなくなりました。私の企画のスタイルは、取り組むのは早いですが納期がまだ先というだけで安心してしまい、結局、最後は追い立てられるというものであり、良い企画が出るかどうかはその時々体調や運に大きく左右され、一瞬のひらめきに賭けるものであります。

今回も例にもれず、あせり出したのは締め切り当日。しかも深夜残業がひと段落し、さあ帰ろうかという時に「今日は締切日」というのに気付いてしまいました。しかし、冴えている時は恐ろしいもので、残業で疲れた頭に様々なアイデアが浮かんできました。

その様々なアイデアを「楽しむ」ということ「自分のやりたいこと」を中心に、「今回のテーマである殻の外へ飛び出す」を頭のほんのかたすみに入れて選抜を始めました。

そもそも殻の外へ踏み出すとはどういうことでしょうか。殻の外にでるには殻を割るのか？殻をむ

くのはゆで卵と甘栗か？などと考えていくうちに、「殻」を「壁」に見立て、無性に壁を超えてみたくなってきたのを覚えています。まさに原始衝動が沸き起こり「私のテーマはこれにしよう！」と決め、企画書を一気に書き上げ意気揚々と帰路に付きました。ちなみに、テーマはご存知の通り？「壁を越えろ」フリースライミングに挑戦」です。今にして思えば、何かのテレビ番組で女性プロクライマーの尾川智子さんが飄々と壁を越え、クライミングの魅力を熱く語るのに魅了され「この人に会ってみたい」という思いを抱いたのが、今回の企画の「種」になったのかも知れません。

いずれにしろ、この企画が通れば必ずよいものになるという変な自信と、成功の予感・イメージがこのときからありました（まだ何も始まっていないのに…）。

さて、開塾式当日。各人それぞれが自らの企画をプレゼンし、グループの代表企画を決める大切な日。案の定、業務都合により欠席を余儀なくされました。「これも運命か」と半ばあきらめながら懇親会に向かいましたが、Eグループの皆さんはつたない企画書から（想像力を最大限働かせ）趣旨に賛同いただき、私の企画を通してくれました。リーダー就任というまったく不要なおまけで付けてくれて。

さまざまな自己診断をやる度に「リーダーシップに課題」と言われ続ける私には正直荷が重いのですが、責任を持って自らの企画に取り組みたいという強い意思の下、甘んじて受けさせて頂くことに

しました。とりあえず、リーダーをやり遂げるといふ、越えなければならぬ壁が出来上がりました。ところで、この企画を「いつ」やるのか？ 企画を進めるにあたつての重要なファクターです。これに関しては抵抗むなし、産政塾事務局の高橋さんの「ものすごい重圧」に「あつさり」と寄り切られる」かたちで、第1回目の企画として進めることになりました。1番目というプレッシャーがあることはもちろんですが、第1回目の企画の実施は4月。4月に実施するためには2・3月に作りこんでいかなければなりません。ご存知の通り2・3月といえば人事や労組にとつて大変重要な（負荷の高い）時期にあたります。最初に思つた「いろいろと時間をとられるだろうな・・・」というのが、最悪の形で結実しそうです。

ということと具体的な企画検討が始まりましたが、検討の進まない度合いは当初の想定以上です。多忙な時期というのもあり、打ち合わせへの全員参加が大変難しく、また、打ち合わせをやつたとしても（皆さんにも経験があるでしょうが）、打合せをただの飲み会にするのには何の努力も必要なく、何も決まらないまま、ただただ楽しい時間が過ぎるだけでした。事務局の高橋さんには大変な心労をおかけしたことを思います。

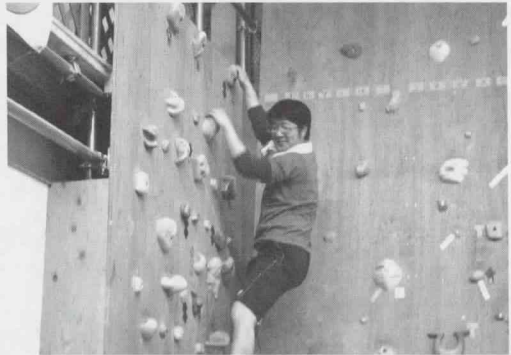
しかし、高橋さんの適切なアドバイス、それをサポートしてくれるEグループメンバーの能力の高さと前向きな取り組み姿勢により、少しずつ企画が具現化してきました（ボルダリングジムでプロクライマーの尾川智子さんによるボルダリング指導と実技＋講演を軸にした体験型の企画です）。そ

れに伴いボルダリングに関する知識も増え、いつの間にかボルダリングとフリークライミングの違いやチョークの利用方法、ボルダリングシューズの選び方、ユニクロのカーゴパンツが良いらしい……などのマニアックな話題を一通り語れるようになってきました。

また、当日の講師である尾川智子さんが名古屋にお越しになった際に、打合せの時間をとっていただき、実物を間近で拝見する機会にも恵まれました。印象としては「男前な女性」といった感じでした。……芯の強そうな感じと小柄だけでも頑丈そうな体に圧倒されました。ここまで来ると「ボルダリングをやりたい」という気持ちがいぶ高まっています。

そもそも、ボルダリングとは何か？今一度おさらいします。

岩に登ることをロッククライミングといいます。ロッククライミングの一種にフリークライミングというのがあります。道具を使わずに岩の出っ張りなどを利用して素手と足だけで登るクライミングです（これに対し、アブミや縄はしごなどの登坂のための道具を使って登るのはエイドクライミング）。そのフリークライミングの中でも、比較的低い、落ちても大丈夫な高さの岩をロープ（命綱）なしで登るものをボルダリングといいます。ロッククライミングの中でもとりわけ技術が必要とされるジャ



ンルで、純粋なクライミングのエッセンスのみを追及することができそうです。

クライミングする人を「クライマー」と呼ぶように、ボルダリングをする人のことを「ボルダラー」と呼ぶそうです。

ボルダリングは無酸素・有酸素のどちらの運動も可能で、さらに体をひねる動作が幾度もあるのでインナーマッスルを使い代謝がアップし、ダイエット効果が抜群とのこと。

さて、当日を快晴とともに迎えます。企画内容の多くは屋内でやるものの、移動を考えると大変喜ばしい天候です（今年の産政塾は雨が多かった？）。

やり残したことやモレは無いはずですが、クライミングは初めて・産政塾も初めてということで心地よい緊張感と若干の不安を胸に、当日の会場である横浜に向かいました。

余談ですが、移動するのは精神衛生上とても良いですね。仕事柄、席についていることが多く、転地効果を実感できました。

当日の企画の評価は参加した皆さんそれぞれのご判断に委ねますが、ボルダリング体験は尾川講師の巧みな進行と意外なほどゲーム性が高く、想像以上に盛り上がったと感じています。また、講演内容も真摯な語り口から熱い言葉がほとばしり、心に響くフレーズが多々あったように思います。

ボルダリング体験を通じた個人的な感想ですが、「体力を限界まで使う爽快感」に加え「現実的に

壁を越える達成感」を手軽に得られる稀有なスポーツであると思います。

まったく新しいことに挑戦し未知の世界を垣間見ることで、自らの世界観が広がり、結果として自分の中にいくつもある? 「殻」を破ることにつながったと確信しています（もともと薄い「殻」かもしれないが）。

「人間は木からおりて進化した」とよくいわれますが、その進化に逆行するようなことを行うことで発生する摩擦のようなものを感じ取り、その摩擦は今後も私の中の原始的な欲求として残り続けるのでは? と思っています。

また、皆さんの中にも何かを残すことができていれば、また、一人でも多くのボルダラーを生み出すことができれば、この回を企画したEグループの一員として大変喜ばしいことです。

第1回の企画をやり遂げたことで気が抜けたのか、以降の出席率は芳しくありません。しかし、企画書を拝見させていただく限り、各回とも練りに練った企画であることがにじみ出ており、「参加しておけばよかった」というのが正直な感想です。

最後になりましたが、産政塾事務局の皆様、塾生の皆様、Eグループのメンバー、トヨタ車体人事



部の皆さん、ありがとうございました。皆様のおかげで、新しい世界が開けました。今後ともよろしくお願いします！



産政塾を振り返って ～ココロの変化～



東邦ガス株式会社

河 井 勝 貴

《プロフィール》

かわい かつたか

- 1997年 東邦ガス株式会社入社
春日井営業所、リビング営業部、
(社)日本ガス協会国際部、原料部、広報部、
人事部 安全・健康グループを経て、
人事部・人事グループに所属
現在に至る

〈趣味〉ビリヤード、美術鑑賞、映画鑑賞

〈特技〉水泳、バルーンアート

〇 はじめに

2010年8月、全ての企画を終えた感想は、「楽しくて、あつという間の7カ月」であった。

含蓄のあるお言葉をいただいた加藤塾長ならびに安藤事務局長、そして企画打ち合わせの段階から要所で適切なアドバイスをいただいた事務局の高橋さんに、それぞれ感謝を申し上げます。

また、全ての企画に参加でき、皆勤賞をいただくことができたのは、ひとえに上司および職場メンバーの理解と支援のお陰であり、この場を借りて謝意を申し上げます。

さて、本稿では、各企画に参加して自分が何を感じたか、自分がどう変化したか、本塾のテーマである「殻を破れた」のか、思い出すための確認作業も兼ねて振り返り、その都度感じたことや気持ちの変化にフォーカスして記していきたい。

各論に先立つて結論から述べると、自分の「殻」は一部分でも破れたとの手応えを感じている。自分が感じたこと、他メンバーの意見や視点を加味して考えるに、私にとっての「殻」とは、状況によってその都度姿を変える、まことに掴みどころのない、それでいて常に自分のそばにあり、心や行動を委縮させる、やっかいなシロモノである。時には甘えや諦めを招く原因となるが、一方で、達成感を味わうためには欠かせない重要なステップともなり得るものではないかと考える。

第一回 開塾式

当時、自分が記したメモによると、参加前では、「得体の知れない異業種交流会」というイメージが先行し、とかく不安であったことが分かる。当時の所属部長からは、「楽しんで、仲間を作ってこれば十分である」と送り出された。とはいえ、参加者はどんな人たちなのか？自分が苦心して考えた3つの企画案はちゃんと受け入れられるのか？自分の殻とは何なのか？等、様々な不安を抱えて開塾式に臨んだ。

自己紹介の時間になると、8割方が労働組合（以降、労組）の出身者であるためか、総じて話術が巧みであることにライバル意識が出て、「これは負けてはいられない！」と気合が入ったことを覚えている。

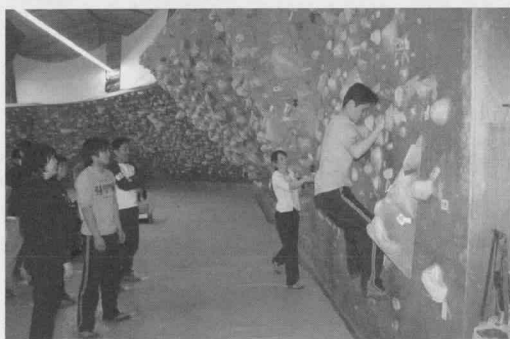
続いて決められたグループに分かれ、すぐに役回りを決め、さらには持ち寄った企画案の中から一つに絞り込むようにと指示があった。企画案の絞り込みについては、短時間のうちに10近くもある案の中から一つを選ぶことは、実に難しいものだった。自チームメンバーの人となりもわからぬ状態であり、かつ、メンバーが持ち寄った企画は、どれもふるい落とすには惜しいものばかりで、リーダー（私）が強権的に決めるには難があった。そして気分転換に雑談をするうち、メンバー全員のある共通項が見つかった。それが、「自分に鞭を打つのが好きなこと」であった。こんな共通項に当てはまる企画はないか？・・・あった！荒行とも言える「滝行」である。以降、いかに苦痛を味わうかについて、皆で一生懸命考えていくこととなった。

第二回 ボルダリング体験く壁を越えろ！

たかが壁登りと侮ることなかれ。以降3日間はパソコンが操作できないほど腕の筋肉が腫れあがるというハードなスポーツであった。その道では有名な世界ランカーである講師の成功体験や、挫折を乗り越える不屈の精神力には、「よくそこまでやり切れるものだ」と率直に感服した。また、自分の体験を伝える努力を惜しまず、入念な準備を踏まえたプレゼンや、ボルダリング体験を楽しくするための工夫を凝らしたゲーム進行等、彼女のホスピタリティも心に響いた。しかしながら、「自分にはとても真似できない」、「彼女は世界を相手に戦う雲の上の人だ」と、一歩引いてしまい、自分に当てはめて考えられなかったのが反省点である。

本企画では、自分の考え方の傾向を再認識した。それは、個人で高い点数を求めるのではなく、チームのために低い点数でも着実に点数を稼ぐというものである。一見、歓迎すべき考え方だが、言い換えれば全力投球しない、単なる省エネ型である。

ここでは、無理を承知でひたむきに高得点コース（失敗すれば0点）にチャレンジする新開さんの姿に素直に驚いた。自分が彼のように若い



時分であっても、同じことはしなかったであろう。どちらがチームにとっての全体最適なのか、非常に考えさせられる場面であった。

第三回 滝行く滝に打たれて自らを磨く！

(1) 打ち合わせ段階

我らがDチームの主催となる本企画は、非日常体験を通して、いかに自分たちがちっぽけな存在であるかを、身をもって感じることをねらいとした。開催地は、①（ホームページの写真では）滝の迫力はないが、由緒あるお寺であり、写経も可能な「油山寺」、②滝の水量は凄いが、趣味サークルのような団体「湘南滝の会」の2候補が挙がった。そして、討議の結果、候補①に下見に行き、そこが駄目なら②を試そうとの結論に至った。

(2) 下見・・・涙と笑いの3月24日

この下見が、我らDチームの盛り上がりのかきつけとなった最大の珍事であった。極寒の中での荒行と、やたら体格の良いご住職と、ユニークなお弁当屋のおじさんとの必笑の出会いという、今後の人生の中でもまず体験することのない非日常体験となったのである。

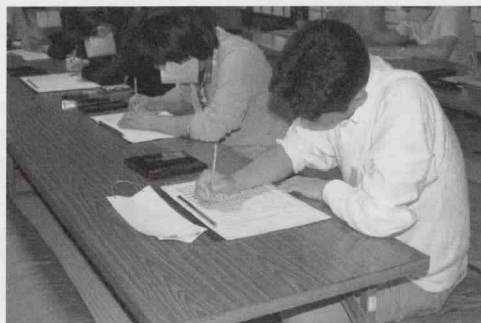
滝行については多くを語る必要はない。百聞は一見に如かず、である。本稿を読んで少しでも興味

を持たれた方は、まず体験されることを強くお勧めする。3月の水は、足首まで浸かっただけで、千切れたのかと思うほどに痛い。教わった呪文を大声で唱え続けていなければ、とても耐えられない。かつ、滝は一見すると迫力はないが、いざ浴びると、落下する水圧は相当に強いものであった。「滝行で心に変化があったか？」と問われれば、ない。一度や二度の荒行で殻が破れるのなら、誰も苦労はしないだろう。しかし、浴び終えた時の感覚は、なかなか言葉では言い表せない。体はポカポカと火照り、気分は妙に清々しいのである。

さて、油山寺のご住職のお話は最高にユニークだった。体験談を織り交ぜた非常に含蓄のある言葉で唸らせるかと思えば、俗な話で肩透かしを喰らわせるという、巧みな話術であった。

そして極めつけは、お喋り好きなお弁当屋さんのご主人の、とめどなく続くお話である。薬膳料理のお弁当で、どの食材も自然の旬のものを使い、本当においしい食事であったのだが、とにかくおじさんの話が長い。料理の説明が始まったはずが、2時間近く話し続け、いつの間にかバナナでぼろ儲けた話や、ボクシング世界チャンプのファイティング原田の話になり、我々が咳払いをしようが、食器を片づけようが、お構いなしに話は続く…。

全行程を終えた帰りの車内では、滝の冷たさと滝行後の爽快感、写経で



個々人が感じたこと（集中できた者とそうでなかった者とに二分した）、ご住職の講話の中での「俗」の部分や、珍妙なお弁当屋さんなどについて、話に花が咲いた。あれほど笑い転げ、複数の人と一体感を持てたのは何年ぶりだったろうか。この日をきっかけに、私の中の何かが変わったような、得体の知れないパワーが自分の中にみなぎったような気がした。以来、昔の趣味を復活するなどして、自分が楽しめる時間を持つようになり、それが良い息抜きとなり、毎日の生活がプラス思考に回るようになった気がする。

下見を終えた時点で、我々の企画は成功を約束されたも同然であった。本番では雨で水温が上がってしまい、滝行のインパクトが薄れたのが残念だが、雨天ゆえに、雨音以外は聞こえないという一種の非日常空間の中で写経を行うことができた。写経は、当初は想定していなかった効果を生んだ。滝行よりもむしろ、静けさの中での写経の方が印象深かったという塾生が相当数いたのである。塾生たちの感想は総じて好意的なものだった。苦勞して企画した甲斐があり、私は大きな達成感を味わうことができたのである。

ここで、油山寺のご住職の言葉の一部を書き記しておきたい。「穀は、機が熟すれば自然に破れるものである。機が熟すまでは、できることをしつかり準備しておけば良い。」非常に良い言葉をいただいた。これから私は、焦らず、できることから腰を据えて取り組んでいこうと思う。

第四回 香川県 豊島・直島く豊かさとは何かを考える

豊島の住民は、産業廃棄物の不法投棄を原因とする公害問題に、今なお多大な苦痛を強いられている。行政の事なかれ主義や、産廃事業者の住民無視の行き過ぎた利益追求などにより、島民の心とも言うべき海は汚され、健康は蝕まれた。

この問題の経緯を説明して下さった方は、島民代表団として30年以上の歳月を捧げて豊島の惨状を全国に訴え、幾多の誹謗中傷や「無関心」の壁を乗り越え、地道な努力の積み重ねの果てに、ようやく浄化プラントによる産廃処理を勝ち取った方であった。共に闘った仲間の多くはすでに亡くなっているという。一つ一つの言葉に何とも言えない重みがあった。当の加害者である産廃事業者は、わずかな罰金を払ったのみで、現在でものうのうと金属くず回収業を営んでいるという。思い出すたびにはらわたが煮えくり返る思いである。

メディアを通じて知っていたつもりであった問題も、自分で現地現物を見るまでは、他人事としてしか捉えていなかったと思い知らされた。私が一人の社会人としてできることは、情報感度を上げ、メディアを通じて見聞きする出来事を当事者意識を以って捉え、何ができるのかを自分の頭で考え、できることから実行に移すことである（例えば選挙権の行使など）。現地現物を見て判断し、行動する「現場力」の重要性を改めて痛感した。

アートの島、直島では、背筋に電撃が走るような作品には出会えなかったものの、アートは心を落

ち着かせ、また心弾ませてくれるものだということを思い出させてくれた。（閉塾式後、本稿を書いている時点で、美術館、博物館に4度足を運んだ）。

第五回 山梨日立建機訪問く行動力の源泉を知る

ここで感じたことは、第四回と同じく、「現地現物を見なければわからない、あるいは感じ取れないことが山ほどある」ということだった。まずは一步を踏み出す勇気が大切であり、自分を突き動かす原動力も必要不可欠である。また、年齢に関係なく、想いがあれば成長を続けられる。山梨日立建機の社長がおっしゃった、「人の役に立つ人間たれ!」という言葉は、暮らしを支えるインフラ企業に勤める者としての原点を想起させられた。自分がガス会社への入社を決めた時の気持ちがいかにあつたように、今でもそれだけは忘れていない。いわば「ガス屋のアイデンティティ」である。

第六回 神戸く被災のために何ができるか?

私自身が震災当時に西宮市に住んでおり、被災した一人である。友人を二人亡くした。屋根があるのが怖いため、住んでいた下宿（少し傾いた程度）ではとても寝ることができず、同じ下宿の友人と大学の敷地内にテントを張り、寝袋で寒さをしのいで3日間を過ごした。自分の食事を確保するのに

精一杯で、ボランティアなどする余裕はなかった。ラジオから流れるニュースは、刻々と死者数の増加を伝える…。震災から数週間後、友人の葬儀に出席した。震災による火事で亡くなった友人の棺は、とても小さかった。涙が止まらなかった。あまりにつらい出来事であり、これまではなるべく思い出さぬようにしてきた。

しかし、今も残る震災の傷跡を巡り、肉親を亡くしたという語り部の方々から当時の様子を聞くうちに、私自身の記憶も風化させてはいけないと思い直すことができた。自然災害である災害は止められないが、「減災」は誰でもできる。減災とは、災害対策品および食料の常備や、家具の固定、有事の際の家族の集合場所を決めておくことなどで、被害の拡大や精神的ストレスを少しでも減らせるとの考え方である。この「減災」というキーワードを、なるべく多くの人々へ伝えていくことが、これからの私ができることである。本企画に参加した他のメンバーも、同じ思いを共有したはずである。

第七回 閉塾式

「もう終わってしまうのか」という寂しさが募る半日であった。殻を破って（？）、最後の挨拶のトッブバッテリーを立候補した。第21期生の仲間と、今後も同窓会などで会えることが楽しみである。

○おわりに

第21期生は誰もが魅力的な方々であるが、特に多大なご助力を下さり、一丸となって企画を練り上げてくれたDチームのメンバーに感謝を申し上げる。包容力があり、他人への気遣いが自然にできる後藤さんを始め、常に冷静沈着・理路整然と物事を進める棚橋さん、前向きにぐんぐん走って周囲を巻き込む、ガッツ溢れる新開さん、記憶力が抜群でものごしが柔らかく、企画の細部まで詰めていた坂田さん。どなたが欠けても我々の企画は成功しなかったのではないか。年齢差はあれど、ぜひ今後もお付き合いを続けていきたい仲間である。なお、平成23年3月下旬には、極寒の中で、我らDチーム主体の有志による第二回滝行を決行し、“自分に鞭うつ” 予定であることを申し添えておく。

このような新しい機会を与えてくれた会社、ならびに産政塾事務局に、重ねてお礼を申し上げます、本稿の結びとしたい。本当にありがとうございました。(了)



産政塾を振り返って



丸栄労働組合

川 田 静 枝

《プロフィール》

かわだ しずえ

- 1996年 株式会社 丸栄入社
- 2006年 丸栄労働組合 名古屋支部執行委員
- 2008年 丸栄労働組合 本部執行委員（名古屋支部執行委員兼務）
現在に至る

〈趣味〉読書・スポーツ観戦

〈家族〉母、姉、兄

〈はじめに〉

私は、4年前に労働組合の役員に就任し、この4年間でさまざまな上部団体主催のセミナーや講演会等に参加させていただいてきました。非常に充実した4年間を組合役員として過ごせたことは幸甚なことと感じております。また、この産政塾に参加させていただき他業種の仲間との出逢い、交流を非常に楽しみにしておりました。

〈第1回〉「開塾式」

1月も下旬に差し掛かり、単組の本部執行委員会を途中退席しての開塾式でした。他業種の方々と触れ合うのは久しぶりの事でしたので、期待と不安の入り混じった緊張の一日でした。

そんな中、開塾式がスタートし加藤塾長より「殻を破る」「型を守る」という2つについてご講演いただきました。その中でも、私には「型を守る」という言葉の意味を考える良いきっかけとなりました。日常業務の中で、諸先輩方が行ってきた業務を教えられたとおりになさってきた自分が居ました。自分自身で業務改善に向けて取り組む姿勢ができていなかったように思います。今思えば、この講演がきっかけで、職場での業務に対する取り組み方が変わったように思います。昔からの伝統も大切ですが、時代に沿った業務内容にするため、新しい業務方法の構築をしたり、上司と相談して簡

素化したりと同じことの繰り返しをしていた毎日の業務が、日々楽しく感じていくようになりました。また開塾式では、一人ひとりが持ち寄った企画内容を検討し、自分たちの班で取り組むテーマを決める一日でしたが、企画内容一つ一つを共有しながらグループディスカッションを進めていくうちに、一人ひとりの思いの強さを感じました。

結果、近々起こるであろう「東海・東南海地震」への心構え、事前準備について、経験者の方からのお話聞くことで危機感を持つとうと「震災に学ぶ」が私たちの班のテーマとなりました。

〈第2回〉「壁を越える！ ～フリークライミングに挑戦～」

神奈川県横浜市へ、尾川智子さんを訪ね、壁を乗り越えるというテーマについて体験・講演をいただきました。

ボルダリングとは何だろうか？というところからスタートしましたが、まさしく「壁を越える！」というテーマにピッタリの企画内容でした。元々、スポーツをしていたので、登る回数を重ねるにつれ、コツをつかみ負けず嫌いな自分本来の部分が前面に出てきました。ボルダリングの時間が終われば筋肉痛になることも全く考えずに・・・。

結果的には、筋肉痛にもならずピンピンしてましたが（笑）

尾川さんのように、自分の中で壁（目標）を決め、壁を乗り越える（目標を成し遂げる）ための努

力をする事は、人それぞれ大小に差はありつつも、持っているスタイルだと思います。自己分析をする中で、人と比べて評価をしてしまうと、反省の部分が大半になってしまい、正当な評価が出来ないように感じますが、人と比べても仕方ありません。人間は一人ひとり性格も違えば、能力も違います。自分のペースで自分の壁（目標）に向っていけば新しいことが見えてくると思いました。そして、一つの壁を乗り越えたとき、また新たな壁が見えてくると感じました。

〈第3回〉「滝に打たれて自らを磨く　心が変われば、行動が変わる」

あいにくの天気の中スタートした第3回の産政塾企画。集合時間を勘違いして若干遅れての合流となっていました。名鉄名古屋本線、東岡崎駅に集合して観光バスに乗り込み静岡県袋井市「油山寺」へ、いざ出発。滝行・写経の体験は初めての事で、自分の中でなかなかイメージ出来ませんでした。

油山寺へ到着し、まずは住職のお話を伺いました。お話の中で、「殻を破りたい」と思うのではなく、期が熟せば自然に殻は破れるというお言葉をいただき、自分自身の中で焦るのではなく、自分自身が成長するためには何をするべきなのかを考える事の方が重要であり、目の前の事にしっかりと向き合い、しっかりと取り組む事の大切さを学びました。

雨が降りしきる中ではじまった写経では、参加者全員が黙々と普段使い慣れない筆と格闘しながら、雨音を背に半紙に向かっていました。私も、仕事柄、筆を使う機会は他の方よりは多いほうだと思い

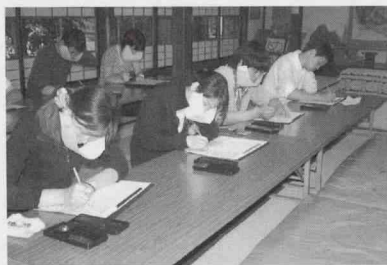
ますが、ここまで無心になり集中して字を書くことはなく、身体全体に力が入り、書き終わった時に全身で感じていた緊張が心地よく感じました。

雨足が強くなる中での滝行となりましたが、雨の中で滝に打たれ、又、全員が終わるまで一緒に滝つぼの中に足を浸し、全員で一致団結したように感じました。滝に打たれ終わった後は、スッキリした気分となり、やり遂げた感動と、忍耐力の大切さを改めて感じた時間にもなりました。

第3回、企画を通じて無心になって集中する事、耐える事の重要性を学び、新しい明日へのスタートが出来た一日となりました。

〈第4回〉「非日常空間と現実を対比させ、今一度、豊かさ」とは何かを考える」

産政塾がスタートし4ヶ月が過ぎた5月下旬、宿泊企画のスタート。お天気にも恵まれ絶好の企画
決行日和となりました。個人個人で切符を手配し、いざ岡山県へ。新幹線で岡山まで行き、JRを乗
り次いで、宇野駅へ。岡山駅で数人の塾生と一緒にになり、そろって宇野駅まで移動しました。宇野駅
へ到着後、すぐにお昼御飯を調達しに駅前のコンビニへGO!! 駅構内のベンチに座り、ピクニック
気分でランチタイム。参加メンバーが全員揃ったところで、宇野港へ移動し、海上タクシーで一日目、
初めの目的地「豊島」へ。



豊島へ到着し、早速バスに乗り換え「産業廃棄物不法投棄」の現場へ向かいました。今回も、事前資料に目を通し参加しましたが、豊島では今までにない現状を目の当たりにし、ショックを隠せませんでした。同時に、怒りもこみ上げてきました。不法投棄された産業廃棄物とともに生活している島民の方々の苦悩に満ち溢れた時間が、私には想像することも出来ず、何も知らずに日々生活してきた自分が恥ずかしく思いました。

豊島が以前のような姿を取り戻すには、まだまだ多くの時間が必要です。私たち一人ひとりではなにも出来ませんが、一人が二人、二人が三人と多数の力が集結する事によって何か出来る事はあるはずだと考えるきっかけを与えていただいた貴重な時間となりました。

あつという間に時間は過ぎ、海上タクシーに乗り込み、次の目的地「直島」へ移動。直島宮浦港へ到着して、まずは宿泊となる宿へ荷物を置きに。荷物を置いて休む間もなく港へ戻り、海岸のゴミ拾い活動の開始となりました。参加メンバー全員で手分けしてのゴミ拾い。決められた袋に分別しながら海岸の端から端までゴミを拾っていきます。港から遠くはなれた海岸で大物を発見!!大きなタイヤが砂の中に埋まっていました。なかなか掘り出せず苦労していると、助っ人が到着。男性メンバー数人で力を合わせて30分程かかりやつと掘り起こしました。ゴミ拾い活動は、身近に行える活動ですが、なかなか参加する機会がなく、汗をかき力を合わせて何かをする事の爽快感・達成感を味わいました。宿に戻り、すぐに晩御飯。みんな宿泊という安心感のためか、いつもの懇親会とは違い遅くまで、食べて呑んでの大騒ぎの夜となりました。

宿泊企画、二日目、昨日の二日酔いを吹き飛ばすかのような快晴に恵まれ、各自お弁当を持参しての移動。まずは、地中美術館へ。

地中美術館は、美術館全体がアート空間となっており、現実とはかけ離れた時間を満喫しました。その後、5人程の班に分かれて、家アートの見学へ。古民家を改築してのアート空間は、地域が活性して人が集まる空間ではなく、島民主体で島民のペースで作られている空間。都会のような慌しさではなく、非常にゆっくりした時間（空間）を感じました。

一泊二日の旅は、あつという間に終わり、また忙しい毎日へ戻りたくないと感じるもどかしさを我慢して、名古屋までの帰路に着きました。

〈第5回〉「行動力の源泉を知る」

第3回の滝行につづき、ふたたびあいにくのお天気となりました。まずは、名古屋駅の名鉄バスセンターへ集合。名鉄バスに乗り込み、目的地の「山梨日立建機」へ出発。往路のバスの中では、今回ご講和いただく「山梨日立建機・雨宮社長」のテレビ出演を録画したものをしながらの移動となりました。

梅雨で雨足が強くなり「山梨日立建機」へ到着したときには、土砂降りに…。



二階へお邪魔し、早速、講演がはじまりました。映像から感じた雨宮社長の行動力・実行力・先導力。まさに社長としてトップに立つ人に必要な力を備えているすばらしい方だと感じました。そして、適度なセクハラ発言も……（笑）

私が組合役員として、何が必要かを考えたとき、少なくともリーダーシップという言葉を感じて浮かべます。しかし、リーダーシップとは、簡単なようで非常に難しい言葉であり、簡単に行動に移せないと感じています。雨宮社長にお会いして、今の自分に何が出来るかを考えるきっかけとなり、自分の成長のために何をするべきか、企業発展のために一人の従業員に何ができるのか、いろいろな事を考える一日となりました。明日から実行できること、回りを巻き込んで前に進むこと。一つのことを冷静に見極めて、行動に移していくことの大切さを学ばせていただきました。

〈第6回〉「人と防災未来センターを訪ねて、減災のために何ができるか？」

～意識醸成について考える～

第6回は、私の班の企画となりました。最後の企画ということもあり、プレッシャーを感じての企画内容の詰めの作業に取り掛かりはじめた6月中旬。業務都合により、どうしても参加することが出来なくなってしまうしました。しかも、私の担当はフォーラム係。参加できない私には、フォーラム原稿を作成することができません。結局、C班メンバー及び、事務局の高橋さんに負担を掛けてしまう

結果となつてしまいました。申しわけございませんでした。この場をお借りして、お詫びさせていただきます。また、良きメンバーに恵まれた事、感謝したいと思います。

〈第7回〉閉塾式

間もなく立秋を迎える8月下旬。最後の集まりとなる閉塾式の日を迎えました。

久しぶりの集合を楽しむに、足取り軽やかにWINCあいちへ。

加藤塾長よりご講和をいただき、最後のグループディスカッションのスタート。最後のグループディスカッションでは、殻が破れたと思うところなどについて話し合いました。人前で発言をすることが苦手だった人。人とのコミュニケーションが苦手だった人。みんなそれぞれ苦手な部分を持っており、この産政塾を通じてたくさんの事を学び、たくさんの苦手を克服し、全員が前に一歩進んだと思います。

私自身、職制では部下のいない立場で、組合ではチーフという立場を担い、自分が置かれたチーフという立場に、迷走する時間がありました。一人で悩む事。みんな悩む事。内容によつては、自分ひとりの判断で前に進むのではなく、誰かに相談することが必要であり、誰かに相談する強さも大切だと学びました。

一人でできる事は限られますが、多くの人の力が集まった時、想定外の力を発揮することができ

と思います。

また、自分の殻を破った時、また新しい殻ができると思います。殻は一つだけではありません。次から次へと目の前に現れるものであり、一つひとつ破ってこそ、自分自身の成長に繋がると思います。これからの生活の中で、いくつの殻を破れるかわかりませんが、一つひとつの殻にしっかりと向き合い、自分の成長に繋がっていききたいと思います。

＜やろい＞

私は入社してから、4つの部署を経験してきました。2006年9月に労働組合の役員を担い、これまでの日常とは大きく変化しました。特に産政塾に参加させていただいている期間中は、さまざまな事がありました。私にとって劇的な半年となり、この半年で経験した事を糧に、次のステップに繋げるきっかけになりました。産政塾のテーマである「殻の外へ踏み出そう」は、今の私にとって一番大切なことだと感じています。

産政塾を通じて多くの仲間と出会うことができ、多くの貴重な体験をさせていただきました。こういった貴重な体験をさせていただく機会を与えていただいたことに感謝し、この場をお借りして、御礼申し上げます。



第 21 期 産政塾を振り返って

トヨタ自動車労働組合

後 藤 幸 治



《プロフィール》

ごとう こうじ

- 1968年 愛知県名古屋市生まれ
- 1987年 トヨタ自動車株式会社入社 試作部 部品試作課 配属
- 2009年 トヨタ自動車労働組合出向 執行委員(専従)
現在に至る

〈趣味〉 ゴルフ・温泉旅行・スキー・鮎釣り

私が「産政塾」へ参加したきっかけは、09年9月よりトヨタ労組の専従執行委員として労働組合に
来て間もない頃、書記長から「産政塾」に参加してみないか？と声を掛けて頂いた事が始まりである。
産政塾？？？初めは、何の事かさっぱり分からなかった。幼少の頃から勉強嫌いであった私は、これ
まで「塾」は無縁の世界であった事は言うまでもない。この年（41歳）になつて「塾？」。入塾前は正直、
戸惑いよりも不安の方が大きかった事を思い出す。

しかし、聞けば産政塾は次世代育成の場として「殻の外へ飛び出そう」をテーマに設立され、異業
種の方と様々な議論を交わす中で、「切磋琢磨」「視野・人脈拡大」や「価値観」を共に考え、企業人・
社会人として物事を判断する際に「何が大切か」を実践により掴んでいく事を学ぶ塾であるとの事。
実践はグループ毎に分かれ狙い・目的を明確に掲げ、企画・段取り・運営までを塾生自らが考え、
実践する事で「教わる事ばかりの固い塾」とは、かけ離れた「塾」である事が分かり、抱いていた「不
安」が「楽しみ」へと変化していった事を覚えている。

第21期の塾も今思えば本当にあつと言う間に終わってしまったというのが率直な気持ちである。し
かし、閉塾した今、思う事は産政塾に参加し良き仲間と出会い、様々な活動（企画・議論・懇親会）
を通じ、皆で意見を交わし議論を深める中でたくさんの「気づきと発見」、企画毎に「自身を振り返る」
事が出来た本当に素晴らしい塾であつた。この機会を与えて頂いた事に対し、本当に心より感謝を申

上げたい。

本稿にて約半年間の産政塾の活動で得た「気づき」や「発見」、そして、これまで歩んできた自分の人生について振り返る場としたい。

◆ #1 開塾式

09年1月22日（金）午後、名古屋駅前WINCあいちに集合。

私はトヨタに入社以来、組織の枠を超えて社外の方と研修を共にする機会は、ほとんど無かったが比較的、人と接する事を苦にしない自分にとって、他社の第一線で活躍されている人との新たな出会いや新しい発見を楽しむにしながら開塾式に臨んだ事を覚えている。

開塾式では、加藤塾長より『型を見直す』と題して講話を頂いた。自分の型とは何か？これまであまり考えた事のないキーワードであった。

しかし、よく考えてみると「自分の型」は誰よりも自分自身が一番良く分かっている事であり、それはきつとこれまでの成功体験に基づく自信からくる「自身の強み」ではないか？その強みが時として武器となる事もあれば、また逆に、その武器が災いして自身の成長を止める要因にもなってしまうのではないだろうか？今回の塾を通じて、これまで自分自身が考えていた「自分の型」としっかり向き合おうと共に「新たな自分の型」の発見を楽しみにしたいと思う。

◆ #2 壁を越えろ ～フリークライミングに挑戦～

ボルダリングの第1人者である尾川さんの拠点、横浜のジムにてゲーム形式での実体験と貴重な講話を聴いた。

体験のフリークライミングは、以前TVで子供がやっているのを見た事がある程度で、実際には勿論、初めてであったが子供でも出来るんだから……。そんな甘い気持ちで臨んだのが、そもその間違いであった。最初は笑ってやっていたが、徐々に腕の筋肉が張り、握力も奪われ「こんなに体力無かったか？」と思う程、メタボに成長した立派？な体には過酷であった。

また、チーム戦によるゲーム方式で競い合う事で「チームワーク」や「仲間意識」も醸成でき、少し遠慮気味だった塾生同士の会話も弾み、絆も深まったように思う。

講話では尾川さんから自分の夢を実現させる為に「決して諦めない！」そして、果敢に挑戦し続ける「チャレンジ精神」の大切さを学んだ。同時に、これまでの自分と今現在の自分にどれだけ「チャレンジ精神」があるのだろうか？と自問自答した。

いつしか歳を追う毎に何処か現状に満足し「果敢に挑戦する」という気持ちも徐々に薄くなっている自分に気付かされた時でもあった。何事も現状に満足しては、それ以上の成長は無い！尾川さんから学んだ「果敢に挑戦する事の大切さ」を忘れずにいたい。

◆ #3 滝に打たれて自らを磨く

「心が変われば行動が変わる」

今回は自分が属するDグループの企画であったが、役割や企画を検討するグループ討議で全員のある共通点が見つかった。それは、全員がMであると言う事である。中にはD・Mの方もいらっしゃいましたが・・・（笑）。そんな話で盛り上がっている中で、M集団の企画は、ごく自然の流れで自分の体にムチを打つ『滝行』に決定した（満場一致）

まだ肌寒い3月末、事務局の高橋さんとメンバーで静岡県袋井市油山寺へ下見に行った。

油山寺は由緒あるお寺であり、建造物からその歴史を感じた。また、住職も自分が思っていたイメージとかなり違って、松平 健似のダンディなイケメン住職だった事に驚いた。チョイ悪オヤジって感じかな？そして、境内に通されお寺の由来、歴史や住職の生い立ち等を聞いた後、今回の目的である「滝行」に向かった。

下見での滝行の印象を最初述べておこう。滝は一見、これは打たせ湯か？本当にこれで修行が出来るの？と思える程、弱弱しく思えた。そして入水。しかし、侮る事なかれ！



下見で体験したメンバーも口を揃えて言うと思うが、『とにかく強烈に痛い！それも半端な痛さではない!!』この言葉が一番当てはまるだろう。とにかく水の冷たさに足がちぎれるのでは？と思うくらい、強烈な痛さであつた事を今でもはつきりと覚えている。

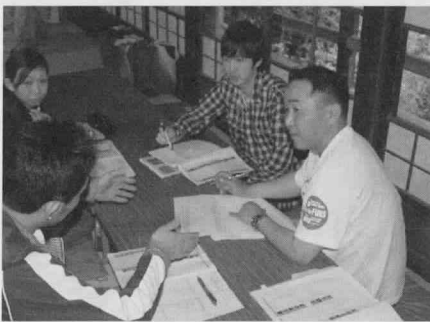
あまりの苦痛に、もう水から脱出？したいと考えている自分の横で、とにかく大きな声で呪文を唱え、必死に耐えている河井リーダー。そして、体を締めブルブル震えている坂田さんの姿が印象的だった。滝行後も濡れた白衣が体に張り付き、更に全身を震えあがらせ呪文も上手く唱えられない。しかし、辛いのは自分だけではない。仲間も一緒だ。そう思いながら何とか苦痛に耐えた。

滝行が終わった後は、驚くほど体がポカポカになり妙な爽快感を感じた。それも、今さっきまで、身を切られる程の苦痛と感じていた気持ちの嘘のような爽快感である。

「殻を破った」とまでは決して言えないが、自分の中にやりきった感があつたのは確かである。この爽快感を塾生に感じて貰いたいと思つたのは言うまでもない。

ただ、ひとつ残念な事は、同じDグループのメンバーで怪我により滝行を体験出来なかった棚橋さんと業務都合で下見に参加出来なかった新開さんの2人が、この何とも耐え難い苦痛を体験して頂けなかった事が非常に心残りである。

滝行の後は境内に移動して写経。これもはじめての体験であり、情報化



社会の進展と共に業務も殆どPCを使う時代にあつて「字を書く」慣習が少なくなっている昨今、正座をして筆で字を書く事に少々、違和感があつたのも確かである。ただ、静かな空間に身を置き、集中して字を書く写経は、間違いなく集中力を養う事が出来ると感じた。気忙しい世の中にあつて、こうした環境を何らかの形で自らが創り出し、そこに身を置き何かに集中するといった余裕も今後の人生において必要ではないだろうか？と痛感した。

昼食は住職の友人である「わしよく亭 高尾」の薬膳弁当をいただいた。精進料理は確かに美味しかった。食事中に主人である高尾さんが料理の一品一品の説明と、その効能について一生懸命に話をして頂いた所までは良かったが・・・途中、何故か料理の話から大きく脱線。気が付いたら主人の人生の振り返りの話に及び、バナナ売り？ボクシング？ゆっくり味わって食する事が出来なかった事が残念である。尚、食事後も延々と人生を語っておいりました。ハイ（笑）

下見の話が少々、長くなってしまったが自分達で実際に「滝行・写経」を経験した事で企画のコンセプトである『非日常体験を通じて、自らを見つめ直す』事への「きっかけづくり」にはなるであろうと感じ取れた1日でもあつた。

そして、企画本番。当日は晴天の願い届かず生憎の雨。雨音のみが聞こえる中での写経。皆、集中して筆を走らせていた。写経がここまで集中力を高めるとは思つても見なかった。

滝行は、雨の影響で水温がかなり上がつてしまい、あの身を切るような冷たさをあまり感じられなかった事が非常に残念である。しかし、今回の企画で非日常空間に身を置き、忍耐力、そして集中力

を養えた事は今後、必ず何処かで活かされると信じている。

◆ #4 非日常空間と現実を対比させ、今一度「豊かさ」とは何かを考える

残念ながら業務都合で2日目から合流。朝、宿に到着し1日目から参加したメンバーから「豊島」の有害産業廃棄物不法投棄事件の全貌とその現場を見学した感想を聞いた。

世間では大きな社会問題となったこの「豊島問題」を正直、これまで全く知らなかった。また自動車から出された産廃もかなり多いとの事である。自動車会社に勤めていながら、この問題を知らずにいた自分。本当に恥ずかしい限りである。住民のこれまでの長きに渡る産廃との闘いや苦勞、そして今なお、豊島を緑豊かな島に取り戻そうと必死に頑張っている島民の実状を聞き、「エコ」について真剣に考えさせられた。日常生活で出るゴミは、きちんと分別しているものの、そもそも「ゴミを出さない工夫」をしているか？と聞かれれば、やや疑問符が付く。分別は勿論の事、これからはゴミを「出さない工夫」も真剣に考えて生活しなければいけないと思う。そして、「エコ」に対する意識を持ち続け、小さな事であっても、出来る事から実践していこうと思う。

今回は豊島の現状を自分の目で見る事が出来なかったのが非常に残念ではあるが、いつか必ず豊島を訪ね、その実状を自分の目に焼付けなければいけないと思っている。

そして、もう1つ自分がやらなければいけない事は、この問題を現実問題として、自身が語り手と

なり、後世にしつかり伝えていく事ではないだろうか。

◆#5 行動力の源泉を知る

今回の企画は業務の都合で参加する事が出来なかったが、参加した塾生から日立建機の雨宮社長の取り組みについて聞いた。

「本業を通じて社会に貢献する」そして、「人の役に立ちたい」と、カンボジアをはじめとする国々で紛争や戦争の爪跡として数多く残っている地雷で、多くの子供の尊い命が奪われている事を知り、「対地雷除去機」を製作し、自らの命も危険にさらされながら現地で陣頭指揮を取られている。との事だった。塾生の話ぶりからも、雨宮社長の取り組みとその情熱が伝わってきた。直接、お話が聞けなかった事が残念でならない。

少し話しが逸れるかもしれないが、我々労働組合でも組合活動を通じてボランティア活動をはじめとする様々な「社会貢献活動」を行なっている。最近では、山村地域の自治体から減反政策や過疎化により休耕田や耕作放棄地が増え、その弊害として日本の原風景や伝統ある農業文化が失われ、自然環境が変化し生態系にも様々な影響を与えている事を聞き、職場の仲間と耕作放棄地の草刈ボランティアを始めた。ただ草刈をするだけでなく、地元の方とのふれあいの場となり、山村地域が抱える様々な問題を直接聴く事が出来、本当に参加して良かったと思っている。雨宮社長の取り組みとは

大きく違うが、今後もしこうした活動を通じて微力ではあるが人の役に立つ事を続けていきたい。

◆ #6 人と防災未来センターを訪ねて

「減災のために何が出来るか?」「意識醸成について考える」

今回の企画で阪神淡路大震災の被災地である神戸を訪ねた。震災跡地である東遊園地やメリケンパークに残された爪跡を目の当たりにして、自分が思っていたよりも地震の規模が凄かった事をあらためて知った。

また、HANDS (NPO法人「1:17希望の灯り」)の理事である白木さんより「慰霊と復興のモニュメント」内で当時の被災状況の説明をして頂いた。そして、白木さん自身も、この震災でかけがえのない家族を失った事を聞いた時は言葉を失った。一番辛いはずの白木さんが一生懸命に当時の様子やご家族の事を話されている姿に自然と涙が溢れた。

白木さんの一言一言には、とても重みがあり、この震災を絶対に風化させてはいけない!という強いメッセージでもあると感じた。

また、午後からは「人と未来防災センター」を見学し、『防災・減災』について学んだ。

このセンターでは、語り部の方から当時の様子や自らの体験を基に震災への備えの重要性和、日頃から地域コミュニティを大事にしておかなければいけない事など、本当に貴重なお話を頂いた。

私自身が、こうした備えが全く出来ていない事から危機管理と意識の低さを痛感した。今後は、語り部の方のお話を忘れずに、日頃から地域活動への積極的な参加は勿論の事、震災への備えをしつかりやっておこうと思う。

そして、館内には震災当時の様子や現物が多数展示されており、その中でも復興に向け、子供達が大人に混じり必死に協力している姿や復興への願いを綴った作文を読んだ時は、涙が止まらなかった。今回の企画に参加して思った事は、自身の防災に対する意識の低さに気付いた事と、「防災・減災」の本当の大切さを学ぶ事が出来た事だ。

ここで感じた事、思った事を自身の中で絶対に風化させてはならないと思っている。

◆ #7 閉塾式

閉塾式を向かえ、あつと言う間の7ヶ月間だったと言うのが率直な気持ちである。

グループ討議では、これまでの企画の振り返りや、それぞれが想う事、そしてこれからについて語り合った。そして最後は、全員が様々な想いを胸に1人づつスピーチを行なった。塾生、想う事は皆同じで塾が終わってしまう事への寂しさを語る方が多かった。

勿論、私もその1人であるが、第21期の産政塾はこれで終わりだとは思っていない。

それは、塾自体は終わってしまうが言い替えれば、この閉塾式は塾で学んだ事を今後の人生や会社

生活で、しっかり活かして行動していく事への再スタート。つまり実践に向けて新たなスタートを切る「開塾式」であると考えたい。共に前進していきましょう。

◆最後に

まずは、このような素晴らしい機会を与えて頂き我々、塾生の為に尽力を注いで下さった加藤塾長をはじめとする事務局の皆様方に心より感謝を申し上げます。
本当に有難う御座いました。

そして、塾に送り出して頂いた会社と組合組織、様々な企画の中で数多くの気付きを与えてくれた良き仲間にも心より感謝とお礼を申し上げます。本当に有難う御座いました。

今後も第21期産政塾生の絆を大切にし、末長くお付き合い頂けたらと思っております。

この場をお借りして産政塾で関わった全ての方へ感謝の気持ちを申し上げると共に、皆とまた会える日を楽しみにしています。本当にありがとうございました。



産政塾を振り返って



株式会社デンソー

子 安 隆 太

《プロフィール》

こやす りゆうた

- 1978年 愛知県生まれ
- 2002年 株式会社デンソー入社 人事部へ配属
現在に至る

〈趣味〉 バレーボール

1. 産政塾に参加するにあたって

昨年（09年）は、米国発の世界的不況と日本経済の急速な変化により、多くの企業が過去に経験したことのない環境変化の渦の中で幕を開けることとなった。当社も、例に漏れず、景気も会社の成長も右肩上がりを前提とした仕組みからの脱却を迫られ、会社の無駄を削ぎ落としスリム化するべく、これまでの仕事のやり方・仕組みを一から見直すという「構造改革」に明け暮れた1年だったと言える。その頃の私かというと、入社6〜7年目を迎え、2002年の入社以来、（小さいローテーションはあったものの）同一部署に在籍し、部署の中では中堅どころに位置づけられてきていた。その中で、ある程度の業務を任せてもらえるようになり、ある程度までは自分の思い通りに業務を進められるようになった。自負も芽生えていた気がする。

そういった中、自分自身もこの急激な環境変化の渦の中に巻き込まれ、先輩社員と共に構造改革に取り組んでいったのだが、これまでの自分の仕事のやり方や考え方だけでは通用しないことに気づかされた。これまではというと、目の前の課題をいかに効率的に解決するかだけを考えていたように思う。しかし、今後は、これまでのやり方や考え方の延長線上では急激かつ大幅な変化には対応できず、いかに問題の本質を捉え、それをどのように自らの考えを持って課題形成・解決していくかが鍵となり、そのステップへの飛躍が自分には求められていたように思う。

09年の取り組みは、先輩社員のサポートもあって何とか進めることができ、チームとしての成果は

上げられたものの、「問題の本質を捉え、自らの考えを持つて課題形成・解決にあたる」面での先輩社員との差・自分自身の弱さを痛感し、このままではいかな々と自分自身の成長への危機感を持ったタイミングでもあったと言える。

こういつた危機感・問題意識を抱えていた09年末に、産政塾のお話をいただいた。

産政塾テーマ・『殻の外へ踏み出そう』

問題提起…企業や組織に永くいればいるほど、新鮮な問題意識が希薄化し、既存の「殻を破る」ことへのチャレンジ精神が減退し、広い視野での独創的な発想や総合的な判断が知らず知らず難しくなるということがあります。…この殻を破り、個人が成長し、企業も成長するここがいま求められています。…いま歩んでいるペースを、自らで見つめ直し、産政塾の体験のなかで、これからのペースを考えてみませんか。

産政塾のテーマ・問題提起は、まさに「殻を破りきれていない」今の自分にとって絶好の機会であった。社外の方とのネットワークを広げると共に、さまざまな分野で活躍する同世代の異業種の方々に刺激を受けながら、自分自身の視野を広げることができれば、必ずや自身の成長に繋がるだろうという思いで、参加を決意した。

2. 様々な活動を通じて学んだこと

入塾式以降、全7回の企画・活動が実施され、残念ながら業務の都合により参加できないこともあったが、参加した企画・活動はいずれも自分にとっては初めての経験のものばかりで、また、今後自分自身だけでは行くことができるか分からない、本当に新鮮かつ貴重な体験であった。その体験や各企画の中で感じた自身の成長へのヒントとなりそうな点について紹介しておきたい。

①自分のできることを精一杯やり続ける

これは、私が所属するBグループの企画として、過去マスコミにも大きく取り上げられた不法投棄現場のある「香川県 豊島」を訪れた際、その島の廃棄物対策豊島住民会議 石井亨氏の話聞いて感じたことである。

Bグループの企画は、この産政塾企画の中で唯一のお泊り企画であったこともあり、少しウキウキしながら新幹線、在来線、海上タクシーを乗り継いで目的地の豊島に上陸した。石井氏の案内のもと、不法投棄現場や処理施設を見学したが、事前学習で、「戦後最大級の有害産業廃棄物 不法投棄事件」のあった島ということは認識済みであったものの、60万トンとも言われる不法投棄現場は、想像を絶する大きさであった。また、それを処理するために必要なコストや不気味なほど大きな処理施設を目

の当たりにして、環境・自然破壊の深刻さとそれを元の状態に戻そうとすることがいかに難しく、多大な努力を必要とするのかを痛感した。そして、廃棄物の大半が自動車のシュレッダーダストであるそうなので、自動車業界に従事する身としては、他人事ではないように感じた。

石井氏からは、不法投棄事件の概要やこれまでの活動、今後の課題などを伺った。石井氏本人が公害調停申請代表人として弁護士とともに調停の最前線で30年以上も戦ってきた方であったため、実体験としての生々しいお話を伺うことができた。被害者であるはずの石井氏をはじめ住民の方々は、最初はなかなか世間から正しい理解を得られずに逆に非難を浴びたり、違法業者を恐れた県行政の協力も得られなかったりと、様々な苦労をされてきたようである。そんな中でも、島を守りたいという一心で、戸別訪問からはじめ、ビラ配り、電話掛け、100箇所座談会、デモ行進等を住民総動員で実施し、ついには県や国を動かすに至っている。説明の際、石井氏の発する一言一言に重みがあり、これまで石井氏や住民の方々が感じてきた苦労や悲しみなどが目に浮かんだ。本当に多くの苦しみ・悲しみに耐えながら活動を続けてこられたと思う。しかし、まだこの活動は終わりを迎えたわけではなく、不法投棄された産業廃棄物の完全撤廃し、元の豊かな自然が戻ってくるまで続くのである。

この企画の中で私が感じたのは、

- ・「企業としても一個人としても、不法投棄など環境破壊に繋がる活動は絶対にあってはならない！」
- ・「環境保全というのは、一人一人の心掛けから始まる！」

ということはもちろんだが、石井氏や住民の方々の生き様を見て、

・「自分ができることを精一杯やり続けられる人は強い！」

ということだった。島を守るために、自分たちができること（地道に理解の輪をひろげていくこと）を最後までやり続け、県や国を動かした実行力に感銘を受けた。

自分に置き換えて考えてみると、自身の成長について（先輩社員と比較し）早く追いつかなくてはと変に焦っていた時期もあったが、二段跳びや三段跳びの成長などなく、目標に向かって、自分ができることを精一杯やり続けること”が目標への近道なんだということを気づかせてくれたように思う。

仕事に限らない話だが、自分自身の可能性を信じて、まずは今自分ができることを精一杯やっていきたい。

②常にアンテナを張り、相手は何を求めているかを知り、自分は何をやるべきかを考える

これは、対人地雷除去機の製作で多くのメディアに取り上げられている山梨日立建機の雨宮社長の下を訪れた際に、雨宮社長の話を聞く中で感じたことである。



「自分の技術者としての能力を活かして、人の役に立ちたい。」「相手のことを考え、相手の声を現地で聞く。ユーザーがあつてこそ、出てくる課題や解決策がある。現地で見て聞くことで、自己満足ではなく相手が求める対応ができる。」そんな想いで対人地雷除去機を作ることを決意した社長の話を聞いて、「自分ができること」「相手が求めていること」それぞれの本質を見極めることで、自ずと「自分自身がやるべきこと」が見えてくると感じた。この場合「相手」というのは「家族・同僚・上司」といった個人・少数から、「会社・世間・世界」といった多数・不特定多数へと様々だが、当然対象となる人数が増えれば本質を見極めることは難しくなる。少数であれば、会話をする・顔色を見るだけで済むことも、多数となれば、雰囲気を感じて・流行を読むなど、微妙な変化を感度高く先取りしていかなければならない。そのために常に様々なことへ関心をもつて「アンテナを高く張っておかなければならない」ということである。（実はこれは、私の上司からも事ある毎に口酸っぱく言われていることと同じである。「となりのグループや室が何をやっているのかアンテナを高く張っておこう！」や「相手の守備範囲のボールを取りに行こう！」など、ごく日常的に聞いている言葉がこの時思い出し、世界に貢献している社長とまだまだ貢献度が足りない自分との差はこのような身近なところから生じていると感じた。）

物事の本質を見極めることは簡単なことではないかもしれないが、常にアンテナを張り、一歩でも



本質に近づこうとする努力する姿勢は必ず自分の成長に繋がっていくと信じて取り組んでいきたい。

以上のとおり、「①自分のできることを精一杯やり続けること」、「②常にアンテナを張り、相手は何を求めているかを知り、自分は何をやるべきかを考えること」の2点を、企画・活動の中で感じた自分の成長のためのキーワードとして挙げさせていただいた。今後、これらのキーワードを胸に、日々の業務をはじめ様々な活動に取り組んでいきたいと思う。そして、本当の意味で産政塾に参加して良かったと思える日が来るよう、努力していきたい。

3. 最後に

産政塾の企画・活動を通じて貴重な経験を得ることができたこと、自分を見つめ直す良い機会をいただいたことを改めて感謝します。そして、今後も、今回の経験で得たこと、塾生の皆さんとの人脈を大切にしていきたいと思います。

最後になりましたが、加藤塾長をはじめ、事務局の高橋さん、塾生の方々、そして、大野リーダー他、Bグループの皆さん、本当にお世話になりました。ありがとうございました。



第 21 期産政塾を振り返って



アイシン精機株式会社

坂 田 奈 穂

《プロフィール》

さかた なほ

- 2005年 アイシン精機株式会社入社
人材・安全衛生部 人材企画G 配属
- 2007年 人材開発部 リクルートG 配属
現在に至る

〈趣味〉 ビリヤード、旅行

はじめに

「産政塾、知っているよね。これまでのご褒美に参加してみない?」

上司のこの言葉から始まった私の第21期生としての産政塾への参加。

「まさか自分が参加させてもらえるなんて。」同業種／異業種の方々との多くの出会いに膨らむ期待と、同時に、「産政塾のテーマである『殻の外へ踏み出す』とはどういう事だろう? 殻を破れなかったらどうしよう? そもそも殻って何だろう?」と徐々に大きくなる不安。開塾式に向かう道のりも、一歩進むごとに期待と不安が交互にこみ上げたことを覚えている。

1月22日の開塾式以降、多くの人と出会い、語らい、発見があつた7ヶ月。

第21期産政塾を振り返り、改めて感謝する事は、数多くの方々との出会いと共に、各グループの企画を通じ、今も私の胸に残り、心の中で熱く脈を打ち続ける幾つもの言葉と出会えた、と言う事だ。

産政塾における活動の要の一つとなるのが、各グループがそれぞれのテーマを決め、テーマに沿った「講師」に当日の講演等を依頼する、という企画。各講師の方々は自らが経験して感じた事を力強く語って下さる為、既に記事となっている話でも、紙面上とは異なる熱意を直に感じる事ができた。

以下は各企画の中で、出会った数多の言葉の中から一つずつ選び出し、心に湧き上がった思いを稚拙な文章ながらも綴っていきたい。

4月14日 壁を越えろ！～フリークライミングに挑戦～

誠に残念ながら業務の都合上、本企画に参加することが叶わなかった。

5月7日 滝に打たれて自らを磨く～心が変われば、行動が変わる～
「心の眼を開く」

当日は幹事グループだったことから、時間管理等、スムーズな運営に専念する事となり、多くを感じる余裕は無かった。だが、事前の企画（講話↓写経↓滝行↓薬膳料理↓塾生同士のディスカッション）、立案、下見、そして本番、と言う、一連の繋がりを通して数々の事を学んだ日々であった。

「心身ともに非日常的な体験をする事で、見えてくる何かがあるのではないか」という仮説の元、グループのテーマを滝行と決め、静岡県袋井市にある「油山寺」を訪れた。鈴木住職より、

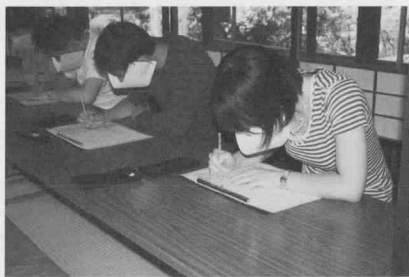
「心の目を開くと言う事。自分が何者か、自分自身について知る事は重要な事である。殻とは破るものではなく、その時期が来れば自然と破れるものである。」

とお話頂き、「その時期は自分にとっていつ訪れるのだろうか。」と漠然と考えた。

下見と本番、計2回の滝行や写経等の経験を通じて、何か変わった事はあったのかと言うと、知行合一とでも言うのか、「やってみたいと思う事を行動に移す」と言う事を今後、積極的に実施したい

と思えるようになった。滝行や写経を行う事が「自分と言う人間について考える」事に単純に直結はしないが、自らが経験し、そこで感じた事を元に生まれて来る次の行動がある。

余談ではあるが、現在家には写経セットが置いてある。1回目（下見）の際の写経は集中できなかった、2回目（本番）の写経を終えた後、一筆ごとに集中しながら文字を綴る義務教育以来の感覚が蘇り、その懐かしい気持ちをもう一度味わいたく、書店に走った次第だ。また、滝行下見の3月、水の冷たさには縮み上がる思いであったが、5月の本番の水は温かく感じる程、四季の移ろいを感じた。この違いを感じる事ができた事に対しても、幹事グループであった事に感謝している。



**5月28日・29日 非日常空間と現実を対比させ、今一度「豊かさ」とは何かを考える
「家庭ゴミは全ゴミの3%・残りの97%は産業廃棄物」**

香川県での1泊2日の企画であったが、業務の都合上、残念ながら29日のみの参加となった。

28日は豊島という、かつては産業廃棄物の不法投棄に島民が苦しめられた歴史を伺い、今もその爪あとを数多く残している島の海岸での清掃活動にあたった。

一方、29日は「島全体がアート」とも評される直島にて、島のいたるところにオブジェが展示されている、一風変わった風景に五感を総動員させながら島を散策した。

あえて乱暴な言い方をすれば、この対極にある両島にて「豊かさ」とは何かを考えた。

初日に参加した塾生の方から、「豊島に不法投棄された産業廃棄物の約8割が自動車のスクラップであり、積み上げられたその高さは4メートルにもなる。また、家庭ゴミはゴミ全体の3%、残りの97%は産業廃棄物であるとの話を伺った。」と聞き、自動車部品の製造業に携わる一員として、何かしなければならぬという漠然とした焦燥感と、無力感が押し寄せた。

人の生活に金銭的余裕が生まれれば、購買意欲が高まる。携帯電話等でも、壊れていないのに、新しい機能やデザインの物が世に出ると、買い換える人は多くいる。磨耗しにくく壊れにくい素材を開発しても、利便性など、新機能への対価に消費者はより、購入する価値を見出す。

ゴミ全体の97%とされる産業廃棄物。生産者側の「資源を効率よく利用し、利益を追求すること」と、消費者側の「購買意欲」のバランスはどう取ることができるのか。また、物質的な豊かさを手にする代償に犠牲となる物を出してはならないと思う一方、理想と現実の乖離は甚だしく、「何も犠牲にしない豊かさ」は実現可能かどうかという命題についてなど、多くの事を考えるきっかけとなった企画であった。

6月18日 行動力の源泉を知る

「『人のためになる仕事をしなさい』と母に言われながら育った。」

地雷撤去機等を製造する山梨日立建機（株）の雨宮社長の話の直に聞けるという企画を知った時、胸が高鳴った。これまでに数々のメディアで取り上げられ、全身全霊をかけ、飽くなき追求に追求を重ねて業務に打ち込む雨宮社長の姿を見るたびに、「なぜここまで使命感と目標を持ち続け、行動に移すことができるのか？」と思っていたからだ。

実際に対面した際、雨宮社長は、「母から、『大きくなったら人の為になる仕事をしなさい。』と言われて育った。1994年に訪れたカンボジアにて、生きていれば自分の母親と同じ年頃の、地雷で右足を失った老婆に『あなた日本人でしょう。私たちを助けて。』と言われたことが人生の転換期だった」と話された。三つ子の魂百まで。普段意識せずに復興ビジネスに従事していた雨宮社長の中で、潜在的に眠っていた言葉が心の中で目を覚ました瞬間。

人の行動力の源泉を、一言で説明することは容易でない。時には、人から言われた一言で人生が変わることもあるが、それもまた、それまで歩んできた人生における全ての経験と融合し、化学反応を起こした結果の表れなのではないか。



「今までのご活躍をお母様にどの様にご報告されたいですか？」と言う私の問いに、雨宮社長はちよつと笑顔を見せ、「これまでもお墓参りに行く度に墓前で色々な事を報告しているよ。」と回答して下さった。

自分もこれからの人生、何か一つでも、どんなに小さくても、胸を張って報告できる何かを持てるよう、生きていきたいと思った。

7月16日 人と防災未来センターを訪れて、減災のために何ができるか？
↳「意識醸成」について考える↳

「あそこに書かれている名前は、白木さん自身の息子さんの名前です。」

15年前の1995年1月17日に発生した阪神淡路大震災。

「減災」(災害で受ける被害をできる限り減らす)という思いや、震災を風化させないと言う気持ちに、活動されているNPO法人、HANDS、の理事である白木さんや岸本さん等に当時の話を伺った。

岸本さんが震災のすさまじさや、人の優しさ、援助の有り難さ等を話して下さった後、震災で無くなった神戸市民の方を中心に、名が刻まれている石碑を指さし、「あそこに書かれている白木から始まる名前は、今日来ている白木さん自身の息子さんの名前です。この震災で失われました。」と言わ

れた言葉が忘れられない。

HANDSには様々な思いや理由を背負って活動される方がいる。人生が文字通り「一瞬で変わった（奪われた）体験」を語るたび、こみ上げて来うるだろう、当時の恐怖や悲哀に、どう気持ちの整理をつけながら進むことができるのか。「希望」や「強さ」などの言葉では到底表現できない「何か」がある。

家族や知人、友人を失うと言う、辛い体験を思い返し、語ることも阻まれる人もいる。一方、同じ思いをする人を一人でも少なく、被災を少しでも小さく、という気持ちでその辛い体験を話して下さる人もいる。

「減災」と言う意識を広げたいという人の想いを、聞き手個々人がいかに受け止め、吸収するのか。「体験しないと分からない」ではなく、「体験してからでは遅すぎる」事も世に多くある。

本企画は人間の根源である、「生きる」と言う事について深く考える機会を与えて頂いた内容であった。

おわりに

「殻の外へ踏み出そう」と言うテーマで様々な体験をした7ヶ月において、ほんの一握りの言葉を記させて頂いた。出会った全ての言葉は温かく、それらを伝えて下さった方々の体温そのものだった

ように思う。

滝行の時に漠然と考えた「その時期は自分にとっていつ訪れるのだろうか。」という問いは、7ヶ月が過ぎた今、自分の中で一つの考えに辿り着いた。それは、「殻は一重ではなく、無数もの層からできていて、一つ殻を破れば次の新しい殻が生まれるのではないか。」と言う事だ。

様々な体験を通じ、心に残る言葉と出会えた事自体が既に、「これまでとは違う自分」に繋がっており、同業種／異業種の方々と出会うと言う産政塾の企画そのものが、殻を破る取り組みとなっているのだと言える。

殻は破れてもすぐに実感が湧く物ではなく、数日、数ヶ月、もしくは数十年先になつて初めて、「あの時破れていたのかも知れない」と振り返るものなのではないか。今の自分は、スタート地点に立った状態であり、産政塾への参加を経てできあがっている今日の自分の成長が今後どのようなものになるのかは、自分の心次第と言える。

第21期産政塾において、中には断腸の思いで参加できなかった企画もあったが、数々の発見に繋る経験ができた事も、産政塾に参加できたからこそと思つて止まない。今回出会う事ができた多くの方々、および、多くの言葉は、今後の自分の人生を力強く生きていく上で宝物となった。

末筆となるが、加藤塾長、安藤事務局長、高橋さんはじめ中部



産政研の方々、塾生の皆さん、また、忙しい中快く送り出して頂いた職場の方々に変更してこのような機会を授けて頂いた事を、心より御礼申し上げます。

産政塾を振り返って



全トヨタ労働組合連合会

篠田 雄介

《プロフィール》

しのだ ゆうすけ

- 2002年 シロキ工業株式会社 入社
総務部 人材開発室 配属
- 2008年 全トヨタ労働組合連合会 本部執行委員
現在に至る

〈趣味〉 映画鑑賞、ゴルフ

はじめに

入社して約8年が経ちました。これまで人事業務・組合業務を通じ多くのことを学び、たくさんの方との交流を重ね、入社当時と比べると、自分が成長をしていることを実感しています。ここまで成長できたのも、良き仲間・先輩・上司に恵まれたと感謝しています。楽しい時間を共有し、時には苦しさを支えあった仲間、仕事のいろいろはや物事の新しい考え方を教えてくれた先輩・上司、人と人の繋がりが自分を大きく成長させてくれた一番の要因だと感じています。

だからこそ今回、産政塾へ参加できることを大変うれしく思いました。それはこれまで交流がなかった異業種の皆さんや講師の方々との繋がりを通じて、新しい考え方やモノの見方などを吸収し、自分を更に成長させるチャンスだと思ったからです。また、普段では経験ができないことを通じて、新しい発見ができるよい機会だと思いました。

一方で、我々塾生に与えられたテーマ『殻の外へ踏み出そう!』。このテーマとどう向き合い、どうクリアするのか? 閉塾式を終え自分は殻の外へ踏み出せたのか? 今回、塾誌を執筆するにあたり、これまでの産政塾で特に印象に残った言葉・体験を取り上げながら、自分は成長することができたのか、殻の外へ踏み出せたのかを振り返ってみたいと思います。

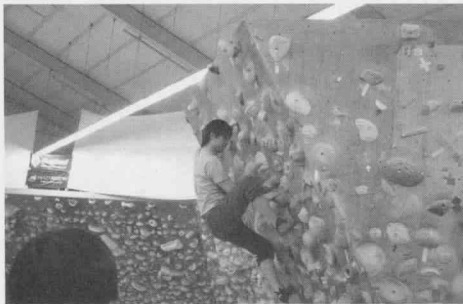
印象に残った言葉

『人間の思考・行動範囲には容量がある。何かへ挑戦することに躊躇うことは、自分の容量が満たされている証。何かを取り除けば容量は空き、新しい挑戦も可能である。』

これは第2回産政塾「壁を越えろ！」で、プロクライマーの尾川智子さんが講演の中で、語られた一節ですが、私たちが仕事をしている中にも、これに当てはまることは多くあると感じました。例えば、仕事のやり方を変えることに不安を抱き躊躇し、結局は変えることができなかったり、あるプロジェクトに参加したい気持ちはあるものの、生活のリズムが変わることに不安を持ち、結局は参加しなかったりと。私たちは、変えようとしていないこと（挑戦をしないこと）。変わらないこと（進化を拒むこと）。が悪だと知っていないながら、できない理由を探し逃げてしまっていることもあるのではないのでしょうか。

今回、尾川さんの言葉は何か挑戦する時・変わろうとする時に、その土俵に上がるためのパワーを与えてくれる一言であり、私たちにとって大きな励みとなったと感じています。

しかしながら、何かに挑戦する・変わろうとする土俵に上がっても、そこからさらに一步を踏み出



せるかどうかが最も大切であり、踏み出せたのであれば、それが殻の外へ踏み出すことにも繋がるのではないかと思いました。

『行動力の源泉は「使命感」と「目標」である。』

人の未来を奪う悪魔の兵器「地雷」。殺すことなく手足を奪い、その人の夢や希望を奪い、国の労働力を削り、国の発展を妨げる。その被害者の多くは、未来を担うはずの子供が大半だ。この現実を目の当たりにし、果敢にこの問題に対して情熱を注いでいる山梨日立建機の雨宮清社長。その行動力はどこからきているのか？今一度、自分自身がどのような人間なのかを見つめ直すとともに、行動力溢れる人物と自分を対比させることで、何が自分には足りないのかを探るため、第5回産政塾では「行動力の源泉を知る」をテーマに山梨県まで足を運びました。

講演ではまず、幾多の課題を乗り越え地雷除去機を開発し、今現在も世界中で多くの人を救えているのは、「使命感」と「目標」あつたからというお話を通じ、雨宮社長と私たちの一番の違いは仕事に対しての「使命感」だと痛感させられました。私たちは日々「責任感」や「目標」を持って仕事をしていますが、「使命感」までは背負っていなかったのではないでしょうか。責任の範囲ではなく、目標の大小でもなく、「使命感」が行動力の源泉のひとつであることを教えていただきました。

また、継続させるためには「現地現物」で物事を確認する大切さも教えていただきました。どのよ

うな環境で、何が求められているのか？面着をすることで、見えないものが見え、喜ぶ顔が次なる活力を生む。

私たちはこの実践に裏付けられた言葉を受け、「殻」を打ち破る大きな一步を踏み出せた気がします。

『歴史を知することは未来を知ること。歴史を残すことは、未来へ生きるヒントを残すこと。』

1995年の阪神淡路大震災から15年。今もなお、震災の体験・経験を語り継ぐ特定非営利活動法人「HANDS」。そして、震災の脅威と復興までの歴史を残す「人と防災未来センター」。第6回産政塾では神戸市を訪ねました。

この企画を通じ、様々なことを感じ、新しい知識を得ることができました。その中でも一番印象に残ったのは、「HANDS」の理事長である白木さんと東遊園地公園からメリケンパークまで、震災モニュメントをめぐりながら聞いたお話です。

一つは「歴史を知ることとは、未来を知る」というお言葉です。安全神話があった阪神淡路地区ですが、その歴史を辿ると実は震災が起きていたそうです。その歴史が正しく残されていれば、その時の教訓が残っていれば、今回の震災も減災はできたのではないかと……。自然災害を無くすことはできなくても、備えることで被害をおさえることはできる。だからこそ歴史を知ることが大切であり、後世に対して正しく事実を残すことは必要であると。その言葉は重く、歴史の大切さを考えさせられました。

た。

そしてもう一つは、「地震は社会の矛盾を曝け出し、経済主義の醜さを浮きぼりにする」というお言葉。これは、震災モニュメントを建設する際に、周辺の不動産価値が下がるという理由から反対行動があつたことや弱い立場の人を更に追い詰めたという事実。当事者から直接お話を聞くことができ、本当に貴重な時間を過ごすことができました。

今回の企画から学んだことを、私たちも広げていきたいと思っています。

経験から得たもの

『滝に打たれて自らを磨く　心が変われば、行動が変わる』

第3回の産政塾では生まれて初めての滝行をしました。正直、体験をしたことがないことをするのは好きですが、実際に滝に打たれてみると、その冷たさと痛さを痛感するものでした。でも、なぜ滝に打たれるのか？ 忍耐力をつけるためでもあり、欲望を忘れ、心を無にするためでもあると認識していましたが、今回の体験を通じ、新しい考え方を学ぶことができました。それは、何かを得るために行うという考え方です。

滝行は、般若心経を唱えながら行つたのですが、これは言葉と一緒に心の中にある何かを捨てるた

めであるそうです。つまり、何かを捨てないと新しい何かが入ってくることをできないという考え方。何かを得たいときこそ、滝行が必要ということ。これは前段のプロクライマーの尾川さんの言葉にも通じるものがあり、大きな印象を残す経験となりました。

また、滝行とあわせて、説法を聞く貴重な時間もあり、「殻を破る」ヒントを得ることもできたと思います。和尚の言葉を要約すると「殻を破ることを目的としてはいけない。目の前にあることをしっかりと取り組むことで、自分自身を少しでも成長させることの方が重要ではないか。期が熟せば殻は破れる。焦らずに愚直に。」ということだったと認識しています。

一度だけの滝行では、心のスペースを空けてあげることではできなかったと思いますが、焦らずまずは、自分の中にある何かを捨てて行こうと思います。

『非日常空間と現実を対比させ、今一度「豊かさ」とは何かを考える。』

産政塾で唯一、二日間にわたる第4回の企画。残念ながら一日目の「豊島問題を考える」は、業務の都合で参加することはできませんでしたが、参加した塾生の方から聞いた話だけでも、豊島問題の深刻さについて受け止めることができました。



「消費は美德」という言葉が使われた高度成長時代。私たちは、経済発展の中でいつの間にか、大量に消費することが豊かさの証拠でもあるかのような錯覚を起こし、この事件を引き起こしてしまっただと思います。島民の方は未だ、負の遺産を抱えながら生活をされています。豊島問題のみならず、将来の日本のゴミ（廃棄物）のあり方をすべての人がそれぞれの立場で考え、実践していく必要がありますと痛感させられました。

一方、二日目には世界で話題の直島を訪れ、ベネッセコーポレーションが展開する「ベネッセアートサイト直島」について学びました。この活動内容としては、地域活性化の取り組みとして、島とアートの融合や廃墟再生プロジェクトがあり、文化的発展を推進するものでありました。この一連の取り組みで印象を受けたのは、観光ビジネスとして実施をしているわけではなく、島民とアーティスト・関係者が一体感を持って、景観やモラルが失われない程度の取り組みに抑えている点でした。地域活性化と観光ビジネスはイコールではない。そんな大切なことを教えられた直島になりました。

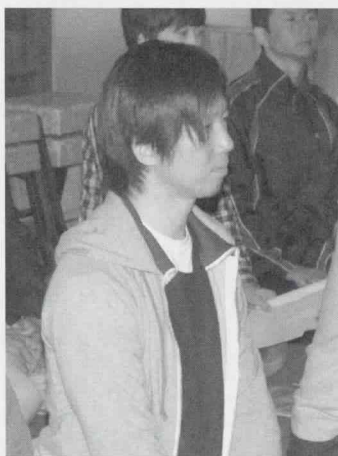
これら二つの島を訪れ、「物的豊かさ」と「心の豊かさ」のバランスの大切さを考えさせられました。どちらのウエイトが高すぎても、私たちは真に豊かな生活は送れないと思いますし、後世に対して明るい社会を残すことは難しいと考えています。この難題に対して、みんなで考え・みんなで実践していくと思います。

卒業を迎えて

今回、産政塾を通じ、多くの方と出会い、交流ができたことを心から感謝します。新しい考え方やモノの見方など、これまでにない大切な時間を過ごすことができました。そして、この塾でなければできなかったであろう、数多くの経験ができたことを大変うれしく思います。産政塾を通じて学んだこと、感じたことは数え切れないほどあり、私にとって、今後の人生の大きな財産になると思います。

さて、卒業を迎えて、自分は成長することができたのであろうか？また、殻の外へ踏み出すことはできたのであろうか？自分に問いかけてみても、その答えはたぶん今は見出せないと思います。これから時を重ねる中で振り返った時に、この産政塾での出会いや経験があったからこそと思う日が必ずくると思います。そして、これからまだ続く長い人生において、産政塾で培った財産をもって、一步一步進んで行きたいと思っています。

最後に、産政塾という貴重な時間を過ごさせていただいた、加藤塾長、事務局の安藤さん・高橋さん、そして、第21期メンバーの皆様にご心より感謝を申し上げます。本当にありがとうございます。



自分にとっての「殻を破る(型を見直す)」とは



トヨタ車体労働組合

新 開 寛

《プロフィール》

しんかい ひろし

- 1977年 名古屋市生まれ
- 1995年 トヨタ車体株式会社入社
富士松工場組立部配属
- 2008年 トヨタ車体労働組合（BW）執行委員
現在に至る

〈家族〉 嫁、長女、次女

〈趣味〉 野球、ゴルフ 他

はっめい・・・

労働組合執行委員になって1年が過ぎたころ、私のところに産政塾の参加案内があった。当初、産政塾に参加することは自分の希望でもなく、そもそも「産政塾」とは何かもわかっていなかった。今回、産政塾の塾生として参加することになった私は、産政塾のテーマ「殻の外へ踏み出そう」という漠然としたテーマでどう活動していくのか？どうなっていくのか？不安だった。活動を終えて、今となつてはいい経験をさせていただいたと思える自分がここにいることに感謝を申し上げるとともに、各企画の中で感じたことを振返つてみたいと思う。

第1回 開塾式

当日の開塾式に業務で遅れた私は塾長講話の途中からの参加となり、初顔合わせの緊張と遅れての参加でスタートも出遅れ、ますます緊張する中での始まりだった。塾長講話の中で、「型を見直す」をテーマにお話をいただき、その中で「一つの型に自分を当て嵌めてみる。そうすれば自分の位置づけが分ってくる」ということや「先輩のやってきたことに囚われない」などが印象に残り、自分の中で「殻を破る（型を見直す）」第1歩になったのではないかと考える。企画内容のグループ討議になると、どのグループも活発な論議が行われ、不安は徐々に消えていった。自分たちのグループも持

ち寄った企画から何をテーマにすればいいか? 「文化に触れること、異業種の作業を見学し感じる」と、人の命の大切さで感じることに、自らを磨くこと」などいろんな意見が出てくる中、普段では経験をしていない「滝行」に全員が魅了し、滝に打たれ自らが磨くことで「殻を破る」ことに決定した。また、グループDとして団結を図るということもあり、グループ名を「グループD」を改め「チームATM」と決め、グループ内での一致団結ができた。グループ名を改めながらもいろいろ論議していき、あつという間に討議終了となった。

第2回 「壁を越えろ!」 ～フリークライミングに挑戦～

各グループがそれぞれ企画していく中、今回の第2回が初めての行動となり、神奈川県横浜市にあるクライミング会場で、日本人女性初のプロフリークライミング尾川智子さんによる「ボルダリング体験」「講演・意見交換」など自ら汗を流し、目の前にある壁を乗り越える体験で達成感を得て、第1人者の話を聞くことで新たな世界観を感じることによって壁を乗り越えるという企画。ボルダリング体験で私は自分の限界にチャレンジしようと、難易度の低いコースより、難易度の高いコースを試みた。結果は失敗に終わってしまい、悔しい思いだけが残ってしまった。チャレンジをするのにも一つひとつ段階を踏んだ計画を行っていき、歩んでいくことが成功の基だと思った。その後の講演でも4つの項目「よく調べ・よく計画を立てる(現状把握を大切にすること)」「ことや「目標についても自分の手の

届くところから目標を立てる」、「壁を乗り越えるためにも自分から率先してチャレンジする」など話をしていただき、まさに今の私に足りないことだと実感した。その後のグループディスカッションで、「基礎体力や知識など基礎の大切さ」「コミュニケーションの中で「相手が知ってるだろう」など、一方通行ではないけない」「自分で決めることに責任を持つ」など、いろいろな意見聞き、私の中で足りないものばかりだと思った。今回の企画で「殻を破る（型を見直す）」ことはできないが、きつかけとなる「気づき」の入り口に立つことができたと思う。

第3回 滝に打たれて自らを磨く　～心が変われば、行動が変わる～

今回は自分たち「チームATM（Dグループ）」の企画であり、滝行だけではなく、説法や写経、薬膳料理を加え、自らを磨き「殻を破る」きつかけづくりなればと思い企画した。いろんな場所がある中、静岡県袋井市にある油山寺で開催するにあたり、事前に内容を確認するため下見に行くはずであったが、私は所用のため出席出来ず、グループのみんなに迷惑をかけてしまった。当日は雨で肌寒い中の開催となり、滝行では自らを磨くことより、体調不良にならないか不安だった。貸し切りバスで油山寺へ向かい車中では「般若心経」を全員で復唱し、音読することで心が少し変化したような気がした。到着後、油山寺には、私たち以外の参拝客は見えておらず、自然豊かな新緑と歴史を感じてる境内、静かに降り注ぐ雨音が迎えてくれた。

はじめに住職から「心の壁とはどんなものか」「殻を破るとはどんなことか」等、ご自身の体験談を交えてご講話をいただいた。その中で印象に残っていることは①「殻とは、破るのではなく、準備をしていれば、機が熟すとともに、自然と破れる」②「耳から情報を得るだけではなく、自ら体験することが重要」③「心の目を開くとは、自分が目指すものは何なのか、自分の人生をどう決めるのかを知ることであり、心眼が開ければ見えてくるもの」④何かを得たい、学びたいと一方的に求めるのではなく、与えることも必要」⑤「自分の心に必要ないものを捨ててしまい、他のものを入れる余地を作る」など心に残る言葉をいただいた。

写経では「般若心経」を書き写す体験をさせていただき、目的は字の上達ではなく心を鎮め清浄な心を養うこと。静かな空間で自然との一体感を感じさせる中、雨音がより一層の一体感を感じさせ、外界の雑念を排除し集中できたのは僅かな時間であったが、このような静寂の中に自らの身を置き、何かを自分に問いかけるのも良いことであると感じた。

滝行では水着に着替え、その上から水衣(修行着用)をまとい、油山寺境内にある「るりの滝」でグループ毎に冷たい水の中に入り、般若心経と不動明王呪を唱えながら一人ずつ滝下に入った。滝行を行っているとき無心になつて唱えているつもりだったが、水の冷たさに慣れてしまい邪念が入ってしまった



た。

「昼食では薬膳料理の弁当をいただき、お店のご主人から食材とその薬効について説明を受け、ご主人からは「旬の食材を食べるのが一番の健康法」など役立つ情報と多種多様な食材で美味しい食事をいただきました。

グループディスカッションで、今回の企画で感じたことや印象にのこったことをみんなで話し、私なりに感じたことは心や行動にゆとり持ち、相手を受け入れる余地が必要。また、計画的・継続的な行動が自分の殻を破ることで、前回とは企画内容は違うが、最後の感じるところは同じだと思った。今日一日の体験で明日から自分が劇的に変化するとは思えないが、このような非日常的な体験を通して何かを考えると貴重な時間だと思った。

今後の自らの行動を見つめなおす良い機会になったのではないだろうか。ただし、気づきを今後の行動に活かすも殺すも自分次第であるということ、強く認識しなければならない。今回、貴重な体験をさせていただき、チーム「A T M」メンバーならびに受け入れてくれた住職にお礼と感謝を申しあげたい。ありがとうございます。

第4回 非日常空間と現実を対比させ、今一度「豊かさ」とは何かを考える

不法投棄の島として問題となった島、香川県豊島と「現代アートの島」として国内外から注目を集

める香川県直島に「豊かさ」とは何かをテーマについて学んだ。有害産業廃棄物（シュレッダーダスト等）が不法投棄され野焼きによって、ダイオキシンを含む極めて有害な黒い浸出水が瀬戸内海を汚染し、一度環境を破壊してしまうと再生に時間と労力がかかる問題となった豊島では「豊島事件」から「調停成立後の豊島」までの経緯を説明していただいた。

その説明の中で、有害産業廃棄物（シュレッダーダスト等）のほとんどが自動車部品であり、自動車産業で働く私にとって恥ずかしいばかりでした。また、説明を受けている場所（足元）や周辺全体が廃棄物と聞かされ、何も言えませんでした。直島では「現代アートの島」として歴史や人々の暮らしなど新しい視点での見方ができた。特に「家プロジェクト」は集落の古き良き時代の雰囲気に入れ、ひと時の間、現実から開放され、非日常空間で心落ち着くことができた。「豊かさ」とは何かを考えると今現在、安定した生活こそが「豊かさ」であり、それ以上の「豊かさ（欲求）」を求めている自分がいることを改めて実感した。

第5回 行動力の源泉を知る

研修前に自分がどんな人間であるかを自己分析（チェックシート）で実施した。当日、結果を確認



したが、自分の性格とほぼ一致していた。そのデータを確認しつつ、山梨県にある日立建機を訪問させていただき、そこでは地雷除去機の製造をしている。今回、実際に地雷の除去を行動に移した雨宮社長の一步踏み出した要因や経験について講話を聞きかせていただいた。講話の中で「何をやるべきか、何をしたいかをわかっている人は強い。使命感と目標が人間の能力を最大限に高める」「技術者はものづくりの挑戦者であり、技術の根源はものづくり・人づくりにある」「社会貢献とは物をあげることではない。笑顔や目標を持たせるような心を伝える」など、「思いやり」と「行動」が自分にはないと実感させられた。自己分析と雨宮社長の講話で共通することは、「目標は持つていても使命感までは持つていなかったこと」だと思った。

第6回 人と防災未来センターを訪ねて、減災のために何ができるか？

「意識醸成」について考える

今回、業務の都合により参加はできなかった。日ごろからよく委員長が口にする「すべては準備力」を仕事だけではなく、地震の備えた準備（備品や集合場所、連絡先）を家族でもしつかりと話し合っていきたいと思う。

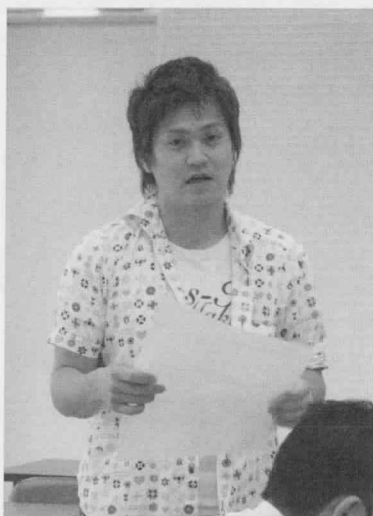
第7回 閉塾式

今回も業務の都合により参加できなかったが、塾生として集合する場が最後となり、閉塾式が終わり、二次会で一部の塾生と会うことができた。これで閉塾してしまうと寂しさを感じながらも、仲間の顔を見るとおのずと笑顔があふれている自分がいた。今回の産政塾の様々な体験を通し、以前に較べて「殻の外」へ一歩踏み出したとみんなが感じたのではないだろうか。

おわりに・・・

産政塾に参加するたびに、「殻」を破ろうとしている自分がいた。最高の仲間に出会え、各企画では多くの刺激を受けた。今回、第21期産政塾すべてには参加できなかったが、加藤塾長の講話から始まり、研修先でお世話になった方々からのお話、更には塾生と一緒に過ごした時間や体験は自分にとつて、大きな財産となった。自分の中の「殻を破る（型を見直す）」ことについて、できたかどうかは判らないのが事実ではあるが、様々な企画に参加したことによって、自分の中では限りなく、大きな一歩を踏み出したと思うている。この経験を活かし、これからも挑戦していきたい。産政塾は終わってしまったが、出会った仲間を大切にし、これからもお互いに刺激し合い、たくさん時間を共有していきたいと思う。

最後になりましたが、加藤塾長を始め、安藤事務局長ならびに産政塾事務局の皆さん、塾生の皆さん短い期間ではありましたが、大変お世話になりました。どうもありがとうございました。



第 21 期産政塾に参加して



フタバ産業株式会社

高 田 正 則

《プロフィール》

たかた まさのり

- 2006年 フタバ産業株式会社 入社
現在に至る

〈趣味〉 ゴルフ・スキー

早いもので2010年1月産政塾開塾式から約7カ月が過ぎ、2010年8月に閉塾式を迎えた。思い返せば開塾式当時はいったいどの様な活動をするのだろうか、どの様な人が集まるのだろうか、と若干の不安を抱えていた。正直、当初は面倒臭さが先にたっていたが、今はもう終わってしまったのか、そんな気分である。

第21期産政塾に参加したことで、たくさんの人と出会い、たくさんの人の考え方を知り、たくさんの経験をした。またたくさんのグループ討議を行った。

そこでは日常生活では決して経験しなかったであろう事がたくさんあった。ボルダリング体験、滝行、豊島・直島見学、懇親会などなど。産政塾のテーマである「殻の外へ踏み出そう!」を忘れるぐらいに楽しんでた。そのひとつひとつ全てが自身の糧となりうるものであった。

中でも一番印象に残っているのはやはり自分たちで企画した「壁を越えろ!」フリークライミングに挑戦くである。

ボルダリングという未知のスポーツに挑戦した事と、日本人女性初のプロとしてご活躍されている尾川智子さんからの直接指導と講演はとても印象深かった。

ボルダリング体験では自分の力の物足りなさを十分すぎるほど実感した。しかし上手く上まで登れずにもがき苦しむ塾生を懸命に応援する塾生の姿を見てると一体感を感じた。

見るのと実際にやってみるのは大きく違っていた。

もつと簡単に登れるものだと思っていたが、次の一手、一歩が出ない。体力的な問題もあったのであろうが、一番の要因は失敗（落下）の恐怖や恥ずかしさがあつたと思う。頭ではやろうとしているのだが体が拒否反応を起こしている。

まさに自分自身の業務に置き換えても同じことが言えるのでは無いかと思つた。何か新しい事をやりたいと思つていても、反対や失敗を気にして提案が出来ない。前例が無いのでどのように取り組んだら良いかが分からない。出来ない理由ばかり考えてしまい、出来る様にするにはどうしたら

良いかを考えない。しかしそのような人間には誰も応援してくれる人は現れず、無謀だと思われても、失敗を繰り返しながらでも必死にチャレンジする人に、姿に人々が声援を送るのだと知つた。

ここに産政塾のテーマである「殻の外へ踏み出そう」のヒントがあるように思えた。

次に尾川智子さんの講演を聴いた。何事も一番が好きだと言う尾川智子さん。日本人女性初の宇宙飛行士を夢み、日本一の富士山にも登つた。ひょんなことからフリークライミングに出会い、その魅力に魅せられてしまったという。



講演を聴く中で尾川智子さんの行動力、決断力には驚かされた。男性でもプロのクライマーがひとりふたりの当時、無限の可能性を感じ女性初のプロのクライマーになった。何かを始めるには何かを捨てないといけない。そこで、大学院進学や就職という安定を捨てて、プロとして活動することを決断する。

「やりたい」ではなく「やると決める」。決めたからにはやらなければならない。その言葉は胸に突き刺さるものがあつた。今までそこまで覚悟を決めて何かに取り組んだ事があつただろうか。どこかに甘えがあつたのではないか。とにかく考えさせられた。

次にコミュニケーションとは信頼関係を築くことだと知った。チームの信頼があるからこそチャレンジ出来る。信頼とはきちんと言葉で伝える事。思っているだけでは駄目。言葉で伝えて初めてそこに信頼が生まれる。きちんと言葉にして伝えることの大切さを知った。

また、常に無限の可能性を信じることの大きさも感じた。「やってみたいとわからない」「前例が無い」ことに對して我々は「無理だ」と考えてしまう。しかし、「やってみたいとわからない」「前例が無い」からこそ「無限の可能性」があるのだと。

とかく何か困難なことに直面した時、出来ない理由を探してしまい、出来ないことを正当化しがちであるが、尾川さんは出来るようにする為にはどうしたら良いのかを考え続け、そのための努力を惜しまない。その最たるものが日本人女性初の難度V12のカランバ達成なのではないか。難度V12を達成した今、さらに高い難度の岩に挑戦している。その姿に塾生一人ひとりの胸にそれぞれ感じるもの

があつたと思う。

「やればできる」「できるまでやる」その気持ちを忘れずに持ち続けていけばきつと壁は越えられる、そう思える講演であつた。

今、産政塾のテーマである「殻の外へ踏み出そう」を振り返つて考えてみた。はたして「殻」とはなにか、「殻の外」に踏み出すことが出来たのか、しっかりとこれが「殻」であつて、「殻の外」とはこういうことであるという明確な答えは自分自身のなかではみつかつていない。

しかしながら色々と考えてみると「殻」とは「今」もしくは「今まで」の自分なのではなからうかと思う。「今まで」の自分を変えることは容易い事ではない。今まで通りは楽であり、何も考えなくても良い。それがそれなりに成果を出しているとすれば尚更である。このような考えや行動が「殻」なのではないか。「殻」の中にいることはとても楽であり、今までの自分を肯定し、守ってくれるものである。その「殻」から「殻の外」に出るにはどうしたらよいのか。「殻の外」にでた人がこの産政塾の各グループが企画した案で出会つた方々であろう。その方々が今の立場に至るまでの経験談は興味深かつた。そこには「悩み」「苦しみ」「試行錯誤」があり、自身と大きな違いは無かつた。ただひとつ大きな違いは「諦め」が無いことであつた。

やると決めたらとことんやる。目標をきちんと定め、全力で取り組む。失敗しても諦めずに継続すればそれは失敗ではなく単なる途中経過に過ぎない。ひとつの目標を達成すれば、さらに高い目標を

設定し続ける。そこには「覚悟」が必要であると。

自分の為、誰かの為、地域の為、様々な理由はあるが自分自身の行動を信じきる「覚悟」がもてれば「殻」は自然と消滅してしまうのであろう。

さらに成長し続けることが「殻の外に」出ることにつながるのではないか。少なくとも昨日の自分よりどこかひとつでも変わっているし、変わっていたいと思う気持ちが成長につながり、「殻の外」に出る原動力となるのであろう。

そのような観点から考えるとなかなか「殻」を打ち破るのは困難そうに思えてきてしまう。

しかしながら産政塾の活動を通じて、「殻」とはなにか、「殻の外」に出ることはどういうことを考えることが出来た。今までは意識すらしなかった事に意識を向けられるようになっただけでも少しは成長できたと思う。

また、「風化」と「当事者意識」と言う言葉についても考えさせられた活動であった。特に豊島・山梨・神戸を訪れた際に強く感じた。不法投棄問題、地雷除去活動、震災復興活動に触れ、いかに自分が「当事者意識」を持っていないかがはつきりした。結局のところ全てが「他人事」であり、表面上しか知らないのに知ったような気になっていた。他人事」



を「自分事」とするのはとても難しいことだと思う。これまでも「当事者意識」を持って物事に取り組みましよう、と言われるが本当の「当事者意識」とはどの様なものなのか分かっていない状態であった事に気付かされた。

今までの様々な取り組みを振り返って考えて見てもどこか「他人事」であつたのでは無いかと思う。実際に甘えもあつたと思う。

しかし、何かをしつかりとやり遂げるには「他人事」では無理だと感じた。「他人事」ではなく「自分事」、「他責」ではなく「自責」。意識を変えることが始めの一步であろう。

もうひとつ、産政塾のテーマである「殻の外へ踏み出そう!」を考える時に外すことが出来ないのがこの第21期産政塾で活動を共にした塾生の存在である。

さまざまな経験をしたが、一番大きな収穫は彼らと出会えたことである。

たくさんさんの刺激を受け、少しでも自分自身を高めようと努力した。彼らの協力や後押しが無かつたなら、このように考えることすらなかつたであろう。

こちらが与えるもの以上のものを与えてもらった。

よき仲間に出会えたことはどれだけ感謝しても感謝しきれない。

最後になるが、今回産政塾に参加させてくれた会社、産政塾の事務局の方々、各グループの企画で

お世話になった方々、そして第21期産政塾生に心よりお礼を申し上げて、私の産政塾誌としたい。

ありがとう!!



産政塾に参加して



豊田市役所

棚 橋 靖 仁

《プロフィール》

- | | |
|---------|------------|
| たなはし | やすひと |
| • 1974年 | 刈谷市生まれ |
| • 2000年 | 豊田市役所入所 |
| | 環境部環境保全課配属 |
| • 2006年 | 環境部清掃管理課配属 |
| • 2007年 | 環境部清掃施設課配属 |
| • 2008年 | 環境部環境保全課配属 |
| | 現在に至る |

〈趣味〉 する：サッカー、草野球、スキューバダイビング、
観る：スポーツ全般

「つづめ」

8ヶ月間に及ぶ研修期間はあつという間に過ぎ去つた。今回、業務の合間を縫つて参加させていた第21期産政塾で、通常業務ではなかなか味わうことのできない新鮮な感動と、新しい仲間との交流がそこにはあつた。

市役所に入所し、環境・公害に関する分野にどつぷりとなつて11年目を迎えようとしている。狭い分野の中で業務にあたっていることもあり、自分の思考や感覚が偏っているのではないか、視野が狭くなつていないか等考えるようになっていた。そんな中、これまでにない環境に身を置き、多種多様な刺激を受けることで、自らが成長する機会にしたいと思ひこの研修に参加させていただいた。

「開塾式にて」

何かの始まる時は、期待と不安が入り混じる。一緒に研修を受ける仲間は、通常業務ではまず接することのない各企業の労働組合や人事の方々ということもあり、大変緊張していたのを覚えている。そんな中、開塾式での加藤塾長の挨拶の中の言葉が大変印象的であつた。挨拶の中で『型を見直す』『10年後自分がどうありたいか』等今後の自らの成長へのヒント、激励の言葉等を沢山いただいた。そういったことをあまり考えなくなつてきた時期だっただけに、改めて自分自身を振り返る良い機会が与えられたと意識の高揚を感じた。

産政塾のテーマは「殻の外へ踏み出そう」である。自らの殻とは何か等をこれから参加する企画を

通して考えることとなるのだが、私にとっては刺激的な研修の第一歩がスタートした瞬間であつた。

「各企画に参加して」

今回、業務の傍ら4つの企画に参加させていただいた。各グループで一つのテーマを取り上げ、それに基づき研修先及び体験先等を企画立案されたものである。中には新聞等のメディアから情報を得て知っていたものもあつたが、自らの目で見て知ること、新たな気づきの多さに感動を覚えた場面が多々あつた。

「第3回 滝に打たれて自らを磨く（心が変われば、行動が変わる）」

この企画は、私の属するDグループの企画である。自らの行動に直結する「心」を見つめ直すことをテーマにしたもので、袋井市にある油山寺を訪ね写経、滝行の体験、住職の説法を聞くことにより現在の自分を見つめ直し、今後の自分の進むべき姿を探索する、そんな企画をつくりあげた。組織も立場も異なる仲間と話し合いを重ね、企画内容等を作りあげたその過程は、普段の業務にはないとても新鮮なものであつた。

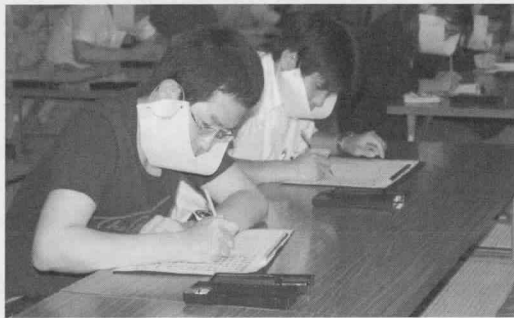
研修当日の天気は生憎の雨であつたが、写経、滝行を体験するとともに、住職からこれから自らを磨いていくためのヒントを沢山頂戴した。その中のひとつである、「殻は破るものではなく、期が熟せば、自然と破れるもの」という言葉が大変印象に残っている。毎日の生活の中で、自分はずっと変

わっていかねばいけないとつい焦りがちになることがある。今本
当にやらねばならないことは何なのか。自らを見つめ直し、必要な準
備をする、そして行動に移すことが重要なのではないか。住職の話を聞き
ながら、改めてそのようなことを強く思った。今回の活動を終え自らの行
動に変化はあったのかと問いかけてみると、顕著な変化は自覚していない
が、静かな空間の中で自らの行動を見つめ直すことの大切さ等を知るきつ
かけとなった。そういった意味で十分有意義な時間を持つことができた
と考えている。自らの心を磨くとは、自らを変えたい、変わって行けると強
く信じ続けることこそが、己が目指す目標に到着できる第一歩ではないだ
ろうか。

今回、私達の訪問に対し温かく迎えてくれた油山寺の鈴木快光住職、わ
しょく亭 高尾のご主人、企画をサポートしてくれた事務局の高橋さん、参加してくれた塾生の皆さん、
Dグループの仲間達に感謝申し上げます。そしてまた、再び油山寺の滝の下で会えること
を楽しみにしたい。

【第4回 非日常空間と現実を対比させ、今一度「豊かさ」とは何かを考える】

香川県の瀬戸内海に浮かぶ豊島という産業廃棄物不法投棄事件の舞台となった島を訪れ、関係者の



方にお話を伺った。テレビ、ニュース等の報道で事件に関しては知っていたものの、汚染された島の再生には相当な時間と資金が必要だということを思いしらされた。

豊島問題とは、香川県豊島の西側で、1978年から13年間にわたり産業廃棄物等（シュレツダーダスト等）が不法投棄され野焼きされた事件である。1990年の兵庫県警の摘発後、豊島住民により訴訟及び県と住民との公害調停最終合意をへて、現在埋め立てられた産業廃棄物の処理が進められている。

今回、この問題に深く関わった島民の石井氏に、豊島問題の経緯説明から現在も処理が行われている不法投棄現場・処理施設案内までしていただいた。同氏より、「この数十年間の間に傷つけられた豊島をいかに復興させていくか。この問題を風化させてはならない。本来の豊かな豊島の回復を早期に実現させていきたい。」と力強く説明があつたが、この種の問題の早い段階での迅速な対応、未然防止の必要性を改めて強く認識させられた。

汚染された土地を完全に回復させることは、時間も莫大な資金等もかかり、この様な大きな問題に発展してしまった原因者及び行政の対応の遅さに強い憤りを感じた。廃棄物撤去後も地下水汚染の問題が残されるため、完全浄化までにはまだまだ時間を要することが予想される「ごみ問題」については、市民一人一人が当事者意識を持ち考えていかなければならない課題である。

産業廃棄物の不当投棄というあまり身近ではないように思うが、ごみ問題という観点から考えれば、一個人のライフスタイルにも大いに関係することだといえる。私達の生活の豊かさの影に犠牲に

なった現実があることを忘れてはならないのだ。

【第5回 行動力の源泉を知る】

リスクを敬遠しがちな昨今、自らの意思を行動に移せる人は稀有な存在である。「その行動力の源は何なのか」をテーマに、山梨日立建機(株)社長の雨宮氏を訪ねた。昨今、多数のメディアに取り上げられている雨宮氏であるが、間近でお会いした印象はとてもカンボジア等の国々で地雷除去機に動かしながら、現地で開発を行っていることを感じさせない穏やかな男性という感じであった。しかし、地雷除去に挑む彼の思いを聞いている内に、最初に感じたイメージは一変させられた。

そもそも、ビジネスチャンスを求めて訪れたカンボジアの地で、内戦・戦争で使用され埋没したままになっている地雷に苦しむ人々の悲惨な状況を間の当たりにし、そこでの少女と老婆の助けを求め姿をきつかけに、地雷除去機の開発を進められることになったという。誰しも人生に転機の瞬間があるというが、雨宮氏にとつては、そこがまさにターニングポイントだったに違いない。そこでどのような行動をとるかで、その後の人生が大きく変わってくるだろう。彼は敢えて、無謀な挑戦に立ち向かった。産政塾風に言えば、正に「殻の外に踏み出した」といえるのではないか。

建設業界不況の中、山梨日立建機では、昨年度、過去最高益を更新している。平和に貢献しているという誇りが、会社全体に好循環をもたらし始めているようだ。その中で、社長である雨宮氏の仕事に対する考え方、姿勢に強い感動を覚えた。特に「現場主義」ということに強いメッセージを感じた。

企業のトップともなると、現場から離れるように思うが、雨宮氏は未だに海外の現地に赴き、開発作業に携わることが多いのだという。現場の状況、意見の把握なくして、きめ細かいサービスを行うことはできないということだ。私自身も業務で現場に出ることがあるが、現場でしか入手できない情報、現場を知っているからこそ判断が可能なのも多々ある。そのような基本姿勢（現場を知ることの強み）をこれからも大切に仕事に臨みたい。地方自治体の一職員として顧客である地域住民の声を聞き、業務を行わなければならない。今何をやるべきか、何が求められているか、それらを十分に理解した上で仕事にあたらなければならない。漫然と業務をこなすのではなく、「使命感と目標」これらを持つことの大切さを自らの体験談とおし学ばせていただいた。

【第6回 人と防災未来センターを訪ねて、減災のために何ができるか？】

最後の企画となった第6回は、NPO法人阪神淡路大震災「1・17希望の灯り」（略称HANDS）の方々に会うため神戸の地を訪れた。あの大震災が起きたあの時、私は京都府南部に住んでおり、震度4弱の揺れを体験したが、未だにその記憶は薄れていない。今回、理事の白木さんと神戸市内の震災モニタメントを巡りながら、その当時の悲惨な状況等についてお話をいただいた。彼自身もあの地震でご家族を亡くし、当時はこの土地を離れることも考えたという。それでも今もお神戸で活動を続けているのは、震災の記憶を引き継ぎ、風化させないためだという。

今回の企画を通じ率直に感じたことは、災害に対する私の意識醸造が十分でないということであっ

た。自分の身を守れてこそ、他人のことを守ることができる、そしていち早く復旧作業に必要な行動を取ることができるのだ。減災のために今自分にできることは、災害への知識を高め必要な時に必要な行動を取ることであり、それを地元で活かしていくことではなからうか。

現在、東海地方では、東海、東南海、南海地震が連動して同時発生する可能性が高まっているといわれている。全国で発生した悲惨な災害事例を教訓にしつかりと準備をし、減災に努めなければならない。着実に且つ確実にそれらを行うことが、未来を担うものの務めではないだろうか。



「これから私にも求められるもの」

普段の生活、仕事では得られない貴重な経験を、他業種の仲間と共に体験できるという謳い文句に誘われて参加させていただいた産政塾であったが、私にとつては大変貴重な学びの場となった。各企画内容は現在の業務に直結するものではないが、企画毎に行われる塾生同士のグループディスカッション及び講師の方々からの経験談は今の私に強いインパクトを与えるのに十分な内容ばかりであった。現在書き上げているこの塾誌原稿が完成すると21期の産政塾も卒業を迎えることに。この8ヶ月間、各企画に参加し、色々なものを自分の中に取り入れ、吸収する作業を行ってきた。これから私が行うべきは、自らの職場において取り入れたものを活かし、業務にフィードバックさせていくことで

あると感じている。閉塾式の塾長に言われた『集団の中で頭一つでも頑張ってみる』、『人より少し努力する』こういった心構えが、今後の業務成果及び自らの成長をアシストしていくのではないだろうか。

組織の中における自らの立ち位置を自覚してこそ、今後自分がどう成長していきたいのか考えることができる。と以前いわれたことがある。そういった意味で今回、多くの仲間とのかかわることでの自分の特性を理解し、自らが置かれている状況を見つめ直す良い機会であったと思う。当初の目的でもあり、産政塾の最大のテーマでもあった「殻の外へ踏み出そう」に関しては何ともいえないが、これから考えるべきこと、自分にとって必要なものは何か明らかにすることができたと思う。第21期としての活動は終わりを迎えたが、豊田市職員としての私の役割はこれからも続いていく。現在の私に求められるもの、今後私に求められるものを常に自覚し、成長していくことが今後の私の課題である。

最後になりましたが、高橋さんを始め産政塾事務局のみなさん、各企画でお世話になった全ての方々に感謝申し上げます。



自分の「殻」を自覚して



全ユニー労働組合

寺澤 貴宏

《プロフィール》

- てらざわ たかひろ
- 1995年 株式会社ユースストア入社
ユースストア岐南店、笠松店、大和店に配属
 - 1999年 株式会社ユースストア 衣料本部
インナー担当商品部に配属
 - 2008年 株式会社ユースストア 営業本部 衣料統括部
インナー商品部インナー担当バイヤー
 - 2009年 全ユニー労働組合 中央執行委員 専従
現在に至る

〈趣味〉 映画鑑賞、スポーツ観戦、ガンダム

今となつては、本当に「もつたいない」という一言に尽きますが、私の「産政塾」への参加デビューは開塾式にも出席できないという状況からスタートしました。業務の都合上、どうしても開塾式に参加ができずに式後の懇親会から出席をさせていただきました。そして、これも今となつては考えられないことですが、私は当日になつて事務局の高橋さんに懇親会の欠席の打診をしていたのです。その日の業務が終了したのが、開塾式後の懇親会がスタートして30分程経過している時間であり、開塾式に出席をせずに、懇親会も遅刻、では参加を遠慮した方が良いと判断した上での打診でした。もちろん、顔を合わせたことにならないメンバーとの懇親会への遅れての参加に腰が引けていたこともありましたが、私が参加を断るつもりで電話をしたところ、高橋さんは、「顔を合わせていただくことに大きな意味がありますので、何とか参加してください」と、仰つてくれました。もちろん、丁寧な口調ながらも、「絶対に欠席は許しませんよ」という意志が垣間見えたことも事実です。その時の私は高橋さんにお会いしたことはありませんでしたが、電話の向こうから感じる「迫力」に、自分の甘い判断を反省しつつ、足早に懇親会の会場に向かいました。

そこで私を待ち受けていたものは…

遅刻しながらも歓迎してくれた幹事の高橋さんと業種、業態を超えて楽しく、熱く語り合う産政塾の同期のメンバーだったのです。

早速A班のメンバーが集まる席に案内され、自己紹介が始まりました。名簿をもとにA班のメンバーや他の同期の皆さんの勤められている企業や職制を確認していると、中部に名だたる、いや、世界に進出している企業の名前ばかりで、あつけにとられてしまいました。「こんなに業種が違うメンバーが集まって、一体なにをしていくのだろう？」それが率直な感想でした。企業と労働組合からメンバーが集まって、一つのを創り上げていく…懇親会の中でその主旨は理解していきましたが、まだまだ疑心暗鬼であつたことをよく覚えています。班の中で役割を決めてメンバー同士名前ではなく愛称で呼び合うようになっていく中でも、「本当にこれだけ出身が異なるメンバーが参加して満足できるものが実行できるのだろうか」と感じていました。労使協調という言葉は耳にはしていても、まさに会社と労組からメンバーが参加して企画立案をし、実行に移していくことが非常に困難なことだと思えたからでした。

【殻の外へ踏み出そう】

3月の下旬、A班がカバハウスに集まって企画の打ち合わせを行いました。私は、これまた1回目の打ち合わせに参加ができていなかったため、A班のメンバーと顔を合わせるのが2ヶ月振りになっていました。自分の中では「また初顔合わせ感からスタートしなければならぬ」という不安感を抱いていましたが、不安は杞憂である、ということを通じてすぐに実感しました。皆で1回目の内容のポイントを説明してくれて、すんなりと企画打ち合わせに入っていくことができました。打ち合わせでは、

皆がA班の企画の骨格をブラさずにそれぞれの思いを企画案にあげていきました。それまでの慣習や業界の常識という「殻」を破って活躍している各界の著名な人物名が候補として挙がり、班のメンバーのアイデアや説明力に驚きながらも自分なりの意見を言いながら企画案について議論を交わしました。どの候補者も非常に魅力的であり、最終的には相手方との調整の結果、山梨日立建機の雨宮社長のもとを訪れる企画になりました。しかし、今思い返すと、この時に一番魅力的であったのは、「殻の外へ踏み出そう」というテーマのもと、知り合ったばかりでも、自分たちの理念、思い、目的を共有して一つの企画を創ろうとしていたA班のメンバーそのものであったかもしれません。

この夜、カバハウスで10時過ぎまで繰り広げられた議論のあと、それぞれの役割分担をもとに、6月18日（金）、A班の企画を実施、事前のタイムスケジュールどおり無事に終えることができました。

人の命を救う、という想い、使命感が突き動かす行動力が、日本の小さな企業が世界で活躍することにつながったこと、従業員も自分たちの会社で人の命を救っているという「誇り」を持って働くことにつながっている、ということ：雨宮社長の講演の言葉に「殻」を破って一歩を踏み出した人が放つパワーを感じました。

「自分は誇りをもって仕事をしているのか。自分は組合員の代表として



仕事をする中、どこまでの使命感をもって臨めているのか。」と自問自答し、いろいろな気付きとなり、自分のこれからの仕事への取り組みにつながっていく講演でした。

夜の意見交換の場では、それこそ堅苦しい話を抜きにして等身大の会話を交わすことができ、違った意味での有意義な時間となりました。この意見交換の時間がもう少し長ければ…反省点があるとするならば、「もつとみんなと話したかった」という思いの表れとして、この意見交換への自己採点が一番厳しいものになるかもしれません。（この意見交換の運営は私の担当でして…みなさん、出だしの会場設定に不備がありスタートが遅れたことをこの場を借りてお詫びします。）

結果的にこのA班企画が今期の産政塾企画で一番の参加人数となり（私が参加したことが結果的に最多人数になっただけ、という気もしますが…）参加した皆さんの心にも様々なものをのこすことができたのではないかと思います。

「殻」には様々なものがありますが、私は当初、自分が今期の産政塾のテーマに最もふさわしくない人間だと自負をしていました。私は保守的であり、どちらかというとマイナス思考の人間で、常に自分の判断すること、実行することに自信が持てない人間でした。「殻」を破ることは自分では難しい、と参加当初から諦めに近い感覚を持っていました。しかし、産政塾への数少ない参加の機会に、同世代の方たちと膝を突き合わせて議論をする場を得ることで、破ることまでは出来なくても、改めて自分の「殻」について自覚をし、振り返ることが出来た、と感じています。私は好奇心が旺盛で新たな

知識を頭に取り込んでいくことが非常に好きなのですが、時間がない、という理由からここ数年は新聞さえもとに読むことが出来ていませんでした。まして、読書など思うように出来ず、書店で購入した本がなかなか読めない、という毎日を過ごしていました。日々の生活の中のほんの些細なことだと思われること、まして自分がやりたいと思っていることすら実行できていない……これがまさに「殻」であり、少しの心がけや少しの工夫で破っていけるものばかりであることを、大きな志を持つてチャレンジしている人たちの話を聞いて気づかされました。もつと言えば、それぞれの世界、職場の中で活躍している同世代の同期のメンバーの話を聞いて大いに刺激を受けたのです。「時間がない」そう考えて、心の中では「あれもしたい、これもしたい」と思っていることを実践していない自分がいること……今まではそう思うこと自体が「殻」であることすら認識していなかったのです。まずは目の前の小さなこと、やりたいと思っていること、このことを実行していくにはどうしたらいいのか？そのことを考えることの大切さに気付かされました。今は、日々の仕事や暮らしに追われていた自分を振り返り、できるように考えてみよう、という思考に戻していくことを始めています。

産政塾での新たな出会いは様々な価値観と巡り合うことができ、日頃、なかなか話すことのない同世代のメンバーと仕事やプライベートのことを語り合えたことは、自分の日頃の生活や価値観の“振り返り”につながりました。様々な世界で活躍している皆さんの行動力の源泉を垣間見て、「殻」を突き破って行動をしなくてはいけない時や自分の「殻」を守っていないなくてはいけない時を自分でどう

判断して、決断していくのが大切である、と感じました。

同期のメンバーに比べれば、私の「殻」は非常に薄く、簡単に破れるものであるのかもしれませんが。しかし、この簡単な「殻」が私の日常の生活に存在していて、「殻」であることにも気付かずに過ごしていました。この気付かないまま私が作ってしまった「殻」を一つずつ破っていくことが、自分の今後の人生を実り多いものにしていくきっかけとなると思います。そう考えると破らなくてはいけない「殻」が薄いだけに、わくわくしてきました。

マイナス思考の私が、こういった考えを持つきっかけを与えてくれた「産政塾」に感謝します。またこの「産政塾」に私を参加させてくれた多くの仲間にも感謝します。

ありがとうございました。

最後に、

大きな体にふさわしい包容力でメンバーを引っ張ってくれた橋本リーダー。

小さな体からは考えられない活発な行動力と冷静さを併せ持っていた貴ちゃん。

常に冷静な判断力と大人の安心感で班を見守って支えてくれていた篠ちゃん。

年齢詐称を常に疑われながら、実年齢にあった突破力と見た目相応の落ち着きで役割をこなしていた



“がみちゃん”

様々な相手先に断られても相手方との調整を一手に引き受け、山梨企画の調整を粘り強く成し遂げたムードメーカー”馬場ちゃん”

共に過ごした時間は短かったけれども、皆さんと会えて、一つの企画を共有、実現できたことは一生の思い出になります。

そして皆さんと語って得られたことはこれからの私の人生の大きな糧となっていくます。ありがとうございます。

同期会、やりましょう！



産政塾の活動を通して気づいたこと



株式会社東海理化

戸 田 有 香

《プロフィール》

とだ ゆか

- 1978年 愛知県岡崎市生まれ
- 2006年 株式会社東海理化入社（人事部）
現在に至る

〈趣味〉 楽器演奏[フルート・ピアノ・ギター(練習中)]、映画鑑賞

◇はじめに

私がこの第21期産政塾に参加させて頂けることになったのは、職場のとある先輩の熱意がきっかけであった。先輩は第18期産政塾塾生であり、塾生の派遣が一時途切れていた当社において、今回の塾生募集時に、産政塾の素晴らしさを上司へ特別に進言して下さったのである。結果として私は第21期産政塾塾生になることができた。私の派遣を決めて下さった上司の方々、そして大きなきっかけを作って下さった先輩、毎回の企画にこころよく参加させて頂き下さった上司・同僚の皆さんへ、この場を借りて心からの感謝の気持ちを伝えたい。本当にありがとうございました。

少し大げさな表現かもしれないが、長い人生の中の、このタイミングで産政塾に参加できたことを、とても幸せに思っている。（それについては後述させて頂く。）

◇入塾

このような入塾に際してのいきさつがありながら、当の本人はどうであつたかというと、当初は大変申し訳ないことに、「先輩の熱意に応えられるだけのものを果たして自分は得ることができるのだろうか」という不安と、「業務との両立は大変なのではないだろうか」という後ろ向きな不安を抱えていた。

また、産政塾のテーマである「殻の外へ踏み出そう」についても、いまいちピンと来ていなかった。「今の自分は、忙しくて仕事に追われる時があつても、何かを思い詰めるということもなく、それなりに毎日を平穩無事に過ごしている。そんな私にとって殻とはいったい何なのだろう？」こんなことを漠然と思っていた。

開塾式当日。大勢の初対面の人の前で自己紹介をすることに、自分の鼓動がわかるほどの緊張を覚えながらも、単純な私は、属することになったBグループの皆さんと企画の話を進めていく中で、不思議にワクワク感が増していき、不安よりも期待が勝つていくのを感じていた。

Bグループは客観的に、年齢層の幅広いグループだったと思う（すみません）。しかしながら、活動をしていく中で実際には年齢を感じることもなんてほとんどなかった。上下関係や肩書きとは関係なしに、皆で同じスタート地点に立つて一つの企画を進めていく。その中で年齢は関係なく、しっかりしている人はしっかりしているし、バイタリテイのある人はバイタリテイがある。そんな当たり前のことを身をもつて感じる事ができ、それは新鮮で大きな刺激だった。Bグループの皆さんには「私もこうなりたいな」と思われることが多々あり、皆さんの良いところにたくさん触れることができた。皆さん本当にありがとうございました。

私個人、産政塾に参加して得られたことというのは、（私を送り出して頂いた皆さんへは申し訳なく思いつつも）仕事に役立つ企画力や交渉力の向上といったものではなくて、この先私が前へ進ん

で行く上で大きなヒントとなる「気づき」を得られたことだった。非常に贅沢な機会であつたと思う。その「気づき」については後述させて頂くこととして、まずその「気づき」に至る、各企画を通しての体験・感想について簡潔に記してみたい。

◆第2回 「壁を超えろ！ ～フリークライミングに挑戦～」

講師の日本人女性初のプロフリークライマーである尾川智子さんの気持ちの強さに、ただただ圧倒されたの一言に尽きる。

宇宙飛行士になるべく東大を目指して受験勉強に励まれたことや、就職や大学院進学の道を捨ててプロフリークライマーになるためにスポンサー巡りをされたこと。自分で決めたことはやり切り、後戻りできる環境をあえて作らせない気持ちの強さ。困難な状況を「無理」と言つて諦めてしまいか、「無限の可能性」があると捉えるか…。

彼女のこうした生き方に触れ、おそらく彼女は自分のこれまでの人生を振り返つて、夢破れた悔しい思い出はあつたとしても、全力で物事に立ち向かつた自分の姿勢に対して納得はできるのではないのかと感じた。果たして今の自分は、自分で納得できる生き方ができているのだろうか…。そんなことを強く考えさせられる企画であつた。

◇第3回 「滝に打たれて自らを磨く　心が変われば、行動が変わる」

滝に打たれている間はどんなことを感じるものなのだろうと思って臨んだ滝行。打たれた瞬間、「ひっ、ごめんなさい！」となった自分がいた。日ごろの自分の生活や行いが我儘なものに感じられた貴重な時間であった。（やましいことがあるという裏返しか？）

滝行を行った後に、油山寺住職がおっしゃられた言葉が心に残った。「吐き出すことが大事。滝行も吐き出す行為の一つ。みんな吐き出すことをせずに功德を受けよう受けようとしても、入ってはこない。」

日頃私も、物事に囚われ、または執着し、自分もパンパンな状態であったのだなあと素直になることができた。できることなら個人的にはこれからも定期的に滝行を行っていきたい。（ちなみに、気の置けない仲間とお酒を飲み交わすことも大事な「吐き出す」行為だとか…）

そして同じく住職のお言葉、「機が熟せば殻は自然と割れるもの」は、これからもふとした時に思い起こしたい言葉となった。殻を自分で破ろう破ろうとするのではなく、目標に向かってコツコツ愚直に励んでいれば、いつか自然と割れると…。

◇第4回 「非日常空間と現実を対比させ、今一度「豊かさ」とは何かを考える

（香川県豊島・直島を訪ねて）

豊島の産業廃棄物の規模の大きさや、環境破壊の甚大さということよりも、公害調停成立までの豊島の住民運動の凄まじさに言葉が出なかった。「なぜ被害者である住民が、世間からここまで冷たい仕打ちを受けなければならないのか」と、憤りさえ覚えた。それは、無理解が他者を傷つけることもあるという、人間の怖さでもある。

豊島住民は膨大な時間と労力を費やし、知事や県議会からは「豊島の運動は根無し草」、「金が欲しいから運動をする」とまで言われながら、ありとあらゆる運動を尽くして、多くの人の心を動かすことができた。

豊島住民は、人間社会の不条理を突きつけられたことと、一方、そんな状況下で応援してくれた人の優しさを人一倍強く感じたこと、そして、運動を通して真実を理解してもらえた時の大きな喜びと、「人間社会」というものについて誰よりも深く知ることができたのではないかと思う。ただそれは、住民の人生を左右するほどの、余りに大きすぎる代償を払つてのことだが…。

先日、NHKの『新日曜美術館』で、「瀬戸内国際芸術祭2010」が紹介され、豊島が「産廃の不法投棄の場」としてではなく、「現代アートの場」として紹介されていた。大変嬉しい気持ちになっ



た。不法投棄現場の跡地利用の行方も含めて、今後注目していきたいと思う。

◇第5回 「行動力の源泉を知る」

重機を改良した地雷除去機の開発、途上国への納入、技術指導をされている山梨日立建機・雨宮社長かたお話を頂戴し、「困っている人を助けてあげたい」という、人として当たり前の感情の大切さと、その難しさを深く考えさせられた。

今でも毎年数十万個の地雷が新たに埋没されているという人間の愚かさに腹が立つ。だからこそ一方で、雨宮さんが言われた、「人を助けるといことが、こんなに難しいこととは思わなかった。自分を捨てるということ。」という言葉が強く胸に残る。それは、地雷除去機の開発までに多大な借金をされたことや、「人を助けることは自己満足ではない。相手の気持ちに立つこと。」という言葉にあるように、現地確認のために今でも1年の3分の1は海外に赴かれている行動が示している。（以前は1年の3分の2は海外だったという。）

その行動力の源泉は、使命感のほかにも、「自分を捨てること」にも勝る、何物にも変えがたい大きな喜びがそこにあるからこそ、行動の継続が可能なのだろうと思った。私はもちろん、そんな喜びを未だかつて味わったことがない。これから先でも果たしてどうだろうか。

ただ今の私でも、雨宮さんが言われた「旅行に行った時、現地の花売りの子どもの花を買って、優

しい言葉をかけてあげる心の豊かさ」は、いつまでも忘れずに持ち合わせていたい。

◆第6回 「人と防災未来センターを訪ねて、減災のために何ができるか？」

「意識醸成」について考える」

天災により大切な人を突然亡くすという、言葉では書き記せないほどの悲しみと向き合っている人々の発する言葉は大変重い。

お話を頂いたNPO法人「HANDS」の方々は、「語り部」として震災を語り伝えることターのボランティアの方々は、震災を実際に体験していない人々に語り伝えるというには、ご自身が体験されたことをある意味、客観的に捉え直し、何を伝えるべきかということを選ぶ作業を経なければ、きつとできないはずだ。それは、つらい作業であると同時に、未曾有の被害をもたらした震災の真実を捉えた言葉だと思う。我々はその言葉を真摯に受け入れなければならないと思う。

また、語り部の方がおっしゃっていた、あんな悲惨な状況の中にありながら、人々の間に助け合いの心が生まれ、「人が優しかった」という言葉が心に強く残っている。



◇「気づき」とは何であったか

第21期産政塾の活動を通して、とても当たり前だけれども、非常に大切なことに気づくことができた。

それは、尾川智子さんの言葉、油山寺住職の説法、豊島の住民運動、雨宮社長の話、震災の語り部の方々の話という、それぞれの壁や苦しみを超えていこうとする過程の話を聞いて、「真実や重要なことは、悩み苦しんだ後に見えてくるものであるということ。」だった。

振り返ってみると、私は中学・高校・大学を通し、学生時代の友人からよく、「氣にしい」と言われていた。あの頃の私は、ありふれた平凡な悩みではあったが、私なりに悩み苦しんでいたと思う。そして、今の自分がある。

冒頭で、入塾に際して自分の「殻」を考えた時、毎日を「平穩無事」に過ごしていると記した。今思えばそれは、様々なことが起こる複雑な日常を、「平穩無事」に過ごせられるように、うまくやり過ごしているのではないか、と感じている。それが私にとっての「殻」であったのかもしれない。

うまくやり過ごすことは、時と場合によつては、一概に悪いこととは言いきれない。ただ、「真実や重要なことは、悩み苦しんだ後に」に気づいた今後は、ここ一番の大事な状況における自分の姿勢

がはつきりと変わってくるのではないかと感じている。

やはり一人の人間としてこれから成長していきたいと思うので、それには悩んでいくことが必要なのだと、何か「覚悟」めいたものができた。自分はこれからどうなりたいのかという、しつかりしたものがまだ定まっていなかったこの時期に、産政塾に参加させて頂けて、本当に有り難かった。

◆最後に

こんなことを記していると、ただ苦しいだけの重たい話になってしまいが、そんなときにこそ「大事にしたいこと！」として思い出した、あるエピソードがある。

それは、学生時代に見たNHK『プロジェクトX 挑戦者たち』で放映された「男女雇用機会均等法誕生」の回の、ちょっとした場面。それは、同法の法制化の取り纏めを任された、当時の労働省婦人少年局の、赤松良子局長をはじめとする女性職員のドキュメントだった。同法法制化への道のりは決して平坦なものではなく、経営者側のあまりに差別的な発言と、長年職場で虐げられてきた女性労働者側の頑なな主張（中途半端な法律なら認めない）とが、真っ向から対立し、難航を極めたという。（同法は施行当時、抜け道の多い不十分な法律と言われたが、両者の主張の間でギリギリのバランスを取った法律であった。当時は不十分と知りながらも法律として明文化することに意味があった。）

その全く先が見えない日々が続いたある日のこと、深夜、赤松局長と部下の女性職員が帰宅のため

に省内の廊下を連れ立って歩いていた時のこと。めったに弱音を吐かないその女性職員が、「局長、果たしてこの法律はできるのでしょうか。」と弱音を吐いた。赤松さんは少し黙って、小さな声で歌いだしたという。「歌でも歌おうじゃないの。」という言葉に、2人は歌を歌ってその日は帰ったという。局長として最前線に立ち、自分もギリギリの立場にありながら、こうして自分と部下を励ましたというエピソードだ

番組内で当時を振り返った赤松さんは、「あの時は八方ふさがりで、どうにもならない状況だったから、歌でも歌うしかなかった。」と笑いながら話をしていた。当時学生だった私は、この赤松さんの心の強さ、しなやかさに触れて、同じ女性として一人テレビの前で胸が熱くなっていた。

私はこのエピソードが大好きだ。

真剣に考えて、思い詰めて、つらいときはある。そんな時に、自分も追い込まれた状態でありますが、「歌でも歌おう」と言ってくれる赤松さんのような存在が身近にいてくれたら、本当に有難いと思う。その冷静さと、心の強さと。

自分がこの先、大変な状況に置かれたときはこのエピソードを心の片隅に置いておきたいし、もし身近に大変そうな人がいたら、そういう言葉を掛けられる人に私はなりたい。(歌を歌うことも大事な「吐き出す」行為。)

このエピソードを思うとき、私は口ずさみたくなる歌詞がある。聞く人が聞けば、一時のポップな流行歌だと思われるかもしれないが、私はこの歌詞を口ずさむと、何か見失ってはいけない大事なものを思い起こさせてくれる気がするのだ。最後にその歌詞を紹介し、21期生の皆さん、これから頑張っていていきましょうということで、結びにしたいと思います。

♪ 僕らは自由を

気持ちのよい汗を

幅広い心を

軽く笑えるユーモアを

眠らない身体を

大げさに言うのならば

誇らしげに言うならば

僕らは青春を

決して枯れない涙を

くだらないアイデアを

うまくやり抜く賢さを

すべて欲しがる欲望を

きつとそういうことなんだろう

きつとそういう感じだろう



産政塾を振り返って



東邦ガス労働組合

橋 本 善 和

《プロフィール》

はしもと よしかず

- 1977年 三重県生まれ
- 2002年 東邦ガス（株）入社
- 2009年 東邦ガス労働組合執行委員
現在に至る

〈家族〉 妻、娘

■おつめじ

入社8年目、学生時代は建築学を学び、巨大建築物の設計を夢見ていた頃もあったが、建築だけに固執するのではなく、都市基盤を支える企業のなかで様々な分野の仕事がしてみたいと思い、東邦ガスに入社した。入社後、商品開発の部署に配属となり、その後、家庭用分野の営業を経て、気づけば労働組合へ……。様々な分野の仕事がしたいとは思っていたが、技術系入社として社内でもあまり例がないこの異動経歴を振り返り、自分が本当にやりたい事は一体何なんだろうと悩んでいた頃に、第21期産政塾の塾生募集の話をいただいた。当初は労働組合に来てまだ半年程度で、知識も経験もない中で、とても社外講習に参加させていただく状況にはないと思ったが、諸先輩方の温かい後押し!?!もあり参加させていただくこととなった。テーマは『殻の外へ踏み出そう』……?踏み出す前に、まず『殻』が何かを把握しなくては!と不安を感じつつの出だしとなった。

■活動を通じて

【第一回】 #1 開塾式

1月22日、ついに産政塾がスタートした。加藤塾長の講話では、「型を見直す」ためには自分を相

対化し、あえて型にはまってみることで自分の足りないところが分かり、これを伸ばしていくことで喜びを感じることができるとの話を聞くことができた。これまでの自分を振り返ってみると、現状に満足していたということでもないが、あえて自分の足りないことを考えたり、こうしていききたいという想いが不足していたことに気づかされた。自己紹介では参加者の皆さんが自信に満ち溢れた表情で、意気込みなどを流暢な言葉で熱く語るのを聞きながら、話すのが苦手な自分がこの中でやっていけるのだろうかと不安を感じずにはいられなかった。しかし、グループ討議が始まるとメンバーの皆さんはとても親しみやすく、きつと楽しい7ヶ月になるだろうと期待感の方が強くなった。

【第二回】 #2 壁を越えろ！ ～フリークライミング（ボルダリング）に挑戦～

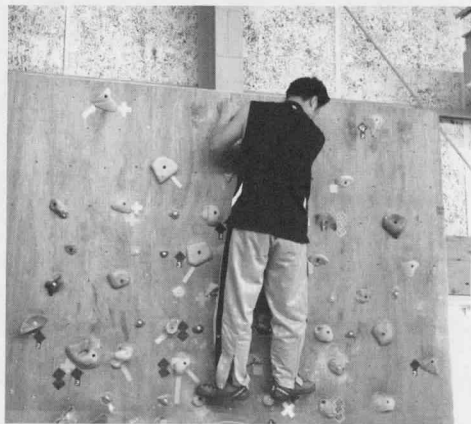
第21期生初めての企画であり、会社生活の中でまさに壁にぶち当たっている今の自分にとって、何を感じ・学ぶことができるのかと期待に腹を膨らませつつの参加であった。「精神的な壁」に対して「物理的な壁」を乗り越えることで何を感じることができるのか、その疑問はすぐに解決した。手足をひっかける所もあり、見た目には簡単そうに見えても、いざ自分がやろうとすると全くうまくいかない。腕の力だけに頼って登っていいこうとすると、すぐに手に力が入らなくなり動けなくなってしまう。また、ルートにしても右手・左手・右足・左足をどの順番で、どう使って進んでいくかイメージしながら進まないと、次の一手が届かなくなり、身動きがとれなくなってしまう。ボルダリングの奥深さを

感じつつ、何度も落下するなかで、次こそはうまくいくようにと、あの手この手を考えていると、実は仕事においても一回でうまくいかなかった場合には、仕事の進め方やアプローチを変えて何度でもできるまで挑むことが重要だと感じた。

また、講師の尾川さんについては、自分と同年、同じ理工系の学生、さらに愛知県出身の方ということで親近感を感じつつ、今は全く違う分野の、しかも第一人者にまでなられていることにとても興味が湧いた。尾川さんの講演では、自分でチャレンジしていくことの大切さを学ぶことができた。「無理」と考えるのと「無限の可能性」と考えるかの違いや、「やりたい」ではなく「やる」と決める」、自分で決めたからには「できるまでやる」という気持ちが重要だと感じた。ボルダリング中に何回も落下するなかでも感じたことだが、「腕の力に頼りすぎ」↓「体が重い」↓「痩せなければ」と思ったら「痩せるまでがんばる」と思える企画であった。

【第三回】 #4 非日常空間と現実を対比させ、今一度「豊かさ」とは何かを考える

この企画は、豊島と直島という瀬戸内海に浮かぶ二つの島での体験により、現代の物理的な豊かさ



（便利さ）の裏側として、知らないまままで済ませるべきではない問題など、情報感度を高める必要性を感じさせられる企画であった。

豊島は、有害産業廃棄物不法投棄事件の現場として、全国的にも報道された島であったが、情けないことに今回の企画で取り組むまで、その詳細についてはほとんど理解できていなかった。不法投棄された産業廃棄物の深い堆積層を目の当たりにし、現代の満たされた生活環境の裏側で、そのしわ寄せとして被害に合われている方々が存在し、さらに情報が正しく伝わっていないことで、被害者の辛さが増していったとの事実には衝撃を受けた。人が生活をしていくうえでは、ゴミは必ず出てしまうものであるが、その量を減らすか、もしくは再利用するか、最終的にはどのように処理されるかなど、自分たちが携わるところ以外にも関心を持つように心掛けることが大切だと感じた。また、その後の海岸線での清掃活動では、せめて自分たちができることだけでもやっていかなければいけないの思いつから、流れ着いた空き缶やプラスチックといった人工物を黙々と1時間拾い続けた。今の自分と同じような考えを持つ人が増えていけば、きつと状況は改善し、今回の経験・思いを他の人にも伝えていくことが、第二の豊島を作らないことにつながると感じた。

一方、直島では、他の島と同じように過疎で高齢化が進むなかで、古民家等を現代アートで再生させることにより、年間35万人と島の人口の100倍もの人が訪れる島へと変化を遂げた。ここでは、物理的な豊かさはないものの、ゆつくりとした時間の中で心の豊かさを感じることができた。日々の暮らしでは、望めはなんでも手に入る一方で、忙しさのあまり心の余裕がなくなり、自分にすぐに関

係すること以外には無関心な状況になってしまっていたと感じた。

今回、二つの島での体験により、これまでは高度経済成長期の中で、どんな作っては捨てていった状況から、今後は限りある資源を循環して使っていけるよう、それぞれの人が自分に関係のあることとして、できることからいいので取り組んでいくことが必要だと感じた。また、物理的な豊かさを追求するあまり、心の豊かさが欠落しないよう、バランスを取って進めていくことが大切だということ学んだ。

【第四回】 #5 行動力の源泉を知る

この企画は、私たちAグループの企画であり、テーマ設定の段階から何度となく自主的に集まり、議論を交わした。産政塾のテーマである「殻を破る」ために、「今の自分に欠けていることは何か」「何かを成し遂げた第一人者は何が違うのか」などについて議論する中で、現状に満足していないもの、一歩踏み出せていないことを課題とし、「一歩前に踏み出し、(坂本竜馬たちのように) 物事の源(源流)になれる人を目指そう」との想いからチーム「GENRYU」と名付けた。第一人者に共通して感じられる「強い信念」「揺ぎ無い決断力」「一歩踏み出す勇氣」をキーワードにご講演いただく講師を探す中で、山梨日立建機 雨宮社長の名が挙がった。カンボジアの人々を地雷被害から救うために、対人地雷除去機の開発に私財を投げ打って取り組まれており、ただ「かわいそう」と思うだけではこま

のできるはずがないとの思いからとても心惹かれた。馬場ちゃんの素晴らしい交渉術が功を奏し、雨宮社長が早く引き受けて下さったとの報告を受けた時は本当にうれしかった。

当日は、片道4時間半かけてバスで向かう中で、参加者に事前に取り組んでいただいたパーソナリティーテストによる自己分析結果を確認し、各自がまず自分がどんな人間であるか（自分が優れている点、もつと努力する点など）を再認識した。その上で、雨宮社長のご講演を聞くことにより、自分に足りていないところや今後どうしていくべきかを実感として理解度を高めてもらうためであったが、自分としては、やはり何かを成し遂げる人というのは、感じることは同じでもそれを行動に移し、成し遂げるだけの強い信念があると感じた。雨宮社長の場合、地雷の爆発により片耳が聞こえなくなるなど、自身の命を危険にさらしながらも地雷除去に取り組んできたのは、幼い頃に母親から言われた「人の役に立ちなさい」との言葉が原点となつていふことであつた。その言葉が根底にあり、自らが目標として決めたことに對し、その中に自分の生きがいを見つけたことで、ここまで続けられたとの言葉に重みを感じた。あるテレビ番組に出演した際に「何をやるべきか、何をしたいかわかつている人たちは強い。使命感と目標が人間の能力を最大限に高める」とのコメントがあつた。例えば「親としての使命感により家族・子供をしつかりと育てる」といつたことであつたが、仕事においても、会社の中での自分の役割を認



識し、目標を持って取り組むことで、働きがいも感じられるし、自分の想いを持って取り組むことで強い信念が醸成されていくのではないかと思う。

今回、企画を完成させるまでには、メンバーも時間のない中でいろいろと悩むこともあったが、参加者の方々から好評の声をいただいたことで、チームとして取り組むことの達成感も感じることができ、自らにとっても本当にいい経験となった。

■産政塾へ参加して

『殻の外へ踏み出そう』を意識しながら、少ないながらも参加させていただいた企画を通して、まず現状（＝殻）を認識することの必要性を感じた。認識しなければ、その大きさや形、色を気にすることもなく過ごしてしまう。今回、殻を認識することにより、他の人の意見や考え方を積極的に吸収しようとする姿勢が大切と感ずることができ、さらに多くの人と交流したり、多くの情報に興味を持っていきたいという意欲が沸いた。このことが、まさに自分の殻を大きくし、さらには、これまでの経験からは予想もつかない考え方が生まれるようになった時に、一つの殻が破れたということになるのではないかと思った。産政塾に参加したことで、このような考え方を持てるようになり、この経験に感謝するとともに、今後も実践し続けていきたいと思う。

■おわりに

結果として、全7回のうち4回の企画にしか参加できなかったことは本当に残念であった。しかし、産政塾としては閉塾したものの、今回の活動を通じて知り合うことができた皆さんとは、様々な分野で今後とも末永くお付き合いいただければと思っている。早速、今年度末の三月には、まだ水に浸かるには寒すぎる時期にも関わらず、ドM集団の皆さんが第三回企画の滝行を再度開催されるとのことで、今後とも裏産政塾としての交流が続いていくことを願っている。

最後に、加藤塾長をはじめ、高橋さん、中部産政研の方々、チーム「GENRYU」の皆さま、そして塾生の皆さまに心より感謝を申し上げます。



一度きりの人生、これからが勝負！

豊田合成労働組合

馬 場 裕 美



《プロフィール》

ばば ひろみ

- | | | | | |
|--------|----------|---------|----------|----|
| ●1985年 | 豊田合成株式会社 | 入社 | 購買部購買第1課 | 配属 |
| ●2005年 | 豊田合成労働組合 | 常任執行委員 | 就任 | |
| ●2010年 | 豊田合成労働組合 | 常任執行委員 | 退任 | |
| ●2010年 | 豊田合成株式会社 | オプトE事業部 | 営業部 | |
| | 現在に至る | | | |

〈趣味〉 実施回数が年々減り、趣味と紹介することがおこがましいくらいですが、へたくそながらも、身体を動かすことが好きであり、死ぬまで細々と続けていきたいことは、下記のとおりです。

[セイリング、サイクリング、マラソン、スキー、トレッキング、読書、音楽鑑賞、旅行、植樹活動]

〈座右の銘〉 初志貫徹

はじめに・・・プロフィールの「座右の銘」を考えたとき、そういえば？十年前の中学生の時、正月の書初めで「一度、自分が決めたことは何があっても徹底してやりきるぞ！」の想いを込めて「初志貫徹」を書いて以来、遊びでも仕事でも、どんな小さなことでも決めたら、愚痴はたくさん言うけれども、第三者に何を言われようが、嫌われようが、自分が納得いくまで頑固にやつていたなあ・・・と、過去形で思い出しました。

しかしながら、さびしいことに、ここ数年（組合の専従に就任してから）忙しさを理由に中学生の時から続けていた1日1行日記が途絶えたり、愛犬の朝の散歩をさぼり続けたり、家のお風呂掃除やトイレ掃除をやらなくなったり、と数えだしたらきりがなくらい、初志貫徹とは程遠く、何かと理由をつけていろんなことを中途半端に投げ出し、逃げることを正当化し、そして「これではいけない」と思いつつも変わることができない人間になっていました。ただ、そんな中で、会社と家の往復だけの生活になってしまいうことを回避するために、マラソンのレースにエントリーし練習せざるを得ない状況をあえてつくり、私生活の余暇充実ではあるものの、自分が立てた目標を絵空事にしてしまわないようにほんの少しではありますが工夫していたことはせめてもの救いでした。しかし、全般的に怠惰な人間であることは否定できずで、産政塾へ参加するにあたっても、

「馬場さん、来年の産政塾に参加してください。」

「いえいえ、産政塾は、若手の人財育成の場であるから私は条件からもれているから、対象外ですよ。」
「女性の参加者を増やしたい意向で、年齢は関係ないそうだから、参加で回答しておくね。」

「ひえ、産政塾の狙いから外れてしまうのでは・・・？それに、組合の研修会と重なってほとんど参加できないと思いますか？」等と、「産政塾」に参加する・参加しないで、委員長と押し問答し、「うん」と言わないと終わらないなと思ひ参加を了承した次第です。しかしながら、せっかくなので「メンバーはいろいろな企業から参加されているから人脈が広がること」「いままでに経験がないことが体験できる（学べる）こと」の2点から自分にとって意義のあるものになるだろうと自分を納得させ、そして「どうせ参加するなら、楽しみながら、たくさん学んでやろう。」と、気楽にかつ貪欲に構えて「殻破り」に向けての活動をスタートすることになりました。

そんな心情での、みんなとの初顔あわせでした。

さて、本題にはいりまして、私の「殻」は何だろう??第1回の宿題となっていた企画を考えるにあたり、まず自分を振り返ってみました。基本的には、興味のあることは余程お金のかかることや危険を伴うことを除けば、まずは体験してみようという積極性と、所詮大きなことはできないから低いレベルであつても今できることを一生懸命やろうという考えで毎日を過ごしているということ、自分の人生に高望みしていないことと、まわりからも望まれていないことから幸いに「私にはここまでしかできない」と限界（＝殻＝壁）を決めてしまうことはあまりないと思ひました。むむむ??破るべき殻がない??そんなことはありえない!!次に、今の自分に足りないことを考えてみると「決めたことを継続できない」「判断・決断が遅い」「せめて自分だけでも・・・の考えで自分が正しいと思つたこと

は地味に行動するが、先頭に立ち人を巻き込んで行動することができない」「人前で話すことができない」「戦略、戦術がない」「人の話をじっくり聴くことができない」「人生の夢・目標が漠然としていて、先を見通し考えて生活していない」等、きりがなくなたくさんありました。

そこで、自分にできないことを克服し、なりたいたい自分をめざすことを「殻破り」とし、「的確な判断・決断ができる」「決めたことを徹底してやる」まずは、この2つがあたりまえにできる人になることを目標とすることにしました。自分のめざす姿が決まりやっと企画検討開始、組織の活動ということ個人ではなかなかできないことができると思うと「どんな企画にしようか」ウキウキ楽しんで考えました。

企画案は、冒険家の白石康二郎氏の講演&懇談会。彼は幼いころの夢である「ヨットで世界一周」をかなえるために子供のころから自分が何をすべきかを考え判断・実行されたそうです。また一例ですが、雑誌でみたヨットで世界一周された方の自宅の電話番号を電話帳で調べ弟子入りを直談判する行動力がある。そして、世界一周挑戦時も荒天や機械トラブルなど航海をこのまま続けるか、悔しくともあきらめるかの苦渋の判断を何度もされ、挫折しそうなきもあつたが、ご自身の強い意志と友人の励ましで乗り越え夢をかなえられた方であるとTVや雑誌で知り、「何がそこまで熱く動かすのか」「究極の選択を迫られたときの最終判断の基準は何か」など、冒険家と私たちサラリーマンとは程遠いかな・・・と思わなくてもいいですが、同じ人間なので何を一番大事にするか?という点においては参考になるのではないかと考え、是非、直にお会いし話をしてみたいと思いました。

この企画案をもつての第1回目。初めて会ったチームのメンバーも、「こうしたい」「しなければ!」
と思っても、いざ行動に移すとなると尻込みして何もできない自分から、率先して一歩踏み出せる、
物事の源になる人間になりたい。との想いを持っていたので、チーム名を「源流」と名づけ、みんな
で成長しよう!と誓いあいました。

各グループの企画について残念ながら全て参加することはできませんでしたが、参加した中で特に
衝撃を受けたと同時にいろいろなこと考えさせられたのは、豊島(香川県)と山梨日立建機の訪問です。
豊島では、40年近くの間、島の住民を守るため、島の自然を守るため、県
や国と戦い、時には仲間である島民や県民が内なる敵となってしまうた等
と数々の試練を乗り越え、やっと今かつて不法投棄された産業廃棄物の処
理が少しずつ進んでいる。しかしながら、最後に「香川県は信用しない」「自
分たちで監視していく」と言われた。行政と約束をしたものの信じていな
い、信じているのは一緒に活動してきた仲間だけということであり、なん
の罪のない善良な人々が利権者や権力者(行政含む)により馬鹿をみてい
る世の中であることを虚しく思いました。また、「私たちが無知だったこ
とがいけなかった」と何度か言われた。「知らない」ということは時とし
て「強み」となることもあるが多くの「最大の弱み」となってしまうと改



めて思いました。

そして、「もし自分が当事者だったらどうしていただろうか？」たればは無意味であると思いつつ自分に置き換えて考えてみたが、間違いなく活動に参加はするものの先頭たつて動くことはなく、また途中で「やつても変わらないから無駄だ」と考え、泣き寝入りし、愚痴を言っているだけの人間だったと思います。

山梨日立建機では、社長自らが地雷除去機を開発し地雷で苦しんでいる人々を不安から解放し、自立した生活ができる支援を進めており、また社員もそれに賛同し一緒に取り組んでおられました。「人の役に立ちなさい」「技術者としてできること」「将来を担う子供たちの笑顔のために」の考えのもと、失敗を繰り返しながらも多額の開発費を投じ、さらには自らの命も危険にさらしながら取り組まれる姿は、何よりも自分が一番大事で、なんの特技のない自分にできる社会貢献は残念ながら募金活動とごみ拾いだけと考えている私からすると、「社会貢献」の一言では語れなくもつと重みのあるものだと思いました。また、社長がいわれた「もつと世界にでていきなさい。やるべきことはたくさんある」は、豊島の「無知」とは異なるが、情報は大事であり、広く・深く情報（知識）を得ることが重要ですが、まずは広く・浅くでも多種多様な情報を得るようにし、それに対してどうあるべきか（どうするべきか）考えなければいけないと思い



ました。「知る」「考える（考える）」があつてやつと行動に移せるのだと実感しました。

最後に、今回の殻破りの目標とした「①決めたことを徹底してやる」「②的確な判断・決断ができる」について現状を報告して締めくくりしたいと思います。

①は、簡単に死ぬまで続けられできたかどうかが明確に分かることと考え「毎日、腹筋10回、ゴミを2個以上拾う」を実施することとしました。「なんだそんなこと」と思うほどのしょぼたいことですが、私にとって腹筋10回は、長年続けてきたことをここ数年でやめてしまったことの一つであり、たった10回すらサボる自分の甘さを叩き直そうと現在進行中です。これは心臓が止まるまで徹底して継続していきます！

②は、的確な判断・決断ができていくかどうかは定かではないが、できるようにするために新聞や雑誌による情報収集は従来どおりとして、「人の話をしっかり聴く」ことを心がけるようにしています。なぜならば、いろいろなことが機械的に処理される世の中になつてきました。が、機械を動かすのもその機械を考えるのも人間であり、時代が変わっても最後の最後は情をもった人が物事を決めていくと思つているので、雑談から業務、興味のない話も自分の引き出しを増やせると思つて、実践しています。もちろん、会話がすべて情報収集のためとは思つていませんよ！

産政塾での様々な活動と、私事ではありますが労働組合の専従として5年半働いたことで、ひとこ

ろの流行の言葉でいうならば「勝ち組」の方のお話を聴く機会に恵まれました。それらを全て吸収しガラリと変身できれば良いのですが、そうそう簡単なことではありません。次代を担うような人間にはとてもなれませんし、正直、どんな人生を送りたいかも現時点で明確になっていませんが、『人を変えることはできないけど、自分を変えることはできる』『自分が源泉』『熱い情熱』の4つを念頭に肩肘はらずにまつすぐ前を見て進んでいきたいと思っています。

8ヶ月という短い間でしたが、塾長、事務局、そしてメンバーのみなさんありがとうございました！そして、今後とも末永くお付き合いよろしくお願いします！



第 21 期産政塾で学んだこと



豊田合成株式会社

原 丈 衛

《プロフィール》

はら じょうえい

- 2004年 豊田合成株式会社入社
人材開発部 教育グループ配属
- 2009年 要員管理グループ配属
- 2010年 ダイバーシティ推進プロジェクト配属
現在に至る

〈趣味〉 山登り、ランニング、掃除

〈その他〉 子供は男の子2人。特技はどこでも寝ることができること。

【はじめに】

2010年1月22日（金）、寒風吹き荒れる中、第1回産政塾（開塾式）に向かった。知っていたのはパンフレットに書かれた『殻の外へ踏み出そう』何やら禅問答のようなキーワードと、過去の産政塾OBが、いろんな場所へ課外活動に出掛けていたことの2つ。先入観を持ちたくなかったので、あえて歴代OBに概要を聞く事はしなかった。

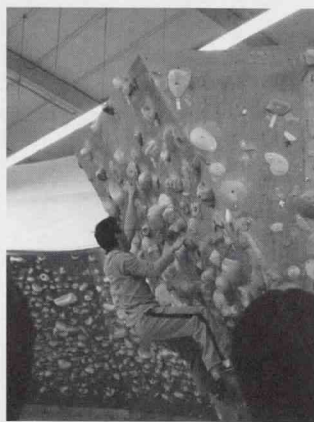
開塾式で第21期産政塾 加藤 裕治塾長は、『型の大切さを見直しなさい』とおっしゃった。『殻の外へ踏み出そう』ばかりが印象に残っていた私は???。殻を破るのではなかったのか？塾長は更に続けられた。『型を見直すことによって、自分が相対化できる』。うーん、ますます分からないと思うと同時に、この活動が前提条件や先入観、固定観念を取り外して自由に考え、議論し、行動できる、意義深い場という予感もした。

今、振り返ると、どの企画もテーマ設定の背景やねらいを始め、事前の現地確認や関係者との事前すり合わせ、当日の進行と、本当によく考えられ、有意義な取り組みであった。忙しい中、勤務地も勤務形態も異なるメンバーが、限られた制約条件にもめげず、一生懸命考えてこられたことへの感謝の意も込め、今回の活動をもう一度、振り返りたい。

【各企画をとおして感じたこと】

第2回産政塾 壁を越えろ！（4／14 Eグループご担当）

ボルダリングとはクライミングの一つのジャンルで、シューズと滑り止めのチョークだけを使い、大きな岩をよじ登る種目。このボルダリングにおける日本女性の第一人者 尾川智子さんと一緒に、活動した時のこと。彼女は目を向けるべき事として、誰のため？何のため？がキーワードであるとおっしゃった。自分ならできること、自分らしくできることは何かを冷静に振り返り、自分で目標を決めやり切ること、その際には、自分の手の届く具体的な目標にブレイクダウンすることが大切とのこと。これらはまさに、スポーツ界のみならず、仕事の世界でも全く同じように通用することであり、社会に普遍的な共通項があることを知った。



第3回産政塾 滝に打たれて自らを磨く(5/7 Dグループ担当)

静岡県袋井市にある油山寺（開山1300年の真言密教の古刹）。『点、一角に仏様がある』という鈴木住職からのお話を聞きながらの般若心経の写経と、時が熟すれば自然に殻は破れるから、破ろうと意識しすぎないこと、現代人は自分が得たい、得たい、の一心の人が多く、自分からも与えないと、外からいろんなものは入ってこないという示唆に富む言葉をいただいた。極めつけは滝行！小雨でやや気温低めということもあり、予想以上の寒さで震えが止まらない。『ノウマクサマンド バザラダンカン』と唱えながら落差3〜4メートルの滝に打たれる衝撃は、やってみただけでしか分からない体

験であつた。

第4回産政塾 非日常空間と現実を対比させ、

今一度『豊かさ』とは何かを考える (5/28~29 Bグループご担当)

業務都合により唯一の欠席会！ホントに残念

第5回産政塾 行動力の源泉を知る (6/18 Aグループご担当)

山梨県南アルプス市で77人の従業員を抱える『山梨日立建機』を営む傍ら、長年に亘って『地雷除去機の機械を作る』というテーマに挑んでこられた雨宮 清さん。地雷は現在でも世界120カ国以上に、およそ1億個以上も埋設されており、20分に1人が死傷していると言われる。人が踏むか、または何らかの衝撃で爆発するまでは60年以上も行き続ける。同社開発の地雷除去機はカンボジア、アフガニスタンなど6カ国、68台が納入され、世界中で地雷除去に活躍している。地雷除去機という言葉からイメージするのは、当然、地雷を除去する重機のこと。でも雨宮社長は、重機の前部で地雷除去をし、重機の後部で農地の耕作ができるようにしている点が決定的。これは実際に現地で手作業で地雷除去をしている方や、地雷埋設近辺に住むお百姓さんから実際に話を聞き、得たヒントを実用化されている。地雷除去後の農業や教育など、その国や地域の自立化につながる仕組み全体まで視野に入れた展開をされているところが立派だと感じた。

第6回産政塾 人と防災未来センターを訪ね

減災のために何ができるか（7/16 我らCグループ担当）

1995年1月17日のM7.3の阪神・淡路大震災は、死者6,434人、負傷者43,792名、被害総額は10兆円規模をもたらした、戦後史上最大の地震である。阪神・淡路大震災のモニュメント等の見学と、語り部の方からのお話を伺う中で、『のこす』『つたえる』『いかす』の3つの視点からの取り組みが重要だと学んだが、詳細は産政研フォーラム本誌へ投稿した本文へ譲りたい。

【全体をとおして学んだこと】

産政塾の活動をとおして二つのこと、『働くことの意義』と『一人ひとりに真剣に向き合う姿勢』を学んだ。

まず一つ目の『働くことの意義』。時に耳にするのは、『働くとは、傍（はた）を楽にすること』。つまり身の回りの誰かが、ある作業がやりにくくて困っていたり、助けを必要としていたりする時に、自分のできること、力で助けてあげて、感謝されること、社会の中で『あなたがいてくれてよかった』と、自分の存在を認められること、これを姜尚中氏は著書『悩む力』で『他者からのアテンション（ね



ぎらいのまなざし)、または他者へのアテンション』と言っている。山梨日立建機の雨宮社長も、地雷除去機に採算度外視で取り組もうと思ったきっかけは、カンボジアで出会った右片足をなくされたおばあさんと少女から、『あなた日本人でしょ、カンボジアの人たちを助けてあげて下さい』の一言と、地雷除去機開発で何度も壁にぶち当たった時、常にお母様の『陰日なたのない人間になれ、人のためになれ』の言葉だったと聞いた。厳しい納期が設定され、成果だけが求められがちな今日、『自分の夢の実現』といったキーワードをよく目にするが、それは次の段階の話であり、私は働くことの意義、働くエネルギーの源泉は、このように『自分が誰かのために役立ち、あなたがいてくれてよかったと言ってもらえる』ことではないかと考える。これからも、自分にとつて人の役に立てることが何なのかは、自分の特性や強みを振り返り、探さなければならぬ。また、逆を言うと、私も一緒に働く職場のメンバーや家族に、『ありがとう。あなたのお陰で本当に助かった』と、日頃からきちんとメッセージを発信しなければならない。特に仕事の場面では、時にはねぎらいの言葉だけではなく、厳しい指導や叱咤になる場面もあると思うが、それも相手のことを思つてと真摯な態度で臨めば、ねぎらいの言葉と同等の価値を持つフィードバックになるのではないか。

ここで二つ目の『一人ひとりに真剣に向き合う姿勢』が必要となる。労働力の減少と高齢化社会、グローバル経済の到来、直にコミュニケーションを取るのが苦手な若年層が増加する中、今後は国籍／性別／価値観等の異なる多様な人々と共に働き、一人ひとりの力を結集し、組織力を高めてゆくことが必要となるが、その対応策として、『ダイバーシテイ(多様性) マネジメント』がここ数年のト

レンド。ここで重要なのは、自分の既成概念にとらわれず、一人ひとりに対して『きちんと接すること、即ち、『一人ひとりに真剣に向き合う姿勢』だと考える。成果や納期の期待水準が日に日に増し、それを担保するITシステムの技術も高度化する昨今、個々人よりも組織全体の効率性を重視したマネジメントやコミュニケーション一辺倒になりがちである。しかしながら、当然の事であるが、組織は人一人ひとりから構成されるものであり、個々の仕事も人一人ひとりが行なっている。産政塾のグループ単位での活動は、まさにこの部分の本質を突いた企画であると思う。各グループが真剣に考えてくれた企画にしっかりと向き合う、活動後のグループ討議や全体発表時に、皆がそれぞれ言いたいのは何か、そこから自分が得られる新たな気付きやヒントは何かを理解するためには、一人ひとりに真剣に向き合う以外に方法はない。そうすれば様々な情報や背景知識が入ってきて、自分の狭い知見、即ち既成概念にも気づくことができる。『一人ひとりに真剣に向き合う姿勢』、それこそが、この閉塞感あふれる今日に、少しでも風穴を開け、風通しを良くする、唯一でかつ、最大の効果がある方法ではなからうか。

各活動と冒頭に加藤塾長のお言葉を振り返り、もう一度考えてみる。果たして自分にとっての『型』とは何なのか？ 殻の外へ踏み出すことはできたのか。私は『自分が誰かのために役立ち、あなたがいてくれてよかったと言ってもらえること』と『一人ひとりに真剣に向き合う姿勢』これら二つのテーマを、自分にとって大切な殻として、これからの日々の行動の際の指針としたい。私にとっての産政塾への参加意義を振り返ると、『自分にとって、大切にすべき型とは何かを考え、再確認できたこと。』

つまり新たなスタート地点を設定できたこと』であると言える。その殻の外へ踏み出すことができたかどうかは、この先の私の行動の取りかた一つであるし、また時を改め振り返ることとしたい。このように白紙キャンバスに自由にテーマを設定し、働く意義や、人とのコミュニケーションについて深く考え、自分がこうと思った考えを『文章』で表現する場合は、日常そう多くはない。産政研フォーラム本誌への投稿や、この塾誌（卒業論文）で考えさせる機会の設定も、非常に心憎い企画である。

【最後に、お世話になった皆さんへお礼の一言】

まず第21期産政塾の活動を共にした皆さん。困ったときや壁にぶち当たった時こそ、この産政塾の活動で学んだこと、友の顔を思い出し、少しでも前進できればと思います。これからも真剣に議論できる機会を定期的に持ちましょう。

豊田合成の平松当塾評議員、上司である斉藤さんと安藤さん、松原さん、そして人材開発部のメンバー、このような貴重な経験と心身の鍛錬の場へ派遣いただけたことに感謝いたします。

産政塾事務局の高橋さん、最初から最後まで迷惑を掛けっ放しでした。これだけの労力を各グループへ掛けてこられたご苦勞を推し量ると本当に頭が下がります。ありがとうございました。

最後に、一緒に企画を進めたCグループのメンバーへ。企画段階では皆の都合がうまく合わなかったけれども、そんな中気づいたのは、仕事も家庭も、そんなに思い描いた計画とおりに進まない、じゃその制約条件を乗り越えるためにどうするかということ。メンバー一人ひとりを信じ、その期待や誠

意を裏切らないよう、自分がチームへ貢献できることは何かを考え、決めた役割に対しては腹を括つて取り組む大切さを教えてくれました。苦勞を共にしたCグループの皆さんには本当に感謝しています。心からありがとう！そして、これからも宜しく！



産政塾を振り返って



中部電力株式会社

平 林 克 章

《プロフィール》

ひらばやし かつあき

- 1999年 中部電力株式会社 入社
長野支店豊科営業所営業課配属
- 2002年 長野支店上田営業所営業課配属
- 2004年 本店給与・厚生サービスセンター配属
現在に至る

〈趣味〉 バスケットボール・妻との散歩

【おつめい】

入社十一年目を迎え、現在の職場に配属されてから、他企業の方と接する機会があまりない中で、今回の産政塾に参加させていただき、二十一期生の方たちと出会い、貴重な体験をすることができ、有意義な時間を過ごすことができた。

これまでの産政塾の活動で、学んだこと、感じたことを振り返り、自分の殻とは何か考えたいと思う。

第2回【壁を越えろ！】

産政塾初回の企画は、神奈川県横浜市にあるクライミングジムを訪ね、テーマにもある壁を越えるべくボルダリングを体験するとともに、プロクライマーである尾川智子さんより講話をいただいた。

尾川さんより話を伺って感じたことは、「一步を踏み出す勇気が必要」ということだ。尾川さんは誰もやったことがないことに挑戦するという目標のためには、不必要だと思うことは切り捨て、逃げ道を作らず突き進むそうだ。自分を徹底的に追い込むほどの強い信念があり、不必要なことを切り捨てるといふ一步を踏み出したからこそ、高い目標に向かって進んでいけると感じた。一步を踏み出すことは、簡単なようで意外と難しいことだが、一步を踏み出すことができれば、今まで見るべきなかつた違った世界を見つけることができると思った。自分自身、常にチャレンジ精神を忘れず「一

歩を踏み出す勇氣」を持って、色々なことに挑戦していきたいと思う。

また、今回初めてボルダリングを体験したが、最後のほうは腕に全く力が入らず、壁を登ることすらできなくなっていた。塾生が腕を震わせ必死の形相で登っている場所を、いとも簡単に笑顔で登っていく尾川さんを見て、トップアスリートの凄さを感じることができた。翌日、上半身がひどい筋肉痛になったが、楽しく過ごせた1日だった。

第3回【滝に打たれて自らを磨く】

静岡県袋井市の油山寺を訪ね、「心を無にする」ことをテーマに住職より説法を聞くとともに、写経・滝行を行った。

写経・滝行は初めての体験であったが、残念ながら「無心」になることはできなかった。「無心」になるべく精神統一しようと思えば思うほど、次から次へと雑念が沸いて出て頭の中を駆け巡っていた。あまり意識をしたことがなかった「心を無にする」ことの難しさを感じた。

この企画で、写経・滝行を経験し、また住職から「生活において、ストレスなど心に溜まっているものを吐き出すことができる、ホッとする場所が必要」という言葉を聞き、「無心」とは、心がリラックス状態になること



だと思った。心がリラックスされれば、心にゆとりができ、色々なことに挑戦する意欲も湧いてくると思う。自分自身、心がリラックスされる家庭をこれからも大切にし、心にゆとりを持ち続けていきたいと思った。

産政塾に参加しなければ、体験することがないであろう滝行を経験でき、貴重な1日となった。

また、Dグループの皆さんが、来年の3月に滝行を計画しており、5月に私たちが体験した滝行とは、水が比較できないほど冷たいと聞いている。都合がつけば、是非参加したいと思う。

第4回【非日常空間と現実を対比させ、今一度「豊かさ」とは何かを考える】

第4回は私が所属するグループの企画であった。「現代アートの島」として自然に美術を取り入れ、地域活性化に成功した香川県直島。その一方、隣にある島で産業廃棄物の不法投棄により環境を破壊され、今もその産業廃棄物の後始末を行っている香川県豊島を訪ね、両極端の島を見学することで、豊かさとは何かを考え、我々のライフスタイルを見つめ直すという目的で企画をした。

初日は豊島交流センターを訪ね、産業廃棄物不法投棄の現状を伺うとともに、不法投棄現場を見学した。自分たちの企画であったため、ある程度の知識はあるつもりでいたが、いまだに山のように残っている不法投棄現場を目の当たりにし衝撃を受けた。毎日300トンもの産廃を処理しているにも係わらず、全体の約55%が終わったところで、全部撤去するまでには、まだ数年かかるとのことだった。

小さな島にどれだけのゴミが捨てられていたのか。もし、自分の住む土地にゴミが不法投棄されていたらと思うと、怒りが込み上げてきた。しかし、そのゴミは人間が作り出しているものである。近代化が進み「便利」になっている世の中で、ただ新しい物を求めるだけでなく、無駄をいかに省き、物を大切に扱いゴミを減らすことの重要性を痛感した。

直島では、現代アートを取り入れた自然と一体化している地中美術館と「家プロジェクト」という、地域にある住み手がなくなった伝統的な家屋に作品を置き、家ごと作品化して家を再生させている地域を見学した。周辺に住む住民たちが、独自でプロジェクトを立ち上げ、「屋号」を家の玄関先にモダンな表札として設置しており、それを見るのも非常に面白いものだった。見学を通して、直島の住民が現代アートというきっかけで、地域を活性化すべく、積極的に取り組みをしていることで島全体が一体となつて活動していると感ずることができた。

2つの島を訪ね、豊かさとは、「物の豊かさ」ではなく心穏やかに過ごすことができる「心の豊かさ」だと思った。「物の豊かさ」を求めすぎた結果、不法投棄という被害にあつた豊島。現代アートをとり入れ地域活性化に成功し、年々観光客を増やしている直島。「物の豊かさ」も生きていく中では必要なことであるが、「おもしろさ・楽しさ」を探し触れることで、心にゆとりができ穏やかに過ごすことができると感じた。自分も心に余裕を持ち、日々生活していきたいと思う。

それぞれが忙しい中、仕事が終わってから打ち合わせをし、講師への調整を行ったBグループのメンバーには本当に感謝しています。

第5回 【行動力の源泉を知る】

山梨県南アルプス市内の山梨日立建機株式会社を訪ね、雨宮社長より地雷除去機の開発と地雷除去への思いを伺った。

第5回の企画では、「気づきの大切さ」と「信念と目標」が人の行動力を変えることを学んだ。

雨宮社長は、商用でカンボジアを訪れた際に、地雷被害者の悲惨な姿を目の当たりにしたのをきっかけに、地雷除去機の開発を始めた。今では、地雷除去だけが目的ではなく、地雷除去後の土地を農地や宅地として造成し有効活用できる除去機が開発されているということであった。

「何をやるべきか、何をしたいか分かっている人は強い。使命感と目標が人間の能力を最大限に高める。」

これは、雨宮社長がテレビ番組に出演され、コメンテーターの方が雨宮社長の話を伺って感じた言葉です。この言葉どおり地雷を除去するという強い信念・目標を持つからこそ、地雷除去機の開発や危険を顧みずに現地で自ら地雷除去をする行動力が生まれていると感じた。

また、人が変わることのできるきっかけは、どんな人にも訪れると思う。それはほんの些細なきっかけかもしれない。そのきっかけに気づき、一步を踏み出し挑戦できるような行動を心掛けたいと思う。

正直、今回の話を伺うまで戦争や内戦が起きても他人事と思っ
ていたため、地雷によって被害を受け苦しんでいる人がいることは知
っていたが、何が自分にできるか行動に移すことなど考えること
もなかった。何が自分にできるか、まだ答えは見つかっていない
が、戦争を知っている世代が少なくなる中で、これから生まれて
くる次の世代に戦争の悲惨さや重みを伝えていく必要性を感じた。

雨宮社長の信念は、自らが率先して行動することで社員に伝わり、
地雷除去機の開発に会社が丸となって挑んでいると思った。自分も、
リーダーとなる時が来たら、率先して行動し人を引っ張っていける
リーダーになりたいと感じた1日だった。

第6回「人と防災未来センターを訪ねて、減災のために何ができるか？」

最後の企画は、兵庫県神戸市にて震災モニタリングを見学するとともに、
阪神淡路大震災で被害に遭われた方から体験したことを伺った。

この企画で「減災」という言葉を初めて知り、「減災」には何が必要か
自分なりに考えてみた。

（減災とは・・・災害において発生し得る被害を最小化するための取
り組み。）

数十年前から起こると言われている東海大地震など災害が起こる可
能性が予測されていても、実際に災害を体験していないため、自分
も含め多くの方は危機意識・防災意識が低いのが現状だと思う。
災害が起きてから慌てても遅いため、防災グッズの購入等、事前に
災害に備え準備することが大切だ

が、それを行動に移すためには、どんな時に災害が起こるのか。また、災害が起きたときに身の回りで何が起こるのかを学び、「災害についての知識を深める・災害について知ること」が危機意識・防災意識を高め「減災」への第一歩だと感じた。

自分自身、今回の企画が終わってから自宅の寝室の整理を行い、「減災」への第一歩を踏み出せた気がした。

【殻の外へ踏み出そう】

産政塾に参加して、自分の殻とは生れてからの体験や学んだことで「自分の限界」を決め付けていることだと思った。人生を振り返ってみると、子供の頃の方が初めての経験が多く与えられたことに對して、何も考えることなく、挑戦していたと思う。これまでの経験が積み重なり、自分には出来ないという勝手に決め付け、制限してしまう心がある以上、「殻」を破ることはできないと思った。

産政塾の活動を通して、「殻」を破るには、『一步を踏み出す勇氣』が必要であることを学んだ。簡単なことではないが、一步を踏み出せば、今まで出来なかったことも違う視点で見ることができ、成長できると確信している。これから先、さまざまな「殻」を破るべく一步を踏み出した時、困難な道や大きな試練が訪れると思う。そんな時こそ、新しい世界を切り開くチャンスだと思い、目標に向かう



て歩んでいきたい。

最後に、加藤塾長、安藤事務局長、高橋さんをはじめ、二十一期のメンバー、快く産政塾へ送り出ししてくれた職場の皆さん、大変お世話になりました。本当にありがとうございました。



産政塾を振り返って



豊田自動織機労働組合

深 谷 英 貴

《プロフィール》

ふかや ひでき

- 1969年 愛知県刈谷市生まれ
- 1988年 株式会社豊田自動織機製作所
(現 株式会社豊田自動織機) 入社
技能専修学園にて学ぶ
- 1989年 フォークリフト部品の溶接を担当
- 1998年 豊田自動織機労働組合 代議員
- 2001年 豊田自動織機労働組合 非専従執行委員
- 2004年 豊田自動織機労働組合 専従執行委員
現在に至る

〈家族〉妻・長男（中学1年生）次男（4年生）

○ はじめに

今回産政塾に参加できたことを感謝しております。本当にありがとうございました。今思えば、参加のきっかけは決して自主的かつ積極的ではなかったと思います。労組での順番的なものがあり参加していないのは自分だけでした。また参加要領に「三十歳前後の若者で構成され」の一文があり40歳を過ぎた私が参加するのは・・・と書記長に「三十歳前後・・・」と書いてありますけど、と何回も言っていたような気がします。しかし前任者（35歳かな）から異業種の人たちと触れ合うことができると聞き、参加を決意しました。

産政塾テーマ「殻を破って外に踏み出そう」の自分にとっての「殻」とは？40歳になり何かを気付く良い機会になれば、という決意で参加しました。

と書いたものの、私は残念ながら産政塾に2回しか参加できませんでした。高橋さんを始め、グループのメンバー、産政塾の皆さんにはこの場をお借りしてお詫びを申し上げます。本当にご迷惑をおかけしました。

○ 開塾式

初顔合わせなので、とても緊張していました。しかしここまで来たらしかたない、と覚悟を決めて参加しました。気合が入り過ぎて、どの参加者よりも早く会場に到着したのです。いざ皆が集合し

てみると、参加者も皆さんとても若く、40歳の私が皆さんと本当にうまくやっていけるのか？と不安でした。自己紹介の時にも「40歳を超えたおじさんですが」と挨拶をしたような気がします。どれだけ年齢を気にしているのだと思います。……その時点で私自身長年培ってきた分厚い「殻」の存在に気付かされた気がします。その後グループに別れ自らが持参した企画（案）について討議の場となりました。自分達で企画を立て実行していくことがグループとして与えられたテーマであり、皆さんの持参した企画（案）の説明を聞くたびに、「なるほど！」「それは面白い！」など感心する内容ばかりでした。今振り返ると自分の企画（案）はありきたりで面白みの無い内容であったと思います。自分自身の「殻」に気付かされた時でもありこれは相当「楽しくなりそうだ」という反面自分自身の「殻」から踏み出すことは並大抵の事ではないと実感し今後の活動へ不安の開塾式でした。

○ ボルダリング体験～壁を超える

大変に楽しみにしていたのですが、急遽参加できませんでした。本当に残念でした。

○ 滝行・滝に打たれて自らを磨く

開塾式後の懇親会・4月に実施したボルダリング体験にも不参加であつたため若干の不安も持ちつつ参加した。今回の内容はすべてが初めての体験でありとても興味深い内容であつた。まずもって、Dグループの皆さんの企画に感謝です。

滝行については、当初はすごい迫力のある滝をイメージしていたが実際はそのような滝ではなかった。少し残念・・・と思いつつ実際に打たれてみると、すごい衝撃であつた。教わつた言葉（呪文）が途中で言えなくなつてしまふかと思うほどでした。必死に言葉（呪文）を唱え続けました。滝行を終えた後の爽快感は今でも忘れない。なんとも言い表せない爽快感であつた。滝に打たれている時は、本当に落ちてくる水の衝撃だけに集中しており他の事を何も考えていなかったと思う。なかなか経験できることでは無いと実感した。予断ですが、ある方に「本当に白衣が似合いますね」と言われ、とても複雑な気持ちになつたことは付け加えておきます。しかし後日写真を見て「なるほど!」と納得した自分でした。

写経は会場全体が緊張感であふれていた。参加者は息を殺しながら一文字一文字、丁寧に書いており一種異様な雰囲気であつた。私もその緊張感に押しつぶされそうになりながら必死に書き写した。少しでも気持ちを緩めると下書きからはみ出してしまう。そんなことも考えながらいつに無く「集中」していた。しかしそんな必死さも長く続くものでもなく、ついつい足の痛みが気になつてしまう。結果足の痛みに耐えながら完成することができた。普段の生活の中でなかなか体験できることではない「集中」。言葉では良く「集中しろ!」と簡単に言うが実際こんなに集中したことがあつたであろうか。



ぜひ、皆さんも機会があれば油山寺を訪ね、ご住職のお話の話を聞き、滝行・写経などを経験されてはいかがでしょうか。

○ 豊島・直島く豊かさは何かと考える。

私たちBグループに企画でした。本当に残念ながら業務の都合で当日参加できませんでした。グループの皆さんの本当にお詫びを申し上げないといけません。本当にすいませんでした。

Bグループの企画は、リーダー大野さんが豊島の「ごみ問題」直島の「島の活性化」を強く訴え、Bグループの企画と決定されました。他のグループがどのような打ち合わせをしていたのかわかりませんが、Bグループは21時から打ち合わせが始まります。最初は各々がいろんな思いを持っており、議論もまとまりませんでした。が、幾度と無く繰り返される議論の中で、企画の詳細が決定していききました。いざ本番を迎える2週間前に本格的に参加できないことが決定してしまいました。自分の役割もあったのですが、すべてをグループの皆さんへお願いすることとなりました。私も本当に参加できず残念でした。皆さんにご迷惑をお掛けしてしまいました。



○ 山梨日立建機訪問く行動力の源泉を知る

参加できませんでした。

○ 神戸く減災のために何ができるのか？

参加できませんでした。

○ 閉塾式

参加できませんでした。

○ 最後に

産政塾が終わり自らの「殻の破り方」について再度考えてみても、正直よくわからない。2回しか参加していませんから、わかるはずも無いのですが・・・

その中で、滝行でのご住職が「殻は、機が熟すれば自然に破れるものである。機が熟すまでは、できることをしっかりと準備しておけば良い」と話されました。「焦る必要は無い。ただ自分の殻に気付くことが重要あり、しっかりとその殻について考えておく必要がある。」と言うことに気付くことができました。私自身も今回この産政塾を通じ、初めて自分の殻について考えることができたのは確かです。今回のような機会がなければこの先も考えることが無かったと思います。今回の経験を機に今

までの自分と今後の自分についてしっかり考えていきたいと思えます。

最後に半年という短い期間でありましたが、一緒に活動をさせていただいた21期生の皆さん、特にBグループの皆さんにはたくさんさんの感謝を申し上げます。そして塾長、運営を親身になってサポートしていただいた高橋さんに感謝を申し上げます。

ありがとうございました。

さてこれから何にチャレンジをしていこうかな！



私なりに、一歩前へ



中部電力労働組合

福 田 さや子

《プロフィール》

ふくた さやこ

- 平成5年 中部電力株式会社 入社
津島営業所料金課 配属
- 平成10年 一宮営業所営業一課 配属
- 平成15年 港営業所営業一課 配属
- 平成21年 中部電力労働組合
常任執行委員
現在に至る

〈好きなこと〉

- 体を動かすことが好き
若かりし頃は柔道←そこそこ強かったかな
現在はフットサル←いまいち上達せず
(姪っ子2人がかなり上手く、指導されています)
- 昼寝が好き
昼寝ができることを贅沢に感じる
(ただし、その日の夜は眠れなくなり、若干の後悔を覚えるが…)

塾って??

30才となる今まで、塾には通ったことが無く……。この歳で塾って??何をするのだろうか、申込書を受け取った時はこれから何が始まるのか。久々の勉強で千恵塾・吹き出物のオンパレードになってしまうのかと心配になりました。↑入社2年目に電気工事士免許を取得するため勉強したら顔にボツボツが発生した、いや～な経験あり。

でも、そんな気持ちを吹き飛ばしてくれたのが、先輩達の一言。「自分のやりたいことが経験できて、横のつながりもしつかりできるよ。」とのこと。そして過去の活動記録を見せていただき、吹き出物の心配はパァ～となくなりました。

殻って??

さてさて、心配事が無くなったのは良かったものの、この「殻」とはどういうことなのか?じつくり考えることが始まりました。

殻とはどうゆう物なのか。一つなのか、二つなのか。何重にもなっているのか。でもそれはすぐに

知ることができました。

開塾式での加藤塾長の講話で、「先輩がやってきたことに沿うだけでは、改善はない。」「なぜを5回繰り返す。繰り返すことにより真意に突き当たる。人のせいにせず、自分に関連があることと捉えること。」と言われました。

今までを振り返ってみると、私は昨年や前回と同じように仕事を進めていました。そしてほとんど疑問に思うことなく、前回と同じようにやっているのだから問題ないと決めつけていました。

これも一つの殻なんですよ。自分で考えることをしないので、成長しない。いつまで経っても同じレベルのまま。もしかすると退化しているかも。自分自身で前進や成長することをやめてしまっているんだなと思いました。

まだ塾は始まったばかりなのに・・・このままいくと、私はとてつもなく厚く硬い殻に包まれていることを自覚することになるのではと。

そのためにも、塾の中で、自分自身の殻を見つけ、しっかりと向き合い、少しでもその殻を薄くし、いつか飛び出せればと思いました。

いよいよ開始!! まずは・・・

私の所属するEグループ（リーダー…兼松さん、サブリーダー…伊藤さん、記録係…安藤さん、フォーラム係…高田さん）の企画が1番目ということで、すぐに取り掛からないと間に合わない状況でありました。が、仕事の都合で打ち合わせに遅れてばかりで、Eグループそして高橋さんには本当に大変ご迷惑をおかけいたしました。感謝感謝の気持ちでいっぱいです。

壁を越えろ！

フリークライミングに挑戦

人それぞれ、いろいろな壁があります。仕事、プライベート、人間関係などなど。

その壁に立向かうために、まだ経験したことのない物理的な壁に挑戦し、また壁を越える第一人者である尾川智子さんとの交流の中で、私達が感じている壁を乗り越えるためのヒントを掴んでいきたい、掴んでもらいたいという気持ちで企画を進めていきました。（リーダーの発案にEグループみんなが賛同）

この企画のおかげで、尾川智子さんを知り交流できたことは、私にとって殻を薄くする第一歩になったのではないかと思います。

まずは、尾川さんを知らなくてはと言うことで、いただいた資料やネットで情報収集。

資料の中には「宇宙飛行士になるのが夢」「何事も一番が好き」「上へ、上へ」「目の前に無限の可能性が広がっている」という前向きな言葉ばかり。

私の場合は「無難に」「平凡に」「普通」という言葉ばかりの気がします。尾川さんと比べるのは失礼ですが。

こんなにも前向きで、しかも成功して輝いている人に直接話を聞く機会をいただけたことに感謝でした。

そんな輝いている尾川さんも、負のスパイラルにはまり込んだ時期もあったようですが、純粋に登ることが楽しい、登ることこそが無常の喜びということを確認し、負を吹き飛ばしたそうです。

またまた、比べるのは失礼ですが、私の場合、負の状況に陥ると抜け出そうとものがくのですが、その抜け出す方法が楽な方へというか、抜け出すより逃げ出すという言葉の方が正しいかもしれません。

自分が何をしたくて、何を目指しているのか。まずは原点に戻る、振り返ることは必要であり、一歩進むためには大切なことなんだなと感じました。

予習だけでかなりプラスになれた私でした。

もちろん、ボルダリングの予習もしっかり行いました。↑予習は頭の中のみなので、実際に体が動

くかは（笑）

そんなこんなで、Eグループの企画実行の日がやって参りました。

私は司会という大役をおおせつかり・・・専従となつて1年経ちましたが、人前で話をする事はやはり苦手。何を話せばよいか悩み考え、当日の新幹線の中でもブツブツ、あつという間に横浜へ到着。

クライミング会場へ到着後、ジムの壁を見て思うこと。こんなの登れるかなあゝと不安な気持ちが。でも、今日はボルダリングの第一人者にサポートしてもらえるから大丈夫!! 楽しもう!! ほんの少しかもしれませんが、前向きな気持ちの表れだと自画自賛。

尾川さんと打ち合わせをしている時にも、しつかりプラスのオーラを吸い込ませていただきました。

そして、クライミングジムプロジェクトのスタッフさんにも、お世話になりました。なんと、私の司会に合わせてBGMを流していただけるとのこ



とで、この初めての体験の前に、ハラハラだった気持ちが一瞬に変わり、やる気倍増でした。アッ、決してやる気が無かったわけではありませんよ。

一つの変化でこんなにも気持ちは変わるんだと実感しました。普通に司会をするだけでは、緊張するだけでその場を楽しめなかったと思います。普通や、今まで通りがいいって思っていました、ちつさなことでいいから変化する・変化させることは大切だと思いました。

人の力を借りての変化、自分自身でもたらず変化。

殻を薄くし、飛び出すキーワードを一つ掴んだ気がしました。

いよいよボルダリングが開始。

チーム戦ということもあり、応援にも熱が入ります。かなりの盛り上がりでした。

そして、チームという枠を越えて、頑張る人を応援する塾生達の姿。応援してもらえから、また頑張れる。これがプラスの連鎖なんだと実感しました。

目の前の物理的な壁を乗り越えるように、仕事やプライベート、人間関係でも、誰かのサポート・

応援があればさらに頑張る気持ちが生まれるのではと思います。

ボルダリング体験後の講演では、たくさんさんの貴重な言葉をいただきました。信頼関係を生むには、コミュニケーションが1番であり、信頼していることを言葉で伝えることが大切だということを、尾川さんの実体験からあらためて知りました。

そして、夢をあきらめない理由は自分で決めた道だから。

この言葉は胸に突き刺さりました。私は、自分で決めたことでも、うまく進まなくなると、頑張ることをやめて、進まなくてもいいような理由ばかり探していたからです。

自分で決めた以上、とことんやり抜く強い意志が私には必要であり、持つ努力をしなければならな
いと思いました。

また、気持ちの切り替えをしなくてはいけないと感じた言葉もいただきました。

「やってみないと分からないこと」

この言葉を

「無理なこと」と受けとめず「無限の可能性」と受けとめる。

後ろ向きにならず、前向きに進むこと。これは本当に私に必要なことだなと思いました。

このボルダリング体験、尾川さんの講話を通じて、自分に足りないこと、足りないことに対してどうすれば良いか、ヒントをたくさんいただくことができました。

尾川さんのようにはいかないけれど、私なりに一歩ずつ前に進んでいければと思いました。↑かなり前向きになりましたよね。

やあ、続いては。

次に参加したのは、閉塾式。と言うのも、参加できた企画は1回だけという悲しい結果。皆勤賞の人もいるというのに。

皆さんの企画を体験することはできなかったですが、この閉塾式で塾生のみなさんの話を聞ける機会があったことが、私にはなによりも嬉しいことでした。

グループディスカッションでは、私と同じでまだまだ殻の外に踏み出せていない塾生もいましたが、

この塾へ参加して何よりの収穫は、一歩踏み出そうという気持ちが生まれたことです。

まずはやってみる、行ってみる、経験してみる。手をつけないでいることはもつたないことなんだと思います。無理をせず、自分のペースで。

そして、1人、2〜3分程度のスピーチでは。なんと自分から手を挙げてスピーチの場へ。（参加回数が少なかったという理由もありますが）

このことも、私にとっては一歩前進できた表れではないかと思っています。緊張のあまりハチャメチャな内容ではありましたが、真剣に聞いてくれる皆さんの優しい目が嬉しかったです。

やういふはなへ。

今回、私達21期生を見守り、支えてくださった加藤塾長、安藤事務局長、高橋様。本当にありがとうございました。

そして21期生のみなさん。ありがとうございました。



閉鎖式でも皆さんの想いは一つだったはず。これで最後ではなく、21期生のつながりはまだまだ続きます。

その続きの1つが、3月の滝行。Dグループのみなさん、企画していただきありがとうございます。みなさんとお会いできるのを楽しみにしています。（滝行については、Dグループの企画書で予習させていただきます。）



第 21 期産政塾を振り返って

産政塾事務局

高 橋 若 葉

第21期産政塾も個性の強い塾生が集まった。前日（閉塾式）の懇親会の盛り上がりもあり、閉塾式の翌日は、心にぽっかり穴が開いたような感じになっていた。今期は塾生の業務多忙に加え、参議院選挙等による企画の事前準備の遅れに、何度かヒヤヒヤさせられた。しかし、当日にはきっちり企画をやり遂げるところが塾生のすごいところ。

今期は6人の女性が参加することになった。1グループに1人以上女性がいる状況は過去に例がなく、想像できなかったが、一方で楽しみでもあった。場合によっては、女性が多いと色々面倒なこともあるが、この塾生6人に関してはその心配は無用なのが開塾式で会ってすぐにわかった。女性リーダーは誕生しなかったが、みんなが影のリーダーだったと思う。

【第2回】

開塾式が終わり、すぐに最初の企画チームは動き出した。最初の企画としては、「壁を越えろ！」というテーマは産政塾らしいと思った。ただ、フリークライミングは知っていても、ボルダリングは初めて聞いた。当日までの期間が一番短い最初の企画。この企画をきっちり進めれば、他のグループは参考にするのでその後の企画も進めやすくなると先期から学んだので、最初のこの企画だけは事務局としては少し入り過ぎなぐらい入り込んだ。

しかし、なかなか全員集まって事前打ち合わせができなく、結局グループ全員で集まったのは当日だった。

当日、事務局としては、写真も撮らないといけないこともあり、積極的にボルダリングをやるつもりは全く無かった。ただですら幼少期からジャングジムでさえ登るのが怖かったのに（高所恐怖症ではなく、不安定な場所が恐怖）、さらに小さい足場の壁を登るなんて恐怖以外何ものでもない。しかし、塾生からの強いプッシュもあつて同じように体験をすることになった。ネガティブモードが前面に出ていたせいか、結局恥ずかしながら、足を踏み外し落下してしまい、人生初の捻挫をしてしまった。運動不足は否めない。

2回目になる懇親会では、この時間を待っていましたと言わんばかりに盛り上がった。会ってまだ2回目なのに、すでにみんな昔からの知り合いのようにプライベートの話をしていたように思う。今期も楽しくなりそうだと確信した。

【第3回】

この企画の事前打ち合わせは春の取り組み真っ最中の午後に行われた。そして下見日程も決まった。なぜか普通の流れで事務局まで下見に参加し、滝に打たれることになった。当日は3月末とはいえ、ひじょうに寒く、住職がストーブを焚いてくださった。住職から事前に、滝行体験の取材に来たアナ

ウンサーのふざけた態度に激怒されたことを聞いていたので、緊張していた。間違えたらどうしようと思ひながらいぎ、足を水につけると「つめたい!」。(とは声に出して言えない。)冷たいのをがまんしながら、滝に入ると「ノーマクサマング バサラダンカン」と唱えるのも必死だった。歯を食いしばらないと寒くて震えが止まらなかった。

滝に打たれている間は、あまりの寒さで無心にはなれなかったが、体の中にスーッと冷たいきれいな空気が流れてきたような感じを受けた。滝行マニアという人もいるらしいが、このときは、共感することができなかったが、着替えた後、なにかよくわからないがスッキリした気がした。

企画当日は、雨ということもあり雨の音しか聞こえない静かな環境で写経に集中できた。日々の業務に追われている塾生にとつて、1時間以上何も話さず、静かな雨音しか聞こえないような中、集中して何かに取り組むということは滅多に無い経験だと思つた。

すでに、産政塾が始まつて4ヵ月目に入っており、残り3ヵ月で「殻を破らない」と思っている塾生にとつて、ご住職からいただいた「殻は自然に破れるもの」という言葉は内心ホットできたのではないかと思つた。

ちなみに来年3月にみんなで滝行に行くことになった。

【第4回】

事前打合せで集まるのは、リーダーの大野さんの勤務する大丸松坂屋閉店後の20:00以降になった。過去、定時後に集まるといえば、組合の会議室や居酒屋と決まっていたが、このグループはカフェだった。やっぱり同じ労働組合でも若い人はおしゃれな場所を選ばないと正直思った。

なかなか全員が集まらず、なかなか思うように進まずで何度も何度も集まった。宿泊企画ということもあるが、このグループが一番多く集まっている。とても慎重に、慎重に進めているように感じた。事務局が口出しをしたり、誰かが1人で全部やればもしかしたら早く進んだのかもしれないが、ここは産政塾であり、みんなで話し合って、みんなで分担して進めていかないといけない。しかも当日のスケジュールは、ビッシリ。

日本中で問題になったという「豊島（てしま）問題」だったが、恥ずかしながらこの企画で初めて豊島問題を知った。当日、豊島に行つて実際に投機された場所や産廃物の剥ぎ取り層、「豊島 心の資料館」を見て何も言えなくなつた。本当に同じ人間としてこんなことが許されるのか、1度訪問した私たちですら憤りを覚えたのに、豊島の住人の方の気持ちは計り知れない。ご案内いただいた廃棄物対策豊島住民会議の石井様は実際に長年この問題に関わつてみえる方で石井様の説明は塾生全員の心に響いた。あつてはならない現状がこの島にはあつた。

結果、織機労組の深谷さんは当日来られなくなつてしまつたが、ほかの5人でうまく連携とつてスケジュールを進めていった。

【第5回】

このグループは結果は良かったものの、ほかのグループが開塾式の日に分たちの企画について内容がほぼ決まったのに対し、ほとんど決まっていなかった。グループディスカッションが異様に盛り上がったのはわかっていたが、案の定企画が決まらなかった。

雨宮社長は、過去にテレビでも何度か拝見したことがあり、私自身がカンボジアで地雷博物館に行つたときにも雨宮社長を思い出していたほどで、実際にお会いできて感激した。

社長はほんとに気さくな方で、言葉を飾ることなく自らパソコンを操作しながらご講演いただいた。社長の講演は最初から涙が止まらなかった。何故涙が止まらないのか、理由がわからなかった。地雷で手や足のない人がかわいそうという同情ではないのは確かで、社長の言葉ひとつひとつがガンガンと心に響いた。「行動」しなければ何も始まらない。ただ言うだけなら誰でもできる。行動に移せない自分自身に喝を入れてくれた講演だった。自ら率先して行動されている社長の言葉は重みがあった。産政塾が終わつても「広い視野を持つ」ようないろんな経験を積んでいきたい。経験すること無駄なことは無いという気持ちで前向きにいききたいと思った。

【第6回】

第5回の1週間後にトヨタ自動車の太田さんと下見に行った。(ほかのメンバーは都合により行けなかった)当日ガイドをお願いしているHANDSの白木さんはダイハツ工業にお勤めだったとのことで、本来なら依頼者の意向を聞いてから「案内」を引き受けるかどうか判断するそうだが、トヨタグループのメンバーが多くいるということで二つ返事で引き受けてくださった。

下見の日、白木さんが地下にある亡くなられた方の名前のあるところで「これが私の息子なんです」と教えてくださった。その斜め向かいには震災後数年で亡くなられた奥様の名前があった。「ちょうど向かいあついていいでしょう。」と言われていたが、心の中ではそう思っても、言葉が出なかった。その後、喫茶店で打ち合わせをした。そのとき白木さんから震災時の話や、新潟の地震でのことなどいろいろな話を聞いていて涙をこらえるのに必死だった。現在の神戸市は震災の跡も皆無に近く、市役所職員の新任の教育からも外されるところだったという。震災のことは風化させてはならないと思う反面、早く忘れたいと思う人もいるに違いない。

当日は、HANDSのみなさんの案内を聞きながら被災地を回ったり、人と防災未来センターでの語り部の話しや、様々な映像、資料を見て、私自身も家に帰ってから、地震が起きた時どこに避難するのか、今準備しておく物について家族で話し合ったり、実際に必要な3日分の用意を始めた。とにかく命さえあれば何でもできる。そう思った。

【閉塾式】

結局今期も全員が一同に会すときは無かった。どうしたら全員が集まることができるんだろう。せっかく参加費をいただいても1回しか参加できないのは本当にもつたいない。事前の打ち合わせも貴重だし、資料でもある程度のことはわかるが、参加してみないと伝わらないこと、わからないことのほうが多い。個人ではできないことが多い企画だけに、参加できない人がいることが毎回残念でならなかった。ちょうど塾生の世代は、会社でも責任のある仕事を担当していて代わりがいなかったり、組合の人においては会議、打ち合わせで、これも全員出席だったり、代わりがいなかったりで産政塾との間で悩んだ人もいたのではないかと思う。そんな中、皆勤賞が5人もいてひじょうにうれしかった。塾生の努力はもちろん、職場のみなさんのご理解無くして皆勤は成し遂げれない。

この第21期に塾生を送り出していただきました企業、組合の皆様、業務の調整をしていただいた職場の皆様にこの場を借りてお礼申し上げます。

塾生は、自分のグループの企画を作り上げるまでも何度も論議を重ね、また1つの企画を経験した後、毎回ディスカッションをし、自分自身の意見を人前で話し、また違う意見を聞き、共有し、短い期間ではありますが成長したと思います。即効性は無いかもしれませんが、今後の会社生活、私生

活で必ず活かされと思っています。

そして第21期の塾生のみなさん。事務局として厳しいことや、言いたいことも言わせていただきました（ときには事務局の愚痴も聞いていただきました）が、これもいい企画にするためだと思っただけだと思います。みなさんと一緒にたくさん感動できてうれしかったです。ありがとうございます。

產政塾活動記錄

《第1回 開塾式》

- と き：2010年1月22日（金）
- 場 所：WINC あいち
- 内 容：
 - ・第21期産政塾開塾式
 - ・塾長講話
 - ・自己紹介
 - ・グループディスカッション



第21期産政塾 塾生の皆さんと事務局



【塾長講話】 加藤裕治 塾長より塾生へ 『型を見直す』

「こんな時代こそ、1人ひとりが『自分が成長している』と確信が持てる生き方を心がける。それにはまず、基本となる『型』を身につけ、それができたら『型』を破ってみることが大事。」と、ご自身のテニスやジョギングの経験を交えながら、塾生に期待と励ましの言葉をおくりました。

【自己紹介】

1人ひとり自己紹介。緊張しているかと思いきや、入塾の動機、仕事の内容や経歴、趣味などの話もあり、1人2分の制限時間を大幅にオーバーする話し好きの人もたくさんいて、笑いあいの和やかな雰囲気になりました。



【グループディスカッション】

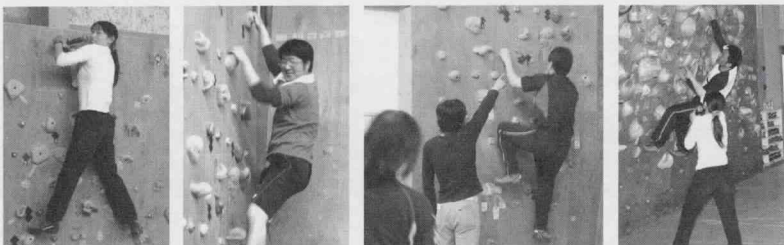
5つのグループに分かれ、全員が持ち寄った企画案をグループで論議し、自分たちのグループの活動テーマを1つ決定。「自分磨き」、「五感を研ぎ澄ます」、「震災に学ぶ」などグループごとの取り組み内容について、それぞれ発表しました。



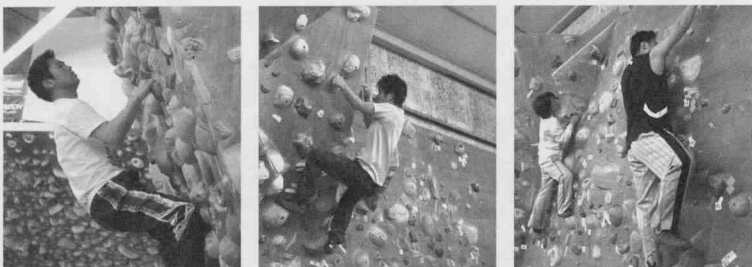
《第2回 テーマ：壁を越えろ！～フリークライミングに挑戦～》

●と き：2010年4月14日（水）

●場 所：神奈川県横浜市 ボルダリングジム「Project」



最初に尾川さんが見本を見せてくれました。実際やってみると足と手をバランスよく移動しないと登れません。ジムの人が指導をしてくださってようやく登ることができました。でも登れるとうれしくて笑顔になりました。



だんだん指導が無くても登れるようになりました。できる人はどんどん難度の高い壁に挑戦していきました。

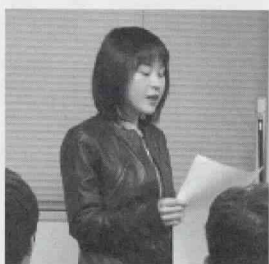
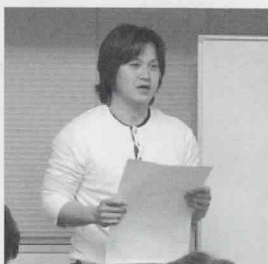
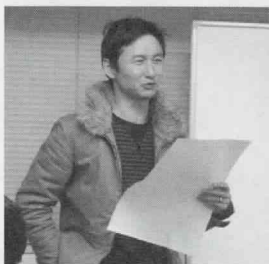




尾川さんからご講話をいただきました。
 「信頼は心だけではつながらない。言葉にしないと伝わらないことがある。」
 「できたときの自分を考えたときに楽しい、ワクワクする。それがチャレンジするエネルギーになる。」
 1つひとつの言葉が体験を通じて発している
 のでとても私たちの心に響きました。



グループディスカッションの中で、塾生1人ひとりが今後チャレンジすることを宣言しました



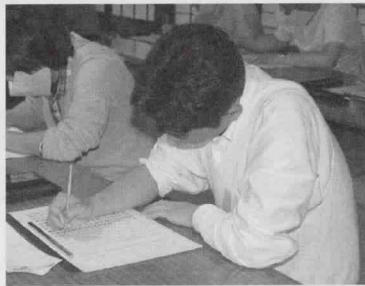
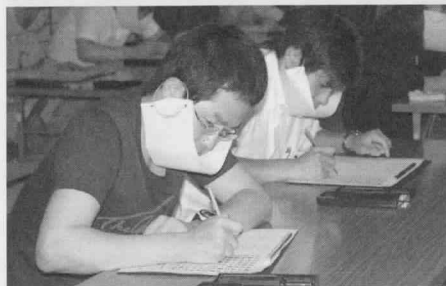
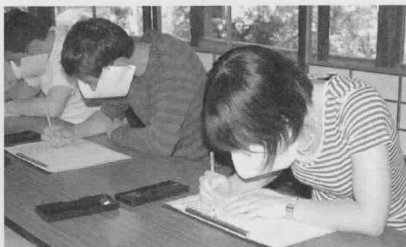
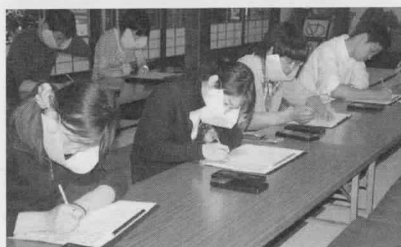
《第3回 テーマ：滝に打たれて自らを磨く ～心が変われば、行動が変わる～》

●と き：2010年5月7日（金）

●場 所：静岡県袋井市 油山寺



ご住職から「聞く耳を持っていれば、参考になることはどこにでもある」などお話をいただきました。



雨音しか聞こえない中で静かに般若心経の写経に集中。ご住職曰く「点、一画に仏様がある。」



緊張の滝行。寒くても、痛くても耐えます。待っている間は滝に打たれている人と同じ言葉を発す。



この日の体験の振り返り、過去の経験などを論議。



ご住職より、
 「1つの体験でみんなで話し合っ
 て何かを得るということはいいい。」
 と講評をいただきました。
 また、産政塾のテーマである「殻
 の外に飛び出そう」については、
 「自分の中に確かにあるもので中
 身が熟してれば自然に割れる」
 とお言葉をいただきました。

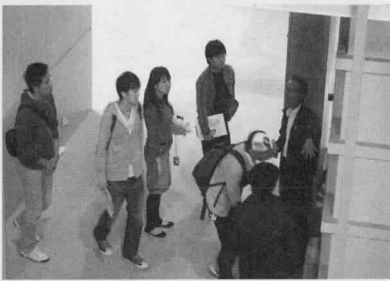
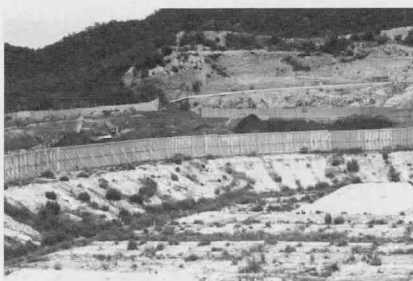
《第4回 テーマ:非日常空間と現実を対比させ、 今一度「豊かさ」とは何かを考える》

●と き: 2010年5月28日(金)・29日(土)

●場 所: 香川県 豊島(てしま)・直島(なおしま)



廃棄物対策豊島住民会議・石井亨氏の案内のもと、不法投棄現場と処理施設を見学。石井氏は公害調停申請代表人として、弁護団とともに調停の最前線におられた方で、心に迫る生のお話を伺うことができました。

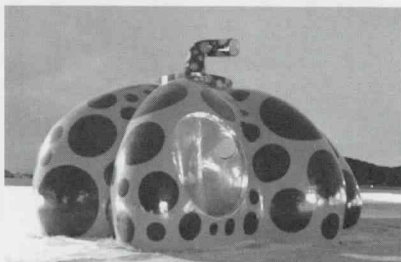
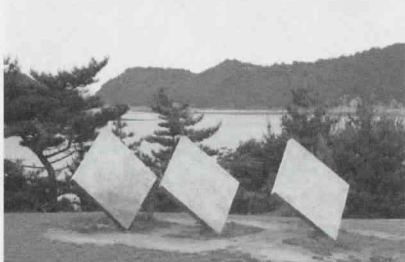




直島にて、実際に自分たちの手で身近な環境改善に取り組むべく、海岸線の清掃活動を行いました。豊島で心に大きな”衝撃”を受けた塾生は、清掃活動を黙々と行っていました。



自然と人間との関係を考える「地中美術館」と、古い民家を作品化する「家プロジェクト」を訪れました。



《第5回 テーマ：行動力の源泉を知る》

●と き：2010年6月18日（金）

●場 所：山梨県南アルプス市 山梨日立建機



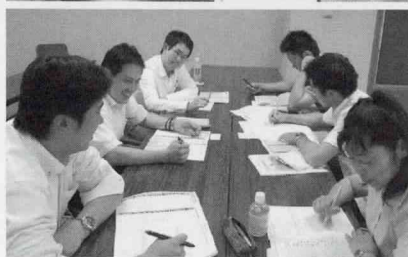
「ものづくり」を大事にされ、現地現物で行動されている、
山梨日立建機 社長 雨宮清氏を訪問し、お話を伺いました。



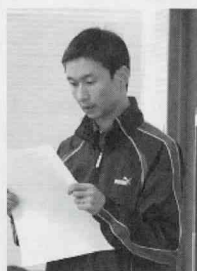
「技術者はものづくりの挑戦者であり、技術の根源はものづくり、人づくりにある」
「ものづくりに完成はなく、人をつくらずして物は作れない」とのこと。



強い信念に裏付けされた、雨宮社長の行動力に触れました



雨宮社長のお話を伺ったうえで、自分の長所短所を自己分析し、「強い信念」「揺ぎ無い決断力」「一歩踏み出す勇氣」について、これからの自分に必要なことを討論しました。



《第6回 テーマ：
人と防災未来センターを訪ねて、
減災のために何ができるか？
～意識醸成について考える～》

●と き：2010年7月16日（金）

●場 所：兵庫県神戸市 人と防災未来センター



NPO法人阪神・淡路大震災「1.17
希望の灯り」の皆さんに震災跡地
をご案内いただきました。





「阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター」を訪れ、震災経験者の語り部の方からお話をいただきました。震災の爪跡を目の当たりにし、被災者の実体験を伺った上で、「のこす」「つたえる」「いかす」ことの大切さについて討論しました。



《第7回 閉塾式》

●と き：2010年8月20日（金）

●場 所：WINC あいち



加藤塾長から塾生へ
激励の言葉



今期の活動を振り返りながら、最後のグループディスカッション。テーマは「殻の外に踏み出そう」



産政塾の経験を活かし、これからのさらなる飛躍を期待しています！

産政塾歴代卒業生

※組織名は参加当時の名称

第2期生	(14名)
------	-------

朝位	克	トヨタ自動車(株)
伊藤	哲	全トヨタ労働組合連合会
太田	雅也	名古屋鉄道(株)
大町	重人	アイシン精機(株)
桑山	幸次	(株)東海銀行
小西	正晃	日本電装労働組合
高橋	恭弘	トヨタ自動車労働組合
種市	章	豊田合成(株)
丹羽	漸	中部電力(株)
松下	恭規	日本電装(株)
水野	和明	全松坂屋労働組合
水野	真二	アイシン労働組合
山内	潔	トヨタ車体(株)
萬谷	孝之	(株)松坂屋

第1期生	(14名)
------	-------

江口	光市	全トヨタ労働組合連合会
尾関	勝隆	(株)松坂屋
加藤	宏幸	日本電装(株)
甲村	正男	トヨタ車体労働組合
清水	和博	松坂屋労働組合
鈴木	智博	中部電力(株)
高木	英樹	名古屋鉄道(株)
土屋	昇大	(株)東海銀行
中山	直人	トヨタ自動車労働組合
平野	富広	日本電装労働組合
本田	文利	豊田合成労働組合
前沼	聡	アイシン労働組合
宮崎	直樹	トヨタ自動車(株)
安井	雅章	アイシン精機(株)

第4期生 (16名)

北村 直久 日本電装労働組合
 竹内 順治 豊田合成労働組合
 朝日 和寛 日本電装(株)
 田中 義和 トヨタ自動車労働組合
 村田 滋 (株)東海銀行
 沢田大八郎 豊田自動織機労働組合
 原 年幸 トヨタ自動車(株)
 中村 武司 アイシン精機(株)
 宮坂 和行 松坂屋労働組合
 山田 法夫 名古屋鉄道(株)
 秋葉 覚 中部電力(株)
 駒沢 修 アイシン労働組合
 岡 啓視 中部電力労働組合本部
 加藤 秀夫 トヨタ車体労働組合
 松野景之介 トヨタ車体(株)
 相原 康伸 全トヨタ労働組合連合会

第3期生 (14名)

石鍋 寿久 トヨタ自動車労働組合
 大島 一峰 アイシン精機(株)
 大西 勝彦 豊田自動織機労働組合
 神谷 直 アイシン労働組合
 岸田 竜茂 中部電力(株)
 雲井 浩 丸栄労働組合
 近藤 郁也 トヨタ車体(株)
 島川誠一郎 トヨタ自動車(株)
 関谷 俊司 日本電装(株)
 竹下 裕之 トヨタ車体労働組合
 塚本 和宏 全松坂屋労働組合
 遠山 泰弘 日本電装労働組合
 深谷 修 豊田合成(株)
 宮川 学 名古屋鉄道(株)

第6期生 (15名)

林 恭吾 丸栄労働組合
 竹内 秀明 中部電力(株)
 近藤 均 トヨタ車体(株)
 光岡 博 アイシン労働組合
 向井 克行 日本電装(株)
 説田 公人 トヨタ自動車(株)
 中村 文彦 松坂屋労働組合
 高橋 誠 トヨタ自動車労働組合
 本田 武志 アイシン精機(株)
 伊藤 裕章 豊田合成(株)
 大島 秀一 名古屋鉄道(株)
 森 晴哉 日本電装労働組合
 横田 晴充 (株)東海銀行
 桑山 完治 中部電力労働組合本部
 石川 勝幸 全トヨタ労働組合連合会

第5期生 (17名)

斉藤 正彦 丸栄労働組合
 橋本 亨 トヨタ車体(株)
 田島 健一 松坂屋労働組合
 稲川 敦之 名古屋鉄道(株)
 荒谷 育三 日本電装(株)
 高井 信弘 豊田合成(株)
 長尾 基晴 アイシン精機(株)
 洲崎 典之 日本電装労働組合
 渡辺 潔 アイシン労働組合
 上田 信也 全トヨタ労働組合連合会
 杉浦 一成 トヨタ車体労働組合
 内田 厚 中部電力労働組合
 加藤 泰孝 中部電力(株)
 荻野 勝彦 トヨタ自動車(株)
 加藤 昭夫 トヨタ自動車労働組合
 磯部 謙二 日本特殊陶業(株)
 二木 芳樹 (株)東海銀行

第8期生 (22名)

有賀 文昭 中部電力労働組合
 伊藤 賢一 トヨタ車体(株)
 伊藤 友博 松坂屋労働組合
 岩城 史憲 名古屋鉄道(株)
 植松 良太 全トヨタ労働組合連合会
 粕谷 浩二 豊田市役所
 川村 淳一 豊田工機労働組合
 栗栖 秀人 (株)東海理化
 佐野 弘忠 中部電力(株)
 杉浦 公紀 アイシン労働組合
 中條 喜之 (株)デンソー
 所 秀樹 関東自動車工業(株)
 丹羽 広志 豊田合成労働組合
 根本 恵司 トヨタ自動車(株)
 服部 健司 デンソー労働組合
 早川 範一 (株)松坂屋
 廣瀬 登 (株)東海銀行
 船戸 正巳 アラコ(株)
 前田 孝広 丸栄労働組合
 前田 直人 トヨタ車体労働組合
 百瀬 和典 トヨタ自動車労働組合
 森本 浩二 アイシン精機(株)

第7期生 (17名)

川村 博隆 アイシン労働組合
 阿久津正典 豊田市役所
 村瀬 俊 日本電装(株)
 河路 直人 豊田合成労働組合
 小林 雅昭 全トヨタ労働組合連合会
 臼井 満 松坂屋労働組合
 星野 悟 中部電力(株)
 柴田 伸彦 中部電力労働組合
 小倉 克幸 トヨタ自動車(株)
 勝美寿美子 アイシン精機(株)
 西田 明生 トヨタ自動車労働組合
 高橋 剛 日本特殊陶業(株)
 吉田 茂 トヨタ車体(株)
 三川 高市 丸栄労働組合
 高井 康之 (株)東海銀行
 吉川 篤史 名古屋鉄道(株)
 田中 英司 日本電装労働組合

第10期生 (21名)

石川 輝彦 アイシン労働組合
 奥田竜太郎 トヨタ車体(株)
 糟谷 道広 (株)デンソー
 門 孝裕 松坂屋労働組合
 川上 茂浩 中部電力(株)
 小坂 好伸 アイシン精機(株)
 近藤 理史 豊田市役所
 杉本 道男 日本特殊陶業(株)
 鈴木 亨 トヨタ車体労働組合
 鈴木 康紀 アラコ(株)
 高橋 勝将 デンソー労働組合
 丹下 隆吉 トヨタ自動車(株)
 徳増 達生 アスモ(株)
 戸田 覚 (株)東海銀行
 西井 俊哉 丸栄労働組合
 船間 淳也 名古屋鉄道(株)
 松田 斉 全トヨタ労働組合連合会
 武藤 成洋 豊田合成(株)
 安田 幸治 トヨタ自動車労働組合
 矢田 勝弘 フタバ産業(株)
 常 兆 名古屋大学

第9期生 (21名)

足立 貴彦 松坂屋労働組合
 石井 直生 トヨタ自動車(株)
 伊藤 裕介 豊田工機労働組合
 宇野 庄一 全トヨタ労働組合連合会
 江口 淳 豊田合成(株)
 見城 篤 中部電力(株)
 榊原 悦人 丸栄労働組合
 坂口 登 (株)東海銀行
 柴田 徹哉 豊田市役所
 須崎 辰彦 トヨタ車体労働組合
 玉木 健二 中部電力労働組合本部
 恒川 智行 アイシン労働組合
 中出 裕之 関東自動車工業(株)
 浜口 誠 トヨタ自動車労働組合
 林 克憲 (株)デンソー
 平岡 典明 アイシン精機(株)
 古川 豊 日本特殊陶業(株)
 本多 篤 トヨタ車体(株)
 前川 武治 デンソー労働組合
 山田 泰準 名古屋鉄道(株)
 山本 雅章 アラコ(株)

第 12 期生 (22 名)

内田 幸代 豊田市役所
 江尾 国博 名古屋鉄道(株)
 梶川 拓也 中部電力(株)
 柏谷 幸彦 豊田合成(株)
 加藤 秀人 トヨタ車体労働組合
 後藤 泰司 丸栄労働組合
 近藤 雅人 (株)豊田自動織機
 高橋 正典 デンソー労働組合
 武田 純康 トヨタ自動車労働組合
 竹中 隆志 松坂屋労働組合
 鶴見 実男 アイシン労働組合
 寺西 知雄 東邦ガス労働組合
 中里 浩一 (株)U F J 銀行
 中村 明史 中部電力労働組合本部
 芳賀 章弘 トヨタ車体(株)
 長谷部知英 フタバ産業(株)
 羽根 章人 アラコ(株)
 本田 隆英 アイシン精機(株)
 松尾 正樹 (株)デンソー
 水野 勝博 全トヨタ労働組合連合会
 村瀬 政彦 トヨタ自動車(株)
 若松 真理 全ユニー労働組合

第 11 期生 (25 名)

池浦 芳一 トヨタ車体(株)
 石本 誉 デンソー労働組合
 板倉 智宏 全ユニー労働組合
 上別府伸一 アイシン労働組合
 大嵐 隆之 (株)豊田自動織機
 岡本 雅典 アスモ労働組合
 小野田和広 丸栄労働組合
 柴田 博 フタバ産業(株)
 締次 顕治 松坂屋労働組合
 常 兆 名古屋大学 大学院 国際開発研究科
 杉下 昌明 東邦ガス労働組合
 大東 輝彦 (株)東海銀行
 高木 敏光 名古屋鉄道(株)
 高田 学 アイシン精機(株)
 滝野 仁 日本特殊陶業(株)
 武田 和則 中部電力労働組合本部
 鶴岡 光行 トヨタ自動車労働組合
 中村 英行 アラコ(株)
 林 賢士 豊田合成(株)
 三谷 建介 中部電力(株)
 武藤 俊和 トヨタ車体労働組合
 森 崇博 全トヨタ労働組合連合会
 山崎 一生 トヨタ自動車(株)
 横井 雅弘 (株)デンソー
 渡辺 明子 豊田市役所

第 14 期生 (22 名)

浅野 清輝 東海理化労働組合
 大川 博 デンソー労働組合
 奥 丈治 株式会社松坂屋
 梶田 進 トヨタ車体株式会社
 梶原 昭二 豊田自動織機労働組合
 川崎 貴之 株式会社デンソー
 栗原 尚子 アイシン精機株式会社
 小嶋 直樹 松坂屋労働組合
 佐藤 源信 アラコ株式会社
 白井 崇夫 刈谷市役所
 鈴木 輝行 全トヨタ労働組合連合会
 鈴木 利幸 中部電力労働組合
 苑田 隆之 中部電力株式会社
 千種 徳充 トヨタ車体労働組合
 柘植 孝悦 豊田市役所
 長岡 享史 トヨタ自動車株式会社
 藤原 誠二 アラコ労働組合
 堀田 大祐 名古屋鉄道株式会社
 山口 健 トヨタ自動車労働組合
 山下 邦彦 アイシン労働組合
 吉田 研太 株式会社豊田自動織機
 渡辺 憲司 丸栄労働組合

第 13 期生 (21 名)

井上 正勝 トヨタ自動車労働組合
 内田 恭介 中部電力労働組合本部
 梅田 清孝 フタバ産業(株)
 太田 正樹 松坂屋労働組合
 門井 徳孝 デンソー労働組合
 熊崎 俊哉 トヨタ車体(株)
 佐野 智弘 アイシン精機(株)
 鈴木 定晴 トヨタ車体労働組合
 鈴木 武 名古屋鉄道(株)
 田中 亘人 (株)豊田自動織機
 多和田光紀 豊田市役所
 出口 隆浩 全トヨタ労働組合連合会
 中川 年史 アイシン労働組合
 野坂 利次 トヨタ自動車(株)
 服部 淳二 豊田工機労働組合
 水野 雅通 アスモ労働組合
 宮城 英樹 (株)デンソー技研センター
 村口 文希 刈谷市役所
 森 章浩 (株)U F J 銀行
 森 勝 東邦ガス労働組合
 山本 徹真 アラコ(株)

第 16 期生 (24 名)

青山 泰孝 全ユニー労働組合
 赤川 直也 トヨタ紡織労働組合
 安東 英二 松坂屋労働組合
 大橋 弘章 中部電力株式会社
 小川 恵孝 トヨタ紡織株式会社
 加藤 基成 株式会社豊田自動織機
 小西 圭造 トヨタ自動車労働組合
 小林竜太郎 デンソー労働組合
 酒井 推幾 豊田工機労働組合
 佐宗 晋治 アイシン精機株式会社
 佐々 慎治 トヨタ車体株式会社
 高橋 鉦二 トヨタ自動車株式会社
 竹下太一郎 全トヨタ労働組合連合会
 田中丸 庸 株式会社デンソー
 富田 晃弘 名古屋鉄道労働組合
 中根 陽造 東邦ガス労働組合
 中野 将 豊田市役所
 服部 敦哉 豊田自動織機労働組合
 番条 喜芳 中部電力労働組合
 平野 元章 刈谷市役所
 宮川修一郎 フタバ産業株式会社
 山口 覚 アイシン労働組合
 吉續 武俊 トヨタ車体労働組合
 吉原 昭浩 株式会社松坂屋

第 15 期生 (25 名)

池田 真生 刈谷市役所
 石原 英児 名古屋鉄道労働組合
 海野 孝宏 アイシン精機株式会社
 越田 弘幸 松坂屋労働組合
 大河原宏樹 アラコ株式会社
 大橋 一之 全トヨタ労連組合連合会
 片山 伸子 豊田市役所
 倉沢 範行 中部電力労働組合
 洲崎 浩一 アイシン労働組合
 洲崎 晃嘉 豊田合成労働組合
 千田 路征 トヨタ車体労働組合
 立松 学 トヨタ自動車労働組合
 棚橋 克成 株式会社松坂屋
 奈須 克昭 トヨタ車体株式会社
 野々垣 一 株式会社豊田自動織機
 早矢仕 環 豊田工機労働組合
 原 誠治 アスモ株式会社
 藤牧 知広 中部電力株式会社
 別宮健一郎 丸栄労働組合
 水越 宏明 デンソー労働組合
 山浦 宏行 トヨタホーム株式会社
 山添 勇人 株式会社デンソー
 山本 浩晃 全ユニー労働組合
 吉川 浩二 豊田自動織機労働組合
 吉本 雅教 トヨタ自動車株式会社

第 18 期生 (25 名)

山口 久雄 東海理化労働組合
 吉清 一博 トヨタ自動車株式会社
 稲垣 隆宏 東邦ガス労働組合
 大倉 吉貴 トヨタ紡織株式会社
 太田 洋純 名鉄労連
 河野 成康 アイシン労働組合
 北原 航太 株式会社東海理化
 金原 昭仁 豊田市役所
 作山 淳 トヨタ自動車株式会社
 佐藤 正樹 松坂屋労働組合
 島田 裕毅 株式会社デンソー
 白井 雅子 アイシン精機株式会社
 鈴木 雅司 トヨタ車体株式会社
 高橋 弘行 中部電力労働組合
 田中栄太郎 デンソー労働組合
 中川 利文 中部電力株式会社
 早川 啓太 刈谷市役所
 平賀 隆 全トヨタ労働組合連合会
 広田 真朗 株式会社豊田自動織機
 藤田 茂徳 丸栄労働組合
 舟橋 史洋 トヨタ車体労働組合
 古川 憲 豊田自動織機労働組合
 水野 栄 豊田合成株式会社
 森谷 東也 トヨタ自動車労働組合
 矢野 悟 フタバ産業株式会社

第 17 期生 (27 名)

荒居 昭治 全ユニー労働組合
 石田 保志 名古屋鉄道労働組合
 井戸田章弘 トヨタ車体労働組合
 岩田 将弘 アイシン精機株式会社
 大澤 秀樹 東邦ガス労働組合
 大橋 俊介 トヨタ自動車株式会社
 加藤 章子 刈谷市役所
 加藤 明人 全トヨタ労働組合連合会
 木村 匡伸 デンソー労働組合
 古賀 博義 アイシン労働組合
 近藤 邦博 豊田市役所
 佐々木澄和 東海理化労働組合
 塩谷 武司 トヨタ紡織株式会社
 志岐 宣浩 豊田工機労働組合
 品川誠二郎 株式会社松坂屋
 田中 光明 アスモ労働組合
 野田 雅子 株式会社豊田自動織機
 長谷川真次 豊田自動織機労働組合
 樋山 卓造 東邦ガス株式会社
 前川 紘子 丸栄労働組合
 益田 寛 トヨタ車体株式会社
 増田 裕介 中部電力株式会社
 松井 正和 松坂屋労働組合
 松本雄一郎 株式会社デンソー
 水谷雄一郎 豊田合成株式会社
 三谷 勝行 トヨタ自動車労働組合
 村井 真一 中部電力労働組合

第 20 期生 (26 名)

池田 篤人 トヨタ自動車株式会社
 石川 公威 デンソー労働組合
 伊藤 正人 トヨタ車体株式会社
 井前研太郎 トヨタ紡織株式会社
 遠藤 登 東邦ガス労働組合
 太田 敏 東邦ガス株式会社
 大野田有良 ジェイテクト労働組合連合会
 沖本 匡司 中部電力株式会社
 柿本 理恵 豊田市役所
 蔵田 英登 アイシン精機株式会社
 鈴木 貴裕 丸栄労働組合
 鈴木 祐生 全トヨタ労働組合連合会
 田中やよい 株式会社松坂屋
 田村 元 株式会社デンソー
 外山遥一朗 株式会社豊田自動織機
 内藤 隆史 刈谷市役所
 長倉 健司 豊田自動織機労働組合
 中村 隆誠 全ユニー労働組合
 永谷 啓介 トヨタ紡織株式会社
 三宅 洋右 豊田合成労働組合
 山口 智史 トヨタ車体労働組合
 與後 誠 中部電力労働組合
 横井 功 名古屋鉄道労働組合
 吉川 孝人 東海理化労働組合
 六城 雅隆 アイシン労働組合
 脇坂 一行 トヨタ自動車労働組合

第 19 期生 (28 名)

新金 恵介 アイシン精機株式会社
 泉 祐輔 東邦ガス株式会社
 上田 治 トヨタ紡織株式会社
 大田 秀幸 ジェイテクト労働組合連合会
 荻野 聡子 松坂屋労働組合
 小澤 真純 関東自動車工業株式会社
 小野 彰之 株式会社東海理化
 北村 美帆 デンソー労働組合
 日下喜与美 アイシン労働組合
 熊谷 靖公 株式会社デンソー
 近藤 智也 全ユニー労働組合
 坂西 記明 名古屋鉄道労働組合
 佐々木麻子 刈谷市役所
 高橋 慎二 豊田合成株式会社
 高橋 哲也 全トヨタ労働組合連合会
 筑尾 康範 丸栄労働組合
 中條 圭祐 豊田市役所
 塗師尾 充 トヨタ車体労働組合
 中和田教仁 中部電力株式会社
 堀内 清明 豊田自動織機労働組合
 松浦秀登志 東邦ガス労働組合
 松尾康史郎 愛知製鋼株式会社
 三田地勇也 中部電力労働組合
 皆川 和孝 トヨタ車体株式会社
 森下 宏浩 トヨタ自動車労働組合
 柳瀬 翼 株式会社豊田自動織機
 山口 久雄 東海理化労働組合
 吉清 一博 トヨタ自動車株式会社

第21期生	(27名)
-------	-------

青木 寿夫 名古屋鉄道労働組合
赤井 康夫 トヨタ紡織労働組合
安藤 慎悟 デンソー労働組合
石神 良介 株式会社豊田自動織機
伊藤 篤史 ジェイテクト労働組合
今泉 基 アイシン労働組合
太田 寛 トヨタ自動車株式会社
大野 将幸 大丸松坂屋百貨店労働組合
加藤 貴子 トヨタ紡織株式会社
兼松 誠也 トヨタ車体株式会社
河井 勝貴 東邦ガス株式会社
川田 静枝 丸栄労働組合
後藤 幸治 トヨタ自動車労働組合
子安 隆太 株式会社デンソー
坂田 奈穂 アイシン精機株式会社
篠田 雄介 全トヨタ労働組合連合会
新開 寛 トヨタ車体労働組合
高田 正則 フタバ産業株式会社
棚橋 靖仁 豊田市役所
寺澤 貴宏 全ユニー労働組合
戸田 有香 株式会社東海理化
橋本 善和 東邦ガス労働組合
馬場 裕美 豊田合成労働組合
原 丈衛 豊田合成株式会社
平林 克章 中部電力株式会社
深谷 英貴 豊田自動織機労働組合
福田さや子 中部電力労働組合

産 政 塾 21

2011 年 3 月発行

編 者 財団法人 中部産業・労働政策研究会

住 所 〒 471-0833

愛知県豊田市山之手 8 丁目 131 番地

全労済豊田会館 3 階

T E L 0565-27-2731

印刷所 (有) 第一プリント社

製本所 山 本 製 本

塾 政 産

塾 長 加藤 裕治

塾 生

名古屋鉄道労働組合	青木 寿夫
トヨタ紡織労働組合	赤井 康夫
デンソー労働組合	安藤 慎悟
株式会社豊田自動織機	石神 良介
ジェイテクト労働組合	伊藤 篤史
アイシン労働組合	今泉 基
トヨタ自動車株式会社	太田 寛
大丸松坂屋百貨店労働組合	大野 将幸
トヨタ紡織株式会社	加藤 貴子
トヨタ車体株式会社	兼松 誠也
東邦ガス株式会社	河井 勝貴
丸 栄 労働 組 合	川田 静枝
トヨタ自動車労働組合	後藤 幸治
株式会社デンソー	子安 隆太
アイシン精機株式会社	坂田 奈穂
全トヨタ労働組合連合会	篠田 雄介
トヨタ車体労働組合	新開 寛
フタバ産業株式会社	高田 正則
豊 田 市 役 所	棚橋 靖仁
全ユニー労働組合	寺澤 貴宏
株式会社東海理化	戸田 有香
東邦ガス労働組合	橋本 善和
豊田合成労働組合	馬場 裕美
豊田合成株式会社	原 丈衛
中部電力株式会社	平林 克章
豊田自動織機労働組合	深谷 英貴
中部電力労働組合	福田さや子

中 部 産 政 研 高橋 若葉